第十一回 松本清張 Matsumoto Seicho

研究奨励事業

研究報告

松本清張が追い求めたヨーロッパの幻影を求めて
―欧州統合運動の隠された一面―

筑波大学　前田　洋平

北九州市立
松本清張記念館

松本清張が追い求めたヨーロッパの幻影を求めて

―欧州統合運動の隠された一面―

筑波大学　前田　洋平

目次

研究にあたって　1

序章　敬愛なるウィンストン・チャーチル公へ　1

第一章　新しい世界秩序　6
第一節　パン・ヨーロッパ
第二節　チャーチルのヨーロッパ合衆国
第三節　チャーチルとクーデンホーフ
第四節　セミ・オフィシャルな主体

第二章　冷戦の中のヨーロッパ統合―あるいは対立の予兆―　24
第一節　フルブライトの提案
第二節　マーシャル・プラン
第三節　プラハ―冷戦の狭間―

第三章　対立のはじまり　38
第一節　連邦制と連合制
第二節　ハーグ会議
第三節　イギリス労働党の動き
第四節　明かされる構想―大西洋世界の中心として―

第四章　シューマン・プラン―あるいは対立の終焉―　67
第一節　イギリスとヨーロッパ大陸
第二節　沈黙するチャーチル
第三節　忘却

終章　拡大するヨーロッパ　84
―クーデンホーフとチャーチルの遺産―

研究を終えて　89

研究にあたって

松本清張氏は作品『暗い血の旋舞』において、ハプスブルク帝国の貴族に嫁いだ青山光子という女性の足跡を追うことで、それまであまり語られてこなかったハプスブルクの貴族社会の闇に迫り、近親による結婚など隠された一面を明らかすることを試みた。

青山光子という明治の日本人女性を切り口にして、二〇世紀初頭のハプスブルク帝国あるいは中央ヨーロッパを描いたのである。

本研究は、さらに踏み込んで、青山光子の息子であるリヒャルト・エイジロウ・クーデンホーフ＝カレルギーが指導した「パン・ヨーロッパ」という欧州統合運動を切り口として、イギリスをはじめアメリカ、ロシア・ソ連という超大国の思惑に翻弄されるヨーロッパの姿を浮き彫りにすることを目的とする。

序章　敬愛なるウィンストン・チャーチル公へ

スイス、ジュネーブのはずれにあるコペーという町の古城に、ある人物の個人文書が遺されている。

「欧州統合の父」と呼ばれるその人物は、リヒャルト・栄次郎・クーデンホーフ＝カレルギーという。栄次郎という日本名をもっているのは、かれが日本人の母を持ち、日本で生まれたからだ。

クーデンホーフは、一八九四年一一月一七日、東京の牛込で骨董商を営む青山家の娘、青山光子とハプスブルク帝国の伯爵で外交官として東京に赴任していたハインリッヒとの間に、次男として誕生した。

かれが三歳のころ、一家は父ハインリッヒの領地であるボヘミアへ帰郷した。以来、ヨーロッパ人として成長したクーデンホーフは、欧州の国際政治に深くかかわり、「パン・ヨーロッパ」と称する欧州統合運動の指導者となった。

「パン・ヨーロッパ運動」は、現在のＥＵ(欧州共同体)の礎を築いたといわれ、クーデンホーフを「欧州統合の父」と呼ぶものもいる。

ヨーロッパ人の両親のもとに生まれ、ヨーロッパに育った者が統合運動をおこなうというのならば、素直に納得ができる。しかし、ハーフが、それも日本という遠く離れた極東にルーツを持つ人物がヨーロッパの統合の礎を築いたという事実には驚きを隠せない。

クーデンホーフとはいかなる人物で、パン・ヨーロッパがどのような政治運動であったのだろうか。

二〇〇八年、夏。私は、かれの個人文書を求めて、コペーに赴いた。

ジュネーブの古文書館

コペーは、ジュネーブ市の中心地から一四キロほどレマン湖の左岸を北上したところにある。ジュネーブ駅から普通列車で二三分。運良く特急に乗れれば、九分で到着する。料金にすれば、片道六スイス・フラン、日本円にして六〇〇円ほどだ。

レマン湖のほとりに点在している無数の町は、ロシア革命の直前までバクーニンやレーニンをはじめとする多くのロシアの革命家が滞在していたことで知られている。

湖のうしろにはアルプス山脈がそびえ立っている。一年中雪化粧をほどこしたままの壮大なアルプス山脈と透き通った蒼い湖は訪れる者を魅了する。ロシアの革命家が亡命先にこの地を選んだのは、祖国の追っ手から逃れられるということだけが理由ではないだろうと邪推してしまう。それほどレマン湖のほとりの穏やかな環境は、思索をめぐらせるには理想的な場所だ。

ただし、ここの土地の住人の前でアルプスの美しさを迂闊に口に出してはいけない。少しでもその美しさを口にすれば、住人たちは「あれはフランスの山だ」といって気分を害してしまうからだ。たしかに、湖の向こうはフランスだ。ここは国境の町なのだ。

目的の古城は、駅のすぐそばにあった。

かつて貴族の別荘であったというその古城は改築され、いまでは全面がピンク色に塗装されている。

今日、ヨーロッパの多くの町でみかけるそのピンク色は、中世からの石造りの重厚な印象をかき消し、まるでプラスチック製のおもちゃの世界に一変させてしまうことがよくある。しかし、ここでは透き通るような青い空と鮮やかな蒼い湖にはさまれて、ピンク色の古城はむしろ幻想的で美しい。

城門をくぐり、前庭を抜け、城の入り口に近づく。左側の塔の入り口のちいさな木製の扉の取っ手には、「ジュネーブ大学ヨーロッパ研究所」という看板が掛けられている。

扉に手を伸ばすと、鍵ははずされていた。

押し開けてみると、扉の向こうは階段になっている。

一度に大量の敵兵が場内に侵入するのを防ぐためだろうか。両脇を石の壁で囲まれた螺旋階段の幅は極端に狭く、階段は一段がとても高い。

両脇の石の壁に手をつきながら、私は大股で階段を上がった。外からの光はほとんど入ってこない。天井につりさげられたちいさな裸電球の光だけが頼りだった。

ようやく、一階分をのぼりきると右手に大きな木製の扉を見つけた。今度も鍵は開けられている。扉を押し開けると城を横切る長い廊下につながっていた。廊下の左側にいくつもの部屋が並び、右側は中庭に面した窓になっている。

廊下にはだれもいない。

一番手前の部屋の扉をノックしてみる。

みしっ、みしっ、という足音に続いて、勢いよく扉が開けられた。

「グッド・モーニング」

短パンにTシャツ。薄手のセーターを肩に掛けた大男がそういった。

「日本から来た人だね。私が館長のルボール・ジレクです」

館長という言葉の響きとかれの服装のギャップに圧倒されてしまった私は、「はい」と答えるのが精一杯だった。

館長が私が尋ねてくることを知っているのは、私があらかじめ日本でこの城の住所と連絡先を調べ、史料を閲覧することが可能なことを確認するためにEメールを送っていたからだ。

「さっそく、あなたの見たがっている史料たちを見せよう」

そう言うと、館長は短パンのポケットから鍵の束を取り出して、隣の部屋の扉を開けた。

一二〇平方メートルはあろうかと思われる広々としたその一室に私の目的

の史料は保管されていた。

*

部屋の一側面に備え付けられた縦二メートル、横六メートル程の白い鍵のかかった棚の扉を開けると、厚さ一五センチほどのファイルボックスがぎっしりと並べられている。しかし、几帳面に整理されているというわけではない。ファイルボックスには大まかな目印が記されている。クーデンホーフがたずさわったと思われる国際会議の史料、著書の下書き、構想メモ、新聞への投書などにわけられていた。そのなかでも、いちばん多くのファイル・ボックスを使用しているのが往復書簡だった。よくみてみると、往復書簡は年代順に分けられていることがわかった。ファイルボックス一箱分で一年分となっていることが多い。しかし、文通が多い時期では一年で三箱分におよぶ時もある。

「一度に一箱のみの閲覧しか許されない」と館長は説明した。

一箱が終われば、隣室にいる館長に頼み、別の箱を指定して鍵のかかった棚からそれを取り出してもらうというシステムなのだという。つまり、館長の許可を得ていない史料を私が勝手にみることは許されないということだ。それほど史料の扱いは慎重だった。

「さあ、どの箱が見たい」

遠く日本からはるばるやってきた若者にたいして館長は強い好奇心を示した。どの箱を指定するかで、私がどれほどクーデンホーフについての知識があるのかを見定めようとしているのだろう。

しかし、私は「クーデンホーフとはいかなる人物で、パン・ヨーロッパはどのような政治運動だったのか」という実にあいまいで漠然とした問題意識しかなかった。史料を見てみればなにかわかるだろうというあまい認識だった。

本音をいえば、往復書簡を年代順にみせてくださいといいたくてたまらなかった。しかし、それでは見くびられてしまう。これは私を試すテストなのだ。

見栄っ張りな私は、一九四八年のファイルボックスを指定した。

館長は、ジロリと私を見た。

「なぜ、一九四八年なのかな？」

大柄な館長は、私の頭上から覆いかぶさるようにして私の顔を凝視した。大きな水色の目玉が威圧的だ。

後ずさりしそうになるのを懸命にこらえて、私は答えた。

「クーデンホーフの欧州統合運動と社会主義との関係について興味があるからです。一九四八年は、チェコスロバキアに共産主義政権が樹立した年です。クーデンホーフは現在のチェコで幼少期を過ごしていました。なにか関係があるかもしれません」

でっち上げの理由だった。

館長の水色の目玉はまだ私の顔を覗き込んでいる。

「クーデンホーフと社会主義に接点はほとんどないはずだ。なにか証拠があるのですか」

「証拠はありません。ないから探しにきたのです。社会主義との関係が絶対にないといいきれますか。国家の枠組みを超越した共同体を構築しようとする欧州統合思想は、社会主義に通じるのではないですか」

水色の目玉は、私の顔を捉えて離さない。私は、その圧力に押し潰されそ

うだった。

沈黙が続いたのはほんの数秒だったのかもしれない。しかし、私には五分にも感じられた。館長が棚の方に目をそらした。そして、微笑みながら一九四八年のファイルボックスを取り出した。

「まあ、調べてみるといいですね」

テストにパスした。どうにか、認めてもらえたようだ。

「隣の部屋にいますので、別のファイルボックスが欲しくなったり、なにか問題が起ったら声をかけてください。幸運を祈ります。ああ、それから」と、館長は付け加えて、大きな足音を響かせながら隣の部屋に駆け込んだ。しばらくして、本を手にして戻ってきた。

フランス語の本だった。タイトルは『二〇世紀の欧州統合』となっている。その本を私の前に差し出した。

私が、不思議な顔をしていると館長はいった。

「パン・ヨーロッパ運動について書かれた論文や資料の一部です。あなたは、まだ読んだことがないのでしょう。パン・ヨーロッパ運動に関する最低限の知識がここに書かれています」

クーデンホーフについて調べるならば、事前に読んでから来るべきだ。お前は勉強不足なのだ、といわれているようだった。

私は、ありがとうございますといって素直に受け取った。

「オーケー。では、幸運を」

そう言うと、館長は部屋を出て行った。

館長がいなくなると、部屋は静まり返った。時々、風が窓ガラスをこする音が響いた。

ようやく落ち着いた私は、ファイルボックスに乱雑に詰め込まれた数百通もあろうかと思われる書簡を取り出した。

日本語こそ話さないが、語学の達人だったといわれるクーデンホーフは、フランス語、ドイツ語、イタリア語といった多くの言語で、多くの国の人びとと書簡を交わしていた。

私は、イタリア語は皆目わからないが、ドイツ語とフランス語ならば辞書を使えばそれなりに理解することはできる。しかし、長い作業になりそうだ。

たったひとつのファイルボックスに収納されている書簡を読むだけで一日が終わってしまいそうだ。このようなファイルボックスがまだ大量にある。これだけの書簡すべてに目を通すことは、一週間という限られた調査期間では不可能だ。効率的に書簡に目を通すためには、日本にいるうちに、あらかじめ狙いを定めておかなくてはならなかったのだ。私は、自らの無謀さを後悔した。

しかし、途方に暮れてばかりはいられない。さっそく書簡に目を通し始めた。すると、英語で書かれた書簡が目に飛び込んできた。

「敬愛なるウィンストン・チャーチル公へ」と綴られていた。

偶然にも、私はイギリスの政治家ウィンストン・レオナード・スペンサー・チャーチルに宛てられた書簡を見つけてしまったのだ。

それも、ふたりの間に深い関係があったことを匂わせるものだった。

敬愛なるウィンストン・チャーチル公へ　　一九四八年三月二五日

私たちのそれぞれの組織の統合交渉の主導権を握っているのはあなたなので、その問題について私からダンカンに送った手紙を同封します。

あなたにはお分かりのことと信じていますが、私には私のつくりあげた組織と生涯を捧げてきた運動を放棄することなどできないのです。四半世紀をかけて、ほんのちっぽけな始まりの時期から、こんにちのクライマックスにいたるまで生涯をこの運動に捧げてきたのです。

しかし、この大陸をその暗黒の時代から救い出しヨーロッパの最も偉大な人物とヨーロッパ統合のリーダシップを分つことができるのであれば、それを誇りに思います。

こころから幸運を祈って、

リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー[1]

イギリスの政治家ウィンストン・チャーチルに宛てられたこの書簡は、クーデンホーフとチャーチルの間に激しい対立があったことを物語っている。この書簡が交わされたとき、クーデンホーフは五四歳。チャーチルは七四歳だった。

クーデンホーフが記している「生涯を捧げた運動」とは、おそらくパン・ヨーロッパ運動のことだろう。

チャーチルは、クーデンホーフにそのパン・ヨーロッパ運動を「放棄」することを迫り、自らが主導権を得ようとしている。欧州統合運動の主導権を手に入れようとしているのだ。

「放棄」を迫られたクーデンホーフは、我を忘れて自分を指導者の立場から引きづり降ろさないよう、「ヨーロッパ統合のリーダーシップを分かちあいたい」とチャーチルに懇願している。「リーダーシップを分かちあう」ことが、かれにとって精一杯の譲歩だったのかもしれない。

現在、イギリスは欧州統合に積極的ではないといわれている。EU加盟国であるにもかかわらず、いまだに共通通貨ユーロにも、シェンゲン条約にも加わっていないイギリスは、反EU的な国家だとして語られることが一般的だ。

欧州統合プロセスが開始されたころから、イギリスは「やっかいなパートナー」と蔑まれていた。そうしたイギリス人のなかでも、特にチャーチルは大英帝国主義者で、欧州統合に批判的な外交を繰り広げた首相として知られている。

欧州が統合され、強大な権力主体となれば、イギリスはそのなかで存在意義を失いかねない。イギリスという国家の自律性を重んじるチャーチルたちにとって、欧州統合は脅威以外のなにものでもない。だから、イギリスはシューマン・プランが開始された当初から欧州統合プロセスに否定的な立場を取り続け、既存の国家の枠組みを維持し続けることに力を注いできた。シューマン・プランが開始されたときのイギリスの首相はチャーチルだった。

しかし、この手紙を読むかぎり、チャーチルはヨーロッパの統合に深くかかわり、そのリーダーシップを得ようとしている。つまり、チャーチルは欧州統合に批判的であったというこれまでの常識を覆す事実がこの手紙には記されているということだ。

では、チャーチルが欧州統合にかかわり、欧州統合運動の主導権を握ったという事実が知られていないのはなぜなのだろうか。そして、なぜチャーチルはイギリスが存在意義を失いかねない欧州統合に積極的にかかわったのだろうか。

この謎を解く手がかりが、チャーチルとクーデンホーフの往復書簡に隠されている。

ともに欧州統合の実現を目指したチャーチルとクーデンホーフが、統合運動の主導権をめぐって対立にいたったのはなぜかという点にふたりの物語が紡ぎだされる。

そして、ふたりの対立がこんにち完全に忘却されたという点に、欧州統合の秘密が隠されている。

それが、現代のヨーロッパが抱えている最大の矛盾でもあることを、私はまだ気がついていなかった。

過去からのメッセージ

コペーに保管されているクーデンホーフにかんする多くの史料のなかで、私が往復書簡を選んだのには理由がある。

往復書簡には、議事録や新聞への投稿などを読むだけではわからない、かれらの怒りや嫉妬、喜び、不安や哀しみがつづられている。チャーチルをふくめたおおくの有名な政治家や文学者、オピニオン・リーダーたちとの間でかわされた往復書簡には、かれらの個人的な体験や交流が記されているのだ。

一九四八年三月二五日にクーデンホーフからチャーチルに宛てられた手紙が私を魅了したのはそのためだ。それはまるで殺害された被害者が、死ぬ間際に限られた方法で真実を伝えようとするダイイング・メッセージのようなものに思えた。書簡の書き手が血の通ったひとりの人間として私に訴えかけているようだった。[2]

往復書簡を用いることは、そうした個人的な体験や交流を歴史の文脈のなかに位置づけるという作業だ。

第一章　新しい世界秩序

第一節　パン・ヨーロッパ

一九一四年六月二八日。

ハプスブルク帝国の帝都ウィーンは、ダービー競馬の話題で持ち切りだった。シーズンの最終日であり、最高潮の盛り上がりをみせていた。

ちょうど同じ日、ハプスブルク帝国のフランツ・フェルディナンド大公とその妻ソフィーがボスニアのサラエボで暗殺されたことをウィーンで学生生活を送っているクーデンホーフは、知る由もなかった。そして、このサラエボ事件をきっかけに、のちにヨーロッパの自殺とよばれることとなる第一次世界大戦が勃発することを予知することなど、もちろんできなかった。

一九一四年のヨーロッパの夏は、近年にない異常に暑い日が連日続いた。暑さは人びとを外によび出し、大公夫妻暗殺の是非をめぐってヨーロッパ中の街のいたるところで集会が開かれた。集会に参加した市民たちの戦意は昂揚し、だれも正常な判断ができないうちに各国政府は戦争に突入していった。

イギリスの海軍相として第一次世界大戦を目の当たりにしたチャーチルは、この戦争は各国政府の戦争ではなく、各国民の戦争だと思った。そして、列強の全生命とエネルギーが怒りと虐殺に注ぎ込まれていく現実に苛立った。[3]

リヒャルト・エイジロー・クーデンホーフ＝カレルギーは、二〇歳。ウィーン大学で哲学を専攻していた。

このころ、クーデンホーフは、年上の女優イダ・ローランと婚約をすませたばかりだった。

婚約にいたるまでにさまざまな苦労があった。慕っていた父親のハインリッヒはクーデンホーフが一三歳のころにすでに他界していた。唯一の保護者である母親の光子は、子持ちで、貴族の称号も持たぬローランとの婚約に大反対した。結局、クーデンホーフは光子と決別するかたちで自らの意志を貫き、ローランとの新しい生活を始めた。

クーデンホーフは肺を患っていたために、兵役を免除された。おかげで、かれは戦争の初期をウィーンで、ローランと過ごすことができた。まだ戦火が及んでいないウィーンでは生活への影響はほとんどなかった。クーデンホーフは徐々に明らかになる恐ろしい戦争の実態を直視することを拒み、戦争に対する周囲の熱狂状態から逃れるように次第に歴史と哲学の勉強にのめり込むようになっていった。[4]

しかし、自室に閉じこもり現実逃避をしつづけていたクーデンホーフは、終戦間際の一九一八年一月八日、新聞記事に目を奪われた。

それは、アメリカ大統領ウッドロー・ウィルソンについて書かれた記事だった。ウィルソンは戦後秩序の再建のために国際連盟創設を訴え、一躍国際政治の中心人物となっていた。

国際連盟設立の記事はクーデンホーフに、いつも夢見ていた新しい世界秩序の輪郭が手の届くほどの近くにあることを伝えた。かれは希望と期待に胸を踊らせながら、毎日いろいろな新聞を次から次へと読みふけった。新聞がこれほど面白いものだと感じたのははじめての体験だった。クーデンホーフは、熱心な期待をもってワシントン、ベルリン、ウィーン間の覚書交換の経過を見守った。[5]

クーデンホーフが関心をもったのは、ウィルソンの理念そのものではなかった。かれは、新しい秩序を築き上げるということに関心をもったのだ。世界大戦によって、廃墟と化したヨーロッパに新しい秩序を築き上げることに希望を見いだした。

しかし、新秩序の基盤となるはずのウィルソンの提唱した国際連盟構想は、アメリカの不参加によってあきらかな挫折へと追い込まれてしまった。ウィルソンの外交的挫折を目の当たりにしたクーデンホーフは、自らの手で新しい秩序を創りあげるべく、政治の世界に踏み入る決意をする。しかし、政党の政策に拘束されることを嫌い、国会議員にはならずに自由な立場で政治に対して発言していく道を選んだ。そして、第一次世界大戦の傷跡がまだ生々しい一九二三年、クーデンホーフは自らが提唱するヨーロッパ統合の理念をまとめた著書『パン・ヨーロッパ』を出版する。

クーデンホーフは、第一次世界大戦の経験から、ヨーロッパで起る内紛こそが諸悪の根源であるという結論を導き出した。ならば再び戦争を引き起こさない新しい秩序の構築のためには「小国分裂[6]」状態にあるヨーロッパを一つにまとめあげなければならない。クーデンホーフはそれを「パン・ヨーロッパ」構想と名づけた。

『パン・ヨーロッパ』は、単に欧州の統合を提唱しているだけではなく、世界全体を視野に入れた構想を打ち出している点がそれまでの欧州統合理論とは一線を画していた。

幼いころから地球儀を回し、遠い国のことを夢見ていた[7]というクーデンホーフは世界をバランスよくみわたす感覚がそなわっていたのかもしれない。[8]

それはパン・ヨーロッパ構想に限らなかった。たとえば、一九四一年に執筆した「アメリカ合衆国からイギリスへの貿易促進のための提案」[9]では、イギリスのアイスランド統治を巡って、アイスランドからアメリカの介入を

促し、アイスランドを仲介点としてイギリスとアメリカの貿易促進をはかるという方法を提案している。

イギリスとアイスランドの問題を、その二国間だけの問題だとは考えずに、第三者の存在によって解決しようとする提案は、視野を広く持つことで生まれるものである。クーデンホーフの特徴は広い視野から考察できるという点にあったといえる。

パン・ヨーロッパ構想では、世界をアメリカ、イギリス、ロシア、極東アジア、ヨーロッパの五つの地域にわけた。面積、人口、経済力などの数字をあげながら、ヨーロッパが一つにまとまってはじめて、アメリカやロシアと対等な関係になれると説明する。そして、対等な関係の構築こそが、世界全体に安定した平和をもたらしてくれるのだという結論を導いた。

ウィーンで最初に出版された『パン・ヨーロッパ』は、このように世界全体のバランスを配慮しているという点において、実現性があり、多くの支持を得ることとなった。

第一次世界大戦はそれまでのヨーロッパの人びとの抱いていた世界観を一変させていた。世界の中心であると疑わなかった西欧が、もはやその地位を失っていることを説いたシュペングラーの『西洋の没落』はヨーロッパの知識人たちにむさぼるように読まれ、危機感を煽った。そうしたなかで、ヨーロッパが世界で生き残って行くための道筋を大胆に示したクーデンホーフの『パン・ヨーロッパ』に、当時の知識人たちは希望を見いだしたのかもしれない。

十一の章から構成されている『パン・ヨーロッパ』は、世界全体を見渡した上で、ヨーロッパが抱えるいくつもの現在の問題点を挙げ、統一によってそれが解決されるということを説いている。

第一章および第二章で、ヨーロッパの歴史的、地理的な定義を述べたうえで、文化的・歴史的共通性や米ソとの関係などあらゆる角度からヨーロッパが統合することが、ヨーロッパ諸国にとっても、他の地域の政府にとっても最大の利益であることを説いている。

「パン・ヨーロッパ構想」の最大の特徴は、イギリス連邦を除いたヨーロッパ大陸の統合を提唱し、米国並みの連邦制を想定していたことにある。

イギリス連邦を除いたのは、当時のイギリスが世界の陸地の四分の一を支配する世界帝国であったからだ。イギリスがインド、アフリカ、カナダといった連邦諸国を切り離してまで、欧州大陸の統合プロセスに参加することはおよそ考えられなかった。文化的・歴史的には当然ヨーロッパとして位置づけることができるイギリスを、その領地、国力によってヨーロッパと分離させるべきであると考えた点は、極めて現実的な判断だった。

しかし、クーデンホーフの構想は「連邦制」による統合という点において、現実的とはいいがたいものだった。連邦制とは、加盟国の国家主権に優越する連邦制による統合形態であり、国家主権が絶対視されている国際政治において、国家主権を否定するかのような連邦制による統合はきわめて難しい。

戦後国際政治の中心人物となったアメリカのウィルソン大統領は、いわゆる「民族自決」の概念をすでにヨーロッパに導入していた。かれは、ハプスブルク家に抑圧されている民族の無条件の自決権を次第に強く提唱[10]した。ウィルソンに後押しされるように、一九一八年にオーストリア、ハンガリー、チェコスロバキア、ポーランド、ユーゴスラビアなどが次々と独立を果たした。

少し強引な言い方をすれば、ウィルソンはクーデンホーフが戦争の要因であると考えた「小国分裂」状態のヨーロッパをさらに細分化してしまったの

だ。クーデンホーフの考え方が正しいとすれば、ウィルソンの行なったことは第一次世界大戦以後のヨーロッパをそれ以前よりも不安定な状態にしてしまったということになる。

クーデンホーフの「パン・ヨーロッパ構想」に従うならば、秩序再建のためにはすぐにでも連邦制による共同体をヨーロッパに創設するべきであるが、ようやく独立を手に入れ、国家主権を得た新たな国家が、国家の主権を制限し、ヨーロッパとしてひとつにまとめあげようというクーデンホーフの構想を受け入れるとは考えにくかった。

民族自決によって独立国となった国々をふたたびヨーロッパとしてまとめあげようとする「パン・ヨーロッパ構想」を帝国主義的であるとして批判する声も少なくなかった。

たとえば、カリフォルニア大学歴史学部のスフォルザ教授は、クーデンホーフをハプスブルク帝国主義者として痛烈に批判した。たしかに、クーデンホーフは、ハプスブルク帝国の伯爵家出身であることを自負し、手紙にはいつでも「伯爵」という称号を自らの名前に続けて記している。スフォルザ教授が、クーデンホーフをハプスブルク帝国主義者とみなすのは自然な反応だった。

しかし、クーデンホーフは自分の真意はハプスブルク帝国の復興ではないと反論した。批判を受けたクーデンホーフは、スフォルザ教授宛の手紙のなかでみずからの構想についてすぐに書簡を送った。

> ・・・私の関心はモラルの問題にあります。ヨーロッパの共同体は、私たちが形式や過去の概念にとらわれていては達成することはできないという深い確信があります。そして、この奇跡は新しいスピリットと道徳的価値の新しい概念によってはじめて実現されるのです。[11]

クーデンホーフは、スフォルザ教授に全く新しい秩序のありかたを模索していること主張した。それは「形式や過去の概念にとらわれ」ることのない全く新しい価値観と概念によってのみ達成されるものだという。

しかし、この手紙だけではかれの目指しているものがはっきりとしない。クーデンホーフのいう「新しい概念」とはいったいなにを意味するのだろうか。

＊

私は、館長がくれた『二〇世紀の欧州統合』という本を開いた。

館長が編集にたずさわったこの本の中に、クーデンホーフが一九三〇年二月二五日に発表した「パン・ヨーロッパ協約提案[12]」が載っている。二〇条にわたって連邦国家としての制度がことこまかに記されている「協約提案」は、統合されたヨーロッパの「憲法草案」にあたるものである。

この「協定案」の内容がわかれば、クーデンホーフの構想がもう少し具体的に見えてくるのではないだろうか。クーデンホーフがスフォルザ教授に宛てた書簡の中で述べている「新しい概念」がなんなのか、わかるかもしれない。

フランス語で書かれた「協定案」を電子辞書を使いながらすこしづつ読み進めてみる。

第一条では「締約国は、欧州の平和を保証する永遠の同盟を創設」することが述べられており、脱退条項にあたるものはなく、連邦制としての性格の特徴がうかがえる。

第一四条から一八条は「連邦機関」と題されており、評議会、総会、裁判所、首相府がおかれることが規定されている。総会は加盟国の議会から人口に応じて最大五人までを代表として派遣することとなっている。総会は一年に最低二回の会合を開催し、連邦首相、副首相、財務相および裁判官の選任を行なう。さらに、連邦にかんする問題について議題を提出することができるとしている。

クーデンホーフは、加盟国の議会から派遣されてくる議員らで構成されるこの総会に強い権限を持たせようとしているようだ。人事権を持ち、議題を提案することができる総会の権限は強力だ。

強力な連邦政府のもとに統治される中央集権型という点においては、スフォルザ教授の指摘するように、帝国主義的な要素を持っているということもできるが、総会の代表者は加盟国各国の選挙で選ばれた国会議員で構成されており、民主主義を重視している制度であるといえる。

しかし、加盟国の国家主権は強力な総会の権限によってかなり制限される制度となっている。私は、日本で読んだクーデンホーフの「ヨーロッパ国民」という論文[13]を思い出していた。その論文で、クーデンホーフは「国民とは大きな学校であって、家族ではない。国民とは共通の先覚者、指導者、教育者および教師によって結合された精神的な共同体である」とのべ、国家や国民という「定義はすべて不完全であり、不適当である」と記していた。

クーデンホーフは「国家」や「国民」という概念に対して懐疑的な態度を取っていたのだ。極端な言い方をすれば、既存の「国家・国民」という概念を破壊して、まったく新しい枠組みを作り上げることを目指していた。そして、「帝国」や「国民国家」という概念にたいする「あたらしい概念」とは、強力な権限をもつ連邦機関によって統治される「パン・ヨーロッパ」なのだ。

しかし、と私は思った。

「あたらしい概念」によって新秩序を築き上げるにはさまざまな障害が待ち受けていたに違いない。国民国家が乱立する中で、それらの国家の主権を制限した連邦制によるパン・ヨーロッパを創設することは、極めて難しい。

そのような困難が予測されるにもかかわらず、クーデンホーフはそうした困難についてどのように対処するべきかについて、なにものべていない。

政治の世界に足を踏み入れたばかりのクーデンホーフは、著書『パン・ヨーロッパ』において実に明解にヨーロッパ統合の利点をのべることに成功しているが、いかにして統合するのかという道筋を具体的に明示することはできなかった。

クーデンホーフは「新しい概念」に基づく『パン・ヨーロッパ』を出版したときから、「パン・ヨーロッパ運動」というヨーロッパ統合運動の設立を計画していたのであるが、具体的にどのような行動が必要であるかは、この時点ではまだ分からなかったのだろう。ましてや、欧州各国が連邦制に参加する保証などなかった。

それでも、パン・ヨーロッパ理念は、一九二五年から各方面の支持を受けた。最初に支持を表明したのはウィーンの新聞界だった。その後、政界からも多くの支持を得て、ヨーロッパ諸国にパン・ヨーロッパ運動の支部が設立された。クーデンホーフはこれらの支部を基盤として「パン・ヨーロッパ同盟」を組織した。[14]

「パン・ヨーロッパ同盟」は、月刊誌「パン・ヨーロッパ」の定期購読料を主な資金源とし、本部はウィーン王宮に構えることができた。

クーデンホーフの考えに賛同したフランスのブリアン首相によって一九二九年に国際連盟の場でヨーロッパ統一構想が提案された。しかし、ブリアン

の提案によって欧州の統合が実現性を帯びだした途端に、欧州諸国は懐疑的な立場をとり、ブリアンの構想は頓挫してしまった。

統合という理念そのものには賛成しつつ、実際に具体的な行動に移すことに対して欧州各国は激しく抵抗したのだ。

このときから、クーデンホーフのパン・ヨーロッパ運動は、「まるで舵が利かなくなった豪華客船のように方向を失い、大西洋の中心をぐるぐると旋回[15]」するようになる。

*

翌日、朝六時に目が覚めた。

私は、史料館に通うためにジュネーブ駅からほど近い格安のユース・ホステルに滞在していた。格安、といっても一泊五千円もするのだが、ドミトリーとよばれる六人部屋のベッドはちいさく、固い。二段ベッドの上段に陣取ったために、目を開けると白いペンキで塗られた天井が目前に迫っていた。

防犯の意味もあって、パスポートや財布、それにノート・パソコンと大切な資料は枕の横においておいた。不特定多数の人間が頻繁に出入りし、いつ盗難事件が発生してもおかしくないドミトリーでは、貴重品の管理をしっかりしておくことは最低限のマナーだった。

同室のバック・パッカーたちを起こさないようにゆっくりと、音を立てずに身支度をして食堂にむかった。

食堂に行くと、抱いていた朝食へのささやかな期待は見事に裏切られた。コールドミールであることは承知していたが、すこしばかり期待していたのはヨーグルトだった。ヨーロッパの国々を旅をしているとき、どんなに安い宿でも朝食でだされるヨーグルトの味は格別だった。今回もドミトリーでひどく固いベットだが、ヨーグルトだけは日本では味わうことのできないものを口にできると思っていた。しかし、その期待は完全に裏切られてしまった。肝心のヨーグルトはなく、あるのは、薄くスライスされた黒パンと数種類のジャムとオレンジジュースとコーヒーだけだった。

滞在できる日数は限られている。昼食をとっている暇はない。私は、皿に黒パンを山積みにして、ちいさなパックのジャムとバターを五つほどもぎ取った。数枚のパンをジュースとコーヒーで流し込むと、のこりのパンをナプキンに包み、リュック・サックの中に放り込んだ。それから駅に向かい、列車に乗って、コペーに急いだ。

*

コペーに到着し、前日と同じように左塔のドアから階段を上がる。階段をのぼってくる私の足音に気づいたのだろうか、館長は閲覧室のドアを開けて待っていてくれた。

「おはようございます」というかいわない間に、私は閲覧室にとおされた。

館長は、ポケットから鍵を取り出すと、史料が詰まっている棚の扉を開きながら、今日はどの箱が欲しいかと尋ねた。

棚の中に保管されている大量の往復書簡が詰まったいくつもの箱を眺めながら、私は妙な事実に気がついた。

クーデンホーフの「パン・ヨーロッパ運動」は、一九二九年のブリアン構想の頓挫によって、ほとんど勢いを失ったはずである。少なくとも昨日までの史料を読んで、私はそう考えた。しかし、史料館に遺された往復書簡は、

それ以降のものが多くあった。むしろ、第二次世界大戦後に欧州各国政府首脳や有力者たちとかわされる往復書簡の頻度は戦後にしたがって倍増している。

これは、第二次世界大戦後にパン・ヨーロッパ運動の勢力が回復してきたことを意味しているのではないだろうか。いったんは、各国政府首脳によって勢いをたたれてしまった欧州統合構想が、息を吹き返したということだろうか。

きっかけは、なんであったのだろうか。

「ヨーロッパの最も偉大な人物」チャーチルの存在が私の脳裏にちらついた。

これからの作業は、まずはチャーチルの構想について知ることから始めなくてはならないようだ。

私は館長に尋ねた。

「チャーチルとクーデンホーフが最初に書簡を交わしたのはいつ頃だかわかりますか」

「それならば、第二次世界大戦中でしょう。でも、大戦中の書簡はそう多くはありません。ここにある一番古い三八年から四五年あたりまでの書簡は限られていますから全部出しておきましょう」

七つの箱が閲覧室の広い机の上に置かれた。

「ありがとうございます」と私は礼をいった。

「幸運を」と館長がいった。

ブリアン構想挫折から一〇年後の一九三九年、ヨーロッパに戦争の時代が再び訪れた。

第二節　チャーチルのヨーロッパ合衆国

第二次世界大戦の勃発である。

第一次世界大戦もそれまでの戦争とは比較にならないほど甚大な被害をヨーロッパにもたらした。しかし、それは「欧州内戦」と形容されるように、主戦場となったのは欧州であり、正確にいえば世界大戦ではなかった。対照的に、第二次世界大戦は文字通り「世界大戦」だった。欧州に加え、北アフリカ、そして日本をふくむ太平洋全域までもが戦場となった。

そんな、戦時中の一九四二年一二月。ロンドン、ダウニング街一〇番地、首相官邸。

ウィンストン・レオナード・スペンサー・チャーチル英国首相宛に一通の手紙が届いた。このとき、チャーチルはイギリスの戦時内閣首相として、戦争の指揮を一手に担っていた。

一九四一年のソ連の対独戦線参戦は大きな転機となり、戦況は一時的に好転したように思われた。しかし、翌四二年四月、英国領シンガポールが日本軍の攻撃で陥落した。それは「イギリス史上最悪の不幸[16]」とのちにチャーチルが振り返るほどの衝撃をイギリス政府にあたえた。

ムッソリーニ率いるイタリア軍と北アフリカ戦線で対峙する英国軍も、日に日に追いつめられていた。ヨーロッパ、アジア、アフリカと世界中の激戦地からもたらされる断片的な報告をもとに、チャーチルは毎時間ごとに会議を重ね、戦略を立て続ける日々が続いていた。

手紙の差出人はリヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー伯爵となってい

る。チャーチルはこの名前に覚えがあった。以前にも幾度か手紙を交わしたことがあったからだ。

手紙は、一〇年以上昔にチャーチルが、サタデー・イブニング・ポスト紙に書いたヨーロッパ統合にかんする記事について触れられていた。

・・・あなたの偉大な、そして今もなお最も新しい考え方である、一九三〇年二月一五日のサタデー・イブニング・ポスト紙のヨーロッパ合衆国についての記事を読みかえしました。余計なことと分かりつつもわざわざここに挙げたのは、ヨーロッパ連邦が平和のために欠かすことのできないことであるからです。

この必要不可欠な平和追求の試みは今すぐにでも、必ずや恐るべき武力による戦争の代わりとなることができるでしょう。スイスや繁栄したアメリカのように平和な自由で統一されたヨーロッパというビジョンは、最初の軍事的な敗北以来、かれらとその家族の将来をじっと見つめてきた多くのドイツ人にとって、悪夢となる連合国の勝利を輝かしい希望へと変貌させるでしょう。

ヨーロッパ連邦の実現のための世論動員のために、私はヨーロッパの主要国とともにこの冬、ニューヨークで第五回パン・ヨーロッパ会議開催の準備を始めています。[17]

戦争の最中に届いたこの手紙をチャーチルはどのような気持ちで読んだのだろう。一二年も昔に書かれた記事を引き合いに出して、ヨーロッパ統合などという悠長な話をしている場合ではないと思っただろうか。

手紙の中でクーデンホーフが言及している「ドイツ人にとっての悪夢」とは、チャーチルが構想していた対独作戦のことである。ドイツ軍が疲弊してくると予想される一九四三年夏をめどに、イギリスとアメリカの大軍を欧州大陸のドイツ占領地域に上陸させるというものであった。ドイツ軍を完膚なきまでに破壊することがこの作戦の意図するところだった。

作戦の発端となったのは一九四一年末にチャーチルがルーズベルト米大統領と会談したさいに表明した構想だった。このドイツ殲滅作戦は、いわばイギリスとアメリカ両大国が戦争を終わらせる唯一の方法として選択した道だった。

しかし、クーデンホーフはこの計画が「欧州の自殺」と形容される第一次世界大戦の二の舞になることだけは避けなければならないと考えていた。英米の大軍によって、欧州大陸を総攻撃することは、その後のヨーロッパの復興を困難なものにすることは誰の目にも明らかだった。

そこで、大軍投入の代替案としてヨーロッパの統合をチャーチルに進言した。ヨーロッパが統合することで戦争を終結に導くことができれば、その先の「輝かしい希望」を切り開けるとチャーチルに訴えているのである。

冷徹なまでに現実を見据え、欧州大陸への総攻撃によってのみ戦争に終止符を打つことができると考えていたチャーチルにとって、ヨーロッパの統合が戦争の終結をもたらすと考えるクーデンホーフのこの提案はあまい認識にもとづいたナイーブな訴えに見えたことだろう。

しかし、だからといってチャーチルはこのクーデンホーフの手紙を考慮に値しない提案であるとは考えなかった。

チャーチルは現在の戦況に気を配りながらも、戦後構想を練っていたからだ。そして、チャーチルの頭の片隅には、ヨーロッパを統一することで新しい秩序を築くという構想があった。手紙に書かれているように一九三〇年に

「ヨーロッパ合衆国」を提唱して以来、チャーチルはいつでもヨーロッパ統合理念に賛成であったし、それがヨーロッパ地域の平和構築に有効的であると考えていた。[18]

この手紙から数ヶ月後の一九四三年四月二一日。チャーチルは、ラジオ演説でヨーロッパの統合について語った。

> われわれのとるべき第一歩は、ヨーロッパ理事会の設置と、ヨーロッパ機構に集中しなくてはなりません。・・・われわれとしては、ヨーロッパ理事会―その名前はどうでもよろしいが―から出発して、効果的な連合をつくるべく努力し、その連合組織には、新たな侵略や、将来戦の準備を阻止するために連合の下す判定に重きを置かしめるだけの国家的、国際的、および連合としての力を持たせるように努力する必要があります。・・・・以上述べたすべてのことは、イギリス、アメリカ、およびソ連の高度の恒久的利益と一致するものと私は信じております。この三国が心から、かつ全面的に協調しない限り、また直接協力しない限り、この目的が達成されないことは確かであります。この目的が達成されてこそ、ヨーロッパの栄光は再び戻ってくるでありましょう！[19]

チャーチルはロンドンへの爆撃がはじまった一九四〇年ごろからラジオ演説を多く行なっている。チャーチルのラジオ演説は高い人気を誇り、時には六四％もの聴取率をたたき出したこともある。[20] チャーチルはラジオ演説を通して、戦争に苦しむイギリス国民の心を鼓舞していた。

そのような意図のもと行なわれた演説で、チャーチルは「ヨーロッパの栄光」を取り戻すためには、ヨーロッパの統合が必要であると訴えた。それもかなり具体的に「連合としての力を持たせる」と明言した。

その説明は踏み込んでおり、戦争などの限られた場合に限り、「連合の下す判断」が参加国政府の決定に優越することまで具体的に述べている。チャーチルは、多くの国民の前でヨーロッパに「連合体」を創り出すことを明言したのだ。

＊

私は、ふーっと、おおきく深呼吸をした。

戦争がまだ終結する気配すらみせていないなかで、ラジオに耳を傾ける国民にたいしてヨーロッパの統合の必要性を訴えた意味は大きく、チャーチルがヨーロッパの統合を視野に入れた戦後秩序のありかたを模索していたという事実は重要だ。

しかし、「連合」というチャーチルの言葉が気にかかった。

なぜなら、クーデンホーフは「連邦制」による欧州統合を構想していたからだ。連合制と連邦制はどちらも統合を掲げているが、本質的に異なる。

加盟国の国家主権を超越する連邦政府の存在を前提とする連邦制にたいして、連合制はどこまでも主権国家の集まりという意味しか持たない。

もし、チャーチルが「連合制」を念頭に置いているのだとすれば、それはクーデンホーフの構想とは全く異なるものとなる。これが後のふたりが対立することになる要因なのだろうか。

しかし、当初から異なった構想を抱いていたにもかかわらず、一〇〇通以上の書簡のやり取りをすることは不自然だという見方もできる。クーデンホーフとチャーチルが一九四八年までの数年間、協力関係を築いていたというこ

とを考慮に入れれば、チャーチルが「ヨーロッパ連合」論者であるという結論を下すのは性急なのかもしれない。

チャーチルは、一九三〇年のサンデー・イブニング・ポスト紙に用いた「ヨーロッパ合衆国」という言葉を戦後好んで多用するようになる。アメリカ合衆国を想起させるこの言葉は加盟国政府をアメリカの州にみたて、その主権をさらに制限したより緊密な連邦制による統合を思わせるものであり、クーデンホーフの連邦制による統合構想と共通している。

やはりチャーチルはクーデンホーフと同じように、連邦制による統合を構想していたのだろうか。

しかし、クーデンホーフが『パン・ヨーロッパ』で述べているように、イギリスが英連邦諸国を捨ててまでヨーロッパの統合に参加することは考えにくい。

対照的に、連合制ならば各国の国家主権は維持されることになるからイギリスは参加しやすくなる。チャーチルが欧州統合というとき、それは連合制による統合であると考えるほうが自然なのではないだろうか。

私は、チャーチルの真意を探ろうと再びめくりはじめた。すると、チャーチルのほかにも、イギリスの政治家たちがヨーロッパの統合を構想していた事実をうかがわせる手紙を発見した。

チャーチルと近い関係にある人物たちがヨーロッパの統合についてどのような議論をしていたかということがわかれば、チャーチルがどのような統合を構想していたかを知る手がかりとなるのではないだろうか。

*

イギリスの国会議員ダフ・クーパーからクーデンホーフのもとにヨーロッパ統合を視野に入れていることがわかる手紙が届いたのは戦争がはじまって間もない一九三九年のことである。

ダフ・クーパーは外務官僚出身の保守党議員で、第二次世界大戦の引き金となる「ミュンヘン協定」にチャーチルとともに反対した人物だ。

クーパーは、イギリス下院議会でミュンヘン協定について討議される予定であった一九三八年一〇月三日に海軍相を辞任した。かれの辞任に影響をあたえたのがチャーチルだった。それまでも、チャーチルはクーパーの政治的パトロンとして助言を与えてきた。

チャーチルもミュンヘン協定を「ナチの力の脅威にたいする西欧民主主義の完全な降伏[21]」として強烈に批判していた。

大臣辞任で職を失ったダフ・クーパーはアメリカで講演旅行を行なった。講演では、第二次世界大戦とその後のヨーロッパのとるべき道筋について熱く語った。アメリカ講演旅行中の一九三九年一二月二九日、クーデンホーフ宛てに手紙を送っている。

この数週間のうちに二七回の講義を行ないました。テーマは主に理念です。戦争の原因と経緯と終結で、そのためには何らかの形のヨーロッパ連邦の組織とパン・ヨーロッパ理念の必要性を言い続けています。・・・ハロルド・ニコルソンの『なぜイギリスは戦争に巻き込まれたのか』という短い本をあなたがすでに読んだかどうかはわかりませんが、読むに値するものだし、パン・ヨーロッパ理念を強く支持しているものです。[22]

ダフ・クーパーは繰り返しパン・ヨーロッパ理念の重要性を指摘している。

クーパーはこのすぐ後一九四〇年五月、首相となったチャーチルによって情報相に任命される。情報省は実質的には外務省の一部であり、緊密な関係を有する機関であった。

つまり、第二次世界大戦の指揮に最も深く関わることになるふたりがヨーロッパの統合に強い関心を抱いていたのだ。

さらに、第一次世界大戦で外交官として英国を支えたハロルド・ニコルソンも手紙に記されているように、「パン・ヨーロッパ理念を強く支持」していた。

クーデンホーフのパン・ヨーロッパ理念を支持し、その実現の必要性を感じたニコルソンは一九四〇年にクーデンホーフをノーベル賞委員会に推薦した。

親愛なるクーデンホーフ、

アメリーから手紙をもらったのだが、きみはノーベル賞委員会の選考対象に挙ったそうだ。でしゃばったことかもしれないが、ぼくも、強い口調できみを推すようにノーベル賞委員会に手紙を出しておいた。

ぼくは、連邦主義の開拓者であるきみが、それをあやつる操縦士になれる唯一の人間だと手紙に書いておいた。現段階においてきみの理念は、まるで舵が利かなくなった豪華客船のように方向を失い、大西洋の中心をぐるぐると旋回している。

だから、名声を加えることがきみの国際社会における影響力をより強いものにしてくれることだろうと委員会に指摘しておいた。

国際社会の現状についてはなにも書いていない。

もし、きみがイングランドに来るようなことがあれば、前もって知らせてくれると嬉しい。

こころを込めて、　　ハロルド・ニコルソン[23]

残念ながら、ハロルド・ニコルソンの情熱的な推薦にもかかわらず、クーデンホーフはノーベル賞を受賞するにはいたらなかった。

この手紙からは、ニコルソンが連邦制によるヨーロッパの統合を強く支持していることがうかがえる。しかし、ニコルソンは鋭い視点で現実を直視している。クーデンホーフの理念を支持しながらも、現実の政治運動としては、「まるで舵が利かなくなった豪華客船のように方向を見失い、大西洋の中心をぐるぐると旋回している」と活動が行き詰まっていることをはっきりと指摘している。

ニコルソンは、クーデンホーフが求心力を得るためには、ノーベル賞のような「名声」が必要であると述べている。ノーベル賞をとることで、有名になり、多くの人びとの協力を得ることによってはじめて連邦制による欧州の統合を達成することができると考えているのだ。言い換えれば、ノーベル賞をとるほどのことがなければ、連邦制による統合の実現はきわめて難しいとニコルソンは考えていたのだろう。

イギリス政府内において、正式にヨーロッパの統合が議論されるのは、終戦後の一九四五年八月以降であることが知られている。[24] しかし、それよりも前の戦時中から、チャーチルらは欧州統合構想を抱いていたことが、これらの手紙からわかる。

しかし、かれらの議論は理念や大義でしかなく、具体的なものではなかった。チャーチルは戦後秩序のありかたを模索するなかで欧州の統合を構想していたが、連邦制と連合制にかんする議論はしていない。

そもそも、この時はまだチャーチルはパン・ヨーロッパ運動と深いかかわりをもっているわけではなかった。

チャーチルの真意を知るためには、いつ、どのようにして、チャーチルとクーデンホーフが深い関係を築いたのかを調べなくてはならない。

私は、史料を読み進めた。

いよいよ、チャーチルとクーデンホーフの蜜月がはじまろうとしていた。

第三節　チャーチルとクーデンホーフ

一九四二年以来、数通の往復書簡を交わしてきたチャーチルとクーデンホーフが本格的に接近するのは、一九四六年のチャーチルの「チューリッヒ演説」がきっかけだった。

チャーチルは終戦後の一九四五年七月五日、総選挙でアトリー率いる労働党に思わぬ大敗を喫した。以来、一介の野党党首として政治活動を続けていた。政権を離れ、自由な立場で発言をできるようになったかれは首相時代にくらべ、ヨーロッパの統合にかんしての発言がさらに多くなっていた。[25] その極みともいえるのが一九四六年八月二三日、スイスのチューリッヒ大学で行なった「ヨーロッパ合衆国演説」である。

この演説はラジオを通じてヨーロッパ中に放送され、多くのひとびとが耳にすることになる有名な演説である。[26]

たとえ首相でなくとも、チャーチルのような現実主義の大物政治家がヨーロッパ大陸の中心部スイスで、ヨーロッパの統合を全面的に支持したことはヨーロッパ市民にとって大きな衝撃であり、ヨーロッパ統合が夢物語などではないのだということを意味した。

チャーチルは、一言、一言、ゆっくりと単語を選ぶようにして演説をはじめた。

「学長殿、紳士淑女のみなさま、私は、このような歴史ある大学で、演説をさせていただけることを、とても光栄に存じます」。

挨拶を終えると、チャーチルはヨーロッパの悲劇について述べた。

第二次世界大戦によってヨーロッパは廃墟となってしまった。第二次世界大戦は、平和を壊し、全人類の可能性を台無しにしてしまった。

つづけて、チャーチルはこの悲劇的な状況を一変させる特効薬を提案する。

「ヨーロッパという家を再建し、あるいはできるかぎり再構築し、平和と安全、そして自由の下に住むことのできる構造を築き上げることである」。

ここで、演説は最初のピークを迎える。チャーチルは息を吸い込むと一気にまくし立てる。

「われわれはヨーロッパ合衆国のようなものを創らなくてはならない！ヨーロッパ統合に関した、多くの貢献は、パン・ヨーロッパ同盟の不断の努力によってなされました。それは、クーデンホーフ・カレルギー伯爵とフランスの有名な愛国者で政治家のアリスティード・ブリアンに負うところが大きいのです」。

ヨーロッパ合衆国の建設の必要性を強くしたチャーチルは、「最初のステップは、フランスとドイツの協調でなくてはならない」といい、仏独和解がヨーロッパ統合の核となることを示唆した。

演説で思いがけず名前を挙げられたクーデンホーフはスイスのグスタードにある自宅のラジオでこの演説を聴いていた。

クーデンホーフはすぐに、チャーチルに「貴殿の素晴しき演説と第二のヨー

ロッパに栄光あれ[27]」という電報を送り、くわえて九月二三日には次のような手紙をしたためた。

親愛なるウィンストン・チャーチルへ

貴殿の演説は、私を世界中で一番の幸せ者にしてくれました。演説で話していただいたことについてなんと感謝してよいかわかりません。ヨーロッパにかんするすべてのこと、パン・ヨーロッパ運動のこと、そして私のことについて！

貴殿の助力がもたらす結果は、はかりしれないものです。いまや、貴殿はもはや政府が無視することのできなくなったヨーロッパ問題を世に問うたのです。ヨーロッパの人びとは私たちの側にたっています。

私は、フランスとドイツの人びとが、ヨーロッパの核を創りあげるという貴殿の基本的な理念に完全に賛同します。かれら自身の手によってもたらされるかれらの和解こそがヨーロッパ共同体の必要条件でしょう。それはまさに南北戦争後のアメリカ合衆国であり、南ア戦争なのです。和解は、すぐにでも連邦化をもたらすでしょう。

だから、貴殿がチューリッヒで放ったボールを拾うフランス次第なのです。ヨーロッパ山麓のフランスです。はたしてカエサルとなるのは誰なのでしょうか？

本当にありがとうございました。貴殿がしてくれた全てのことに感謝します。貴殿のすべてに感謝します。[28]

クーデンホーフは「チャーチルの演説は、乾燥している納屋の中に落ち込んだ雷の如く、火を発した[29]」と興奮した。

チャーチルという偉大なヨーロッパの政治家がクーデンホーフという名前を演説の中で呼んだ。さらに、かれが半生をかけて築き上げてきた「パン・ヨーロッパ同盟」の功績がたたえられた意味は大きい。かれはまさに「世界中で一番の幸せ者」となっていたのだった。

そして、クーデンホーフは演説のなかにあった「ヨーロッパ合衆国」という言葉から、チャーチルがアメリカ合衆国のような連邦制による統合を意図していると捉えた。だから、フランスとドイツの和解が「すぐにでも連邦化をもたらすでしょう」という。

チャーチルはこのクーデンホーフの手紙に対して反論することは一切なく、むしろ九月二七日には、「貴殿の同盟のすべての詳しい情報をすぐに送られたし[30]」という急ぎの電報を打っている。クーデンホーフのパン・ヨーロッパ同盟との協力関係をすでに視野に入れているのだ。

以来、仏独和解によってもたらされる大陸欧州の「連邦化」という暗黙の前提が二人の間に成立した。いや、正確にいえばクーデンホーフがそう思い込んだ。チャーチルはクーデンホーフの「連邦化がもたらされる」という議論に対して、反論こそしなかったが、賛成も表明していないというべきだろう。

演説の一ヶ月後の一〇月、クーデンホーフはチャーチルからロンドンの南東ケント州のチャートウェルの別荘に招かれた。

チャーチルは言った。

私のように、この世から十分以上の成功に恵まれた人間は、ヨーロッパ運動によってなんら個人的な野心を追求しているものではないという点を信じて頂きたい。ヨーロッパ運動をはじめたのはあなたです。したがって、

この運動は私がいなくてもすすめられるけれども、あなたがいなくては進められるものではない！ですから、私があなたに対していつも公正に振る舞うのだということを信じて頂きたい！[31]

クーデンホーフにとって、チャーチルのこの言葉はなによりも嬉しかったに違いない。「ヨーロッパ合衆国」論者として世界に知れわたるチャーチルが、クーデンホーフをヨーロッパ統合をめざす運動の指導者であると認めたのである。そして、「公正に振る舞う」ことを誓った。これは、欧州統合運動を推進させるさいには、クーデンホーフを指導者として、進めることを意味していた。チャーチルが大陸欧州の「連邦化」に賛成しているとクーデンホーフがみなすことは当然である。クーデンホーフは、常に大陸欧州の連邦化を構想していたし、チャーチルはそれに対して一言も否定しなかったのだ。

ウィルソン大統領というカリスマ性を持った政治家に憧れ、秩序の再構築を目指してきたクーデンホーフにとって、これほど嬉しい申し出はなかったにちがいない。

こうして、クーデンホーフはチャーチルと共に欧州の統合にむけて歩み出した。

イギリスを中心にした活動をチャーチルにまかせたクーデンホーフはヨーロッパ大陸諸国でのヨーロッパ統合運動をより鞏固なものとするため、一九四六年一二月、ヨーロッパをはなれ、アメリカにわたった。

クーデンホーフのアメリカ滞在中は、「あなたのすべての行動を逐一教えてください。どんなことにも協力を惜しみません[32]」と約束したように、チャーチルの娘婿であるダンカン・サンディスを通じて、チャーチルとクーデンホーフは近況報告を重ねながら、それぞれの運動の進展を図っていった。

一二月四日、さっそく、アメリカにいるクーデンホーフのもとにサンディスから手紙が届いた。

ここでの進捗状況を知りたいのではないかと思いますので報告します。・・・先週はパリにも行き、多くの人たちと議論をしました。あなたの助言通りにレネ・コールティンと数人のかれの友人たちに会いました。現段階では、フランスではすべてのことが難しそうです。・・・様々な人たちとの議論を通して、ドイツの将来にかんする問題の重要性を強く認識しました。フランスではいまだに、ロシアよりもドイツの方が真の脅威で、ヨーロッパ統一はドイツを大きくするだけのことだと考え、恐れている人が多すぎです。

だから、まずはじめにイギリスとフランスが共同してヨーロッパ運動の中核として推進していかなくてはなりません。そして両者が合意できる活動計画を確立した後に、ドイツをヨーロッパ・ファミリーの一員として加えればいいのでしょう。

アメリカでどのように事がすすんでいるのか、続けてお知らせください。あなたと奥様のご多幸をお祈り申し上げています。

貴殿の友、ダンカンより[33]

サンディスは、クーデンホーフの紹介によって、フランスにおもむき、現地での統合への手応えを調べている。

そこで、統合の核となるべき仏独和解がいまだ、現実味を帯びていない情況を認識するに至る。サンディスは、ここにイギリス政府の役割を見いだしたようだ。

このサンディスの報告に対してクーデンホーフは、アメリカからすぐに返事を送っている。

敬愛するダンカン・サンディスへ

一二月四日の手紙、ありがとうございます。

あなたのパリの旅の報告がきけてとても嬉しいかぎりです。

コールティンも手紙を送ってくれたのですが、協力関係を築くことにとても期待をしているようです。

イギリス単独よりもフランスとイギリスが手を組むことによって統合をはじめることは非常によい手段だと思います。特に、フランスの社会主義陣営は協力的だと思います・・・。[34]

クーデンホーフも、イギリスとフランスが統合プロセスを軌道に乗せ、その後にドイツを引き入れるというサンディスの考えに賛成している。さらに、戦間期を通して、フランスで活動していたクーデンホーフは、社会主義陣営のほうがヨーロッパの統合に積極的であるという貴重な助言を与えている。

このやり取りを通じて読み取れるのは、クーデンホーフとチャーチル、サンディスの両者がドイツを統合の枠組みのなかに組み入れるためには、まずイギリスとフランスの関係を築くことが大切であるとの認識を有していることだ。

サンディスが手紙で述べているように、フランス国内ではいまだドイツへの脅威が大きく、ドイツと和解をする準備は全く整っていなかった。そこで、イギリスはフランスと協力して統合プロセスの下地をつくり、フランスとドイツの仲介役として両者を和解へと導くことで、ヨーロッパ大陸へのイギリスの影響力を確保しようと考えている。

クーデンホーフもサンディスもイギリスが英連邦諸国をまきこんで、この統合自体に参加することはおよそ不可能であることを認識していた。

イギリス単独での参加ならまだ現実味はあるが、英連邦は、アフリカ、カナダ、オーストラリアと世界中のいたる地域を包含している。イギリスは世界の陸地の四分の一を支配する世界帝国なのだ。イギリスがその連邦諸国を切り離してまで、欧州大陸の統合プロセスに参加することはおよそ考えられない。

だから、統一は大陸のみで行なわれるべきであるが、統一後もイギリスの影響力を維持しておきたいとチャーチルは考えた。そこで、統合の核となる仏独和解をイギリスの仲介によって成功させることを構想したのだろう。

欧州大陸を統一したいクーデンホーフにとっても、独仏和解を成立させるためにイギリスが仲介役を担うことは嬉しい提案であった。

チャーチルとクーデンホーフとの意図がここで合致したということになる。

さらに、クーデンホーフが持っていた人脈リストはチャーチルにとって魅力的であった。

クーデンホーフは一九二五年のパン・ヨーロッパ運動開始以来、欧州諸国に欧州統合に賛成する人々の幅広い人間関係を構築していた。その際に、綿密な政策の提示などは一切することはなく、ただ欧州統合に賛成か反対かのみを問い続けた。賛成であれば、その人物がいかなる形での統合を望んでいようとも、自らのリストに書き加えた。[35]

偶然にも、その手法は古典的な外交交渉にも通じる。外交はあらかじめ設定された問題についてのみ外交官が意見を調整するのではなく、日頃から諸外国の外交官同士の個人的な人間関係を構築しておくことが重要なのだ。[36]

国家間で問題や争いが生じた時、平時に築き上げた人間関係を駆使して互いの利益を導き出すという政治行為が外交なのである。

世界各地に拠点をもち、外交によってその勢力を維持し続けた大英帝国の伝統を引き継ぐチャーチルが、人脈リストを武器にして政治運動を展開するクーデンホーフのやりかたに興味を示したことは想像に難くない。人脈リストは政治を動かす時に強大な力を発揮することをかれは十分すぎるほど知っていたのだ。

人脈リストの重要性は、チャーチルの義理の息子のダンカン・サンディスが、クーデンホーフに人脈リストをたびたび要求していることからも明らかである。

> 英国下院議会再開に際して、欧州統合支持グループの勢力増強を図りたいと思っている。そのために欧州統合に賛成している全てのイギリス国会議員の最新のリストを送ってくれないだろうか。[37]

イギリス人であるサンディスがイギリス国会議員のリストをクーデンホーフに要求している。クーデンホーフのリストはそれほど貴重であったということだ。

チャーチルとサンディスは、クーデンホーフから得たリストをもとにして、イギリスの国会議員や有識者でヨーロッパの統合に賛成しているものたちを集めた。そして、政治運動としての形を着実に整え、一九四七年一月一六日に自らを議長とした「暫定イギリス統一欧州委員会」を設立した。

この委員会の設立に関して、クーデンホーフは好意的であった。設立後、クーデンホーフはサンディスへ祝福の手紙を送っている。

> 敬愛なるダンカン・サンディスへ
>
> なによりもまず、委員会の成功おめでとう！私には、交渉がどれほど困難で複雑なものかよくわかる。だから、やっと委員会が設立されてきみがどれほど嬉しいことかもよくわかるよ！
>
> 次のプランは考えているのだろうか？あらたなメンバーを加えることで委員会を大きくしようとしているのだろうか？ヨーロッパ大陸から支持を得るために、労働党からの有力な参加者がいればいいのだが。私のアンケートに「イエス」と答えたメンバーなら協力してくれると思う。私の渡したリストがあればだれか見つけられるだろう・・・。[38]

当時イギリスの政権党であった労働党と野党保守党のチャーチルとの間には確執があったようだ。「労働党からの有力な参加者がいればいい」とのべ、現時点では労働党が否定的な姿勢であることを問題であるとするクーデンホーフの指摘の正しさはのちに証明されることとなる。

実は、三名の労働党国会議員がこの委員会に参加していたが[39]、労働党執行部はかれらに脱退勧告をしていたのだ。

しかし、チャーチルは与党労働党の抵抗に屈することなく、五月に「統一欧州運動(UEM)」を設立した。

この運動の設立記念大会は五月一四日、ロンドンのアルバート・ホールで開催された。二〇〇名におよぶ人びとが集まり、イギリス政界の重鎮たちが顔を揃えていた。イギリスの名優ローレンス・オリビエも出席していた。そこでのチャーチルの演説はきわめて文化的な要素の強いもので、明確な方針などを述べることはなかったが、四つの柱として「まずアメリカ合衆国がそ

の属領とともにある。ソ連がある。続いて、イギリス帝国と英連邦諸国がある。そして欧州があり、イギリスはそこに深く混じり合っているのだ」とのべ、「これが平和という世界神殿における、四つの主要な柱である」といい、強力な柱となるべく、統一欧州をつくりあげることを主張した。そして、「統一欧州がなくては、世界政府への確かなる展望は抱けないのだ[40]」と断言した。

チャーチルは、欧州大陸の統合とイギリス連邦とを別の軸として考えている。しかし、ここでもその関係については、「欧州があり、イギリスはそこに深く混じり合っているのだ」という極めて文学的としかいいようのない表現にとどまっていて、具体性を欠いている。このあいまいなチャーチルの態度は、のちの欧州統合運動をより複雑なものとする。

このとき、「統一欧州運動」としていかなる活動を行なっていくかということについて、サンディスがクーデンホーフに手紙で報告をしている。

「統一欧州運動」の具体的な活動内容がわかれば、チャーチルの意図が明確になるかもしれない。

五月一七日と六月三日の二通の手紙をありがとう。

アルバートホールでの結果には満足している。私たちは様々な活動をはじめようと思っている。

一、今月中にロンドンにオフィスを開設する。

二、すぐに拡大総会議の名称を発表し、資金のために公共にアピールする。

三、増えてくる要求に対処するためのパネル（委員会）を開く。

四、イギリスの主要都市での大規模な公共集会を開催する。

五、イングランド中部地方、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドなどの地方委員会をつくる（ウェールズはすでに発表されている）

六、統一ヨーロッパ展覧会をロンドンで秋におこない、後に大陸でも行なう（これは重要で、君のアドヴァイスをうかがいたい）

七、フランス議会のフランス連邦運動とグループの招待を受けて来月にフランスに行く、卓越したイギリス代表団を収集中だ。

ところで、君の議会での進展を聞くのが楽しみだ。近いうちに会おう。[41]

この手紙から、チャーチルは統一ヨーロッパ運動の主な目的としてヨーロッパの統合を世間に訴えようとしていることがわかる。しかし、残念ながらそれ以外の具体的な政策は見えて来ない。わかるのは、「統一ヨーロッパ展覧会」など、やはり文化的な側面が強いことだけだ。

しかし、フランス国会議員によって構成されるフランス連邦運動と会議を開くといっているように、フランスを入り口として大陸諸国との関係を構築していこうとする姿勢は一貫している。チャーチルは、この先にフランスとドイツとの統合を見据えていた。

他方で、アメリカからのヨーロッパ統合への支援を得ようとしているクーデンホーフも独自に行動をおこしていた。

一九四七年一月二八日、クーデンホーフはチャーチルにつぎのような手紙を送っている。

敬愛なるウィンストン・チャーチル公へ

あなたの委員会が正式に発足するまで、混乱を避けるために送るのを控

えておりました。ヨーロッパ連邦に協力をしてくれるヨーロッパの卓越した国家議員たちに送ったメモランダムのコピーを同封します。かれらが参加する議会を創設し、かれらの政党プログラムにヨーロッパ連邦を入れてもらうのです。

なによりもまず、あなたにお知らせしたのは、あなたにヨーロッパ議会・審議会の初代議長になっていただきたいからです。そして、あなたの政党が手本となれば、ヨーロッパ大陸中の政党が続いて参加していくことは間違いないことだからです。・・・大陸諸国にたいして行なったアンケートの最初の結果は、私の楽観的な予測をはるかに上回るものでした。フランスからの好意的な反応として、ヴァンサン・オリオール大統領や・・・・約二〇〇人のイタリアからの「イエス」の回答・・・をふくめ、さまざまな政党からの返事をもらっています。

私は、国会議員ではありませんから正式なメンバーとなることはできません。しかし、メンバーになるためのこの厳しい制約が他の委員会や組織などとの重複を避ける最高の保証となります。

議会主導を訴えるのは、時間が勝負だからです。戦争と革命が近づいているのですから。だからこそ、ヨーロッパを代表するなんらかのセミオフィシャルな主体をつくりあげなければなりません。大国の委員会がその国の議会の多数派を取り込むと同時に、それはほぼ自動的に正式なものとなるでしょう。われわれの機関の統合も含め、この議会主導についてどう考えているかお聞かせ願いたいです。

貴殿と貴殿の理念にご多幸あれ。[42]

行動力あるチャーチルのおかげで、欧州統合運動はイギリスを中心として本格化していた。そこで、クーデンホーフはさらに実現性をもたせるための提案をしている。欧州各国の国会議員のみによって構成される「ヨーロッパ議会」の創設を提案したのだ。

「セミオフィシャルな主体」をつくりあげなくてはならないという構想は、クーデンホーフがアメリカ滞在中に考え出したことであった。次章で詳しく述べるが、クーデンホーフはアメリカの国会議員たちとの交流を通じて、これまで行なってきた非政府主体の組織による政治運動の限界を感じ、方向転換を意識し出していた。この構想はのちに「欧州議員同盟」へと結実することとなる。

第四節　セミ・オフィシャルな主体

朝起きると疲労を感じた。

考えてみれば当然かもしれない。

史料館に通いだしてからすでに四日がすぎていた。その間、朝食で出される黒パンとジャム以外のものを口にしていなかった。朝九時前に史料館に到着してから史料館が閉まる夕方の五時まで閲覧室にこもって往復書簡を読み続けた。ホステルに帰ってくるころには、疲れはてて食欲も失っている。なんとかシャワーを浴びて固いベッドに潜り込み、その日の成果をノート・パソコンで記録するといつの間にか眠ってしまう。そんな日々が続いていた。

それほどまでに肉体的に消耗しきっていた。

しかし、昨日までに目を通した書簡からクーデンホーフとチャーチルの構想の全体像がなんとなくつかめてきたことで、どうにか精神的なバランスは

保たれていた。

チャーチルがヨーロッパが統合することは「イギリス、アメリカ、およびソ連の高度の恒久的利益と一致するもの」であるとのべていることは、重要だ。チャーチルが指摘するように、ヨーロッパを連邦化することは、ふたつの大きな意義があったということになる。

第一次、第二次世界大戦のきっかけとなった欧州諸国同士の内乱を防ぐこと。そして、アメリカとソ連に匹敵する欧州をつくりあげることだ。

欧州を統合することによって、このふたつの大きな問題を解決しようとする方針は、クーデンホーフもまったく同様である。そして、行動力あるチャーチルのおかげで、欧州統合運動はイギリスを中心として本格化していた。

しかし気にかかるのは、クーデンホーフの提案である。クーデンホーフはチャーチルに、欧州各国の国会議員のみによって構成される「ヨーロッパ議会」の創設を提案している。

クーデンホーフとチャーチルの蜜月が始まって以来、チャーチルは精力的に欧州統合運動を展開し、「統一欧州運動」を設立もしている。このような積極的な行動にも関わらず、クーデンホーフは、チャーチルにこれまでの運動とは方法の違う「セミ・オフシャルな主体」を作ることを提案している。これまでの運動が、欧州統合理念を支持するすべての人に運動参加を呼びかけていたのに対して、「セミ・オフィシャルな主体」は、参加者は国会議員に限られるという「厳しい制約」をもうけている。

クーデンホーフは、どうして突然「セミ・オフィシャルな主体」をつくりあげることをチャーチルに提案したのだろうか。

かれは、どこでそのようなことを思いついたのだろうか。

私は、往復書簡やその他の史料を時系列に並べ、照らし合わせてみた。すると、ある事実に気がついた。

クーデンホーフが、「セミ・オフィシャルな主体」をつくりあげることを提案した時期と、かれがアメリカに渡った時期が重なっている。

アメリカで、なにがあったのだろうか。

第二章　冷戦のなかのヨーロッパ統合
―あるいは対立の予兆―

第一節　フルブライトの提案

一九四七年四月二四日、クーデンホーフは、アメリカのニューヨーク港を出発した豪華客船クイーン・エリザベス号でロンドンを目指していた。

かれは、深い紺色の上等な三つ揃いに身を包んでいる。誇らしげに胸に付けているのは、自らがデザインした黄金色の丸いバッジだ。黄金色の丸い形は太陽を表し、ギリシャの精神を意味している。中央にはキリスト教文明を意味する赤十字が刻まれている。ヨーロッパ文明の二つの基礎を示すこのバッジは、彼が考案した「ヨーロッパ統合」の象徴である。[43]

五日間の航海を終えたクイーン・エリザベス号は四月二九日、イギリスのサウザンプトンに帰航した。

クーデンホーフは、妻のイダ・ローランと共に下船するとその足でロンドンへ向かった。夫妻は、港からロンドン市街まで一二〇キロ以上の距離をわずか三時間でたどり着いた。おかげで予定よりもずっとはやく、昼過ぎには到着していた。

クーデンホーフ夫妻をロンドンの自宅で出迎えたのは、ウィンストン・レオナード・スペンサー・チャーチルだった。

チャーチルは、居間に昼食を用意して、思ったより早くあらわれた来客、パン・ヨーロッパ連盟会長リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギーを慇懃にもてなした。

チャーチルがクーデンホーフからすでに受け取っていた書簡にはこう記されていた。

敬愛なるウィンストン・チャーチルへ

クイーン・エリザベス号で四月二九日火曜日にロンドンに戻ります。NYを二四日に旅立ちます。

ロンドンでは五月三日土曜日の朝まで、ドーチェスター・ホテルに滞在する予定です。私と会うのに都合のよろしいお時間を電報でお知らせいただけないでしょうか。ロンドンでのすべての予定に優先させます。

また、ヨーロッパ連邦についての私のアンケートに「イエス」と答えてくれた国会議員たちにも会いたいと思います。

私は十分に満足してアメリカを去ります。アメリカはフルサポートしてくれるのです。これはロシアの反対にたいする相対化であり、すべてのヨーロッパ人の統合への努力を可能にするものです。

来週、七八人の署名付きで「ヨーロッパ合衆国のためにアメリカ国民に訴える」が提出されます。そして近いうちに議会で審議されます。

すぐに、会えるのを楽しみにしています。[44]

「ロンドンでのすべての予定を優先」させてやってきた来客に対して失礼な態度をとることはできない。

さらに、手紙に書かれているクーデンホーフのアメリカでの活動の成果がとても貴重なものであることをだれよりも熟知していたのはチャーチルだった。アメリカ人の母を持つものとして、同時にイギリスの政治家としてアメリカとの関係は最重要課題のうちのひとつであった。

チャーチルは、ヨーロッパ統合にかんしてアメリカ政府がいかなる理由でそれを支持し、いかなる統合の形態を想定しているのかという詳しい話を聞きたくてたまらなかった。首相在任時に比べれば、今のチャーチルにもたらされる外国政府の内部情報は限られていた。アメリカ政界に太いパイプを持ち、アメリカでのヨーロッパ統合運動を牽引してきたクーデンホーフがもたらす情報は貴重だった。

昼食を済ませるとクーデンホーフは早速、アメリカでの成果を報告した。

クーデンホーフは友人であるJ・ウィリアム・フルブライト上院議員の話をはじめた。

フルブライトはアーカンソー州選出の上院議員だ。一九四三年から四五年には下院議員を務め、アメリカが国際連合に参加することを提案する決議案を議会に提出し、可決させた。以来、アメリカの外交政策に深くかかわっている大物政治家である。

フルブライトはクーデンホーフの説得によって上下両院に「アメリカ国会は国際連合の枠内でヨーロッパ合衆国を結成することに賛成する」という決議案をアメリカ議会に提出した。それは、クーデンホーフが伝えるように「ここで起こりうる最良の出来事[45]」であった。

チャーチルはアメリカ政界がヨーロッパの統合に極めて積極的な反応をしているというクーデンホーフの報告にとても満足した。

ところで、クーデンホーフがアメリカに滞在していた時期、とくに一九四

六年から四七年は国際政治にとってきわめて重要な意味をもつ。一九四六年三月五日には、チャーチルの「鉄のカーテン演説」がなされ、冷戦構造がことばで明確にされた。

さらに重要なのが一九四七年二月二一日、イギリス政府がギリシャ支援打ち切りの秘密電報をマーシャル国務長官宛に送ったことだ。

ギリシャ国内の共産主義勢力に対抗する王党派への支援はそれまでイギリスが担ってきていた。しかし、イギリス国内の財政状況は悪化の一途をたどっており、イギリス政府にとってギリシャ王党派への支援はもはや限界であった。アトリー首相は、ギリシャへの支援を打ち切らざるを得ないと判断し、アメリカに肩代わりしてもらおうとしたのだ。

マーシャルが電報をうけとった直後の三月一二日、トルーマン大統領は下院の上下両院合同会議の場で演説し、ギリシャおよびトルコに対する米国からの援助の必要性を訴えた。この演説は以後、アメリカ外交の基本方針を示した「トルーマン・ドクトリン」として知られることになる。

トルーマンは、演説の冒頭で、ギリシャおよびトルコへの支援を「米国の外交政策と国家安全保障に関する問題である」と断言し、遠くギリシャおよびトルコの国内問題にアメリカが関与する必要性を説いた。トルーマンはその理由を「ソ連の全体主義体制が世界平和を脅かし、ひいては米国の安全を損なうにいたることを率直に認めざるを得ない」からであると説明した。そして「全体主義の種は、貧窮と欠乏の中に培われる」と断言し、ギリシャおよびトルコの経済状況悪化が両国をソ連陣営に組み込むこととなってしまう危険性を主張した。

トルーマンはこの演説によってソ連全体主義対アメリカ自由主義という対立構造をアメリカ国民ならず全世界に対して示した。アチソン国務次官はギリシャ援助をめぐる大統領との協議の席上で「この地球上でいまほど権力の両極化が進んだことは、ローマ、カルタゴ以来なかったことだ」と述べたという。[46]

トルーマン・ドクトリンの国際政治上の意義は、冷戦の主人公をアメリカとソ連の二大国に限定したことである。その結果ヨーロッパは、米ソの対立という構図となった国際政治の舞台での主役の座を失い、第三の勢力となった。アメリカとソ連はその第三勢力であるヨーロッパの獲得に動き始めることとなる。

このような激動の時期にクーデンホーフはアメリカでの活動を行っていた。アメリカ政界はヨーロッパがソ連共産主義の影響を受けることになることをとても危惧していた。そこで、クーデンホーフはヨーロッパが統合することで、共産化の脅威を撃退できるという構想をアメリカ政界に対して主張する。この構想についてはこれから詳しく考察するが、それこそがフルブライト提案が提出された最大の要因であった。ダレス国務長官もアメリカでの熱心なヨーロッパ統合論者であったが、かれが統合を支持するのもこのような理由からであった。[47]

フルブライト上院議員の提出した決議案についてクーデンホーフはチャーチル宛の書簡のなかで、その意義を次のように説明している。

敬愛なるウィンストン・チャーチルへ

少し前、フルブライト上院議員にアメリカ議会は国際連合の枠内でヨーロッパ合衆国を結成することに賛成するという決議案を議会に提出してくれるように頼みました。先週、フルブライト上院議員はこの決議案を提出し、エルバート・トーマス上院議員が支持してくれています。さらに、へ

イル・ボッグス議員によって下院にも提出されました。

これは私たちの運動をアメリカ合衆国が全力で支持してくれ、同時にロシアの反対を相殺するものだと看做しています。

しかし私たちヨーロッパ人は、アメリカ議会に主導権を渡すのではなく、ヨーロッパ各国の議会が同様の決議を早急に行なうべきです。これは同時にフルブライト案が議会で圧倒的な賛成を得る促進力にもなります。

私のアンケートに賛成してくれた幾人かのヨーロッパの議員にそうした決議案を送るように手紙を出しました。しかし、ヨーロッパの統一に最もいいのはあなたがイニシアチブを発揮し、労働党と自由党と共同でそうした決議案をイギリス国会に提出し、圧倒的多数で可決されることです。

すぐにでもお会いできることを楽しみにしています。[48]

クーデンホーフは欧州諸国にとって、アメリカ議会がヨーロッパ統合を支持することが二つの点において重要な意味をもつことを説明している。

第一は、ロシアの脅威を相殺できるという点だ。クーデンホーフは、ヨーロッパの統合がソ連にとって都合のよい結果を生む可能性もあることを指摘し続けていた。つまり、ヨーロッパ地域の共産化をもくろむソ連にとって、ひとつひとつの国を共産化していくよりも、ひとつにまとまったヨーロッパが共産化することはむしろ好都合なのである。だから、ヨーロッパの統合のアメリカ議会の支持は、アメリカの影響下によって統合される保証となるのである。

第二に、フルブライト提案が議会に公式に提出されたことを指摘している。ヨーロッパ諸国では統合運動は盛んであっても、実際に各国が、議会で統合に関する決議を行なうことはなかった。アメリカ議会の決議案提出が具体的な行動をおこさないヨーロッパ諸国の政府への圧力となることを期待したのである。クーデンホーフはアメリカ議会とヨーロッパ諸国の政府との間でのヨーロッパ統合運動の相乗効果を狙ったのだ。

フルブライト提案の提出によってヨーロッパの各国政府が「アメリカ議会に主導権が渡る」という焦りを感じ、ヨーロッパ統合への公式な動きを開始すれば、こんどはアメリカ政府が統合ヨーロッパの共産化への焦りを感じ、フルブライト提案を決議するということだ。

しかし、現実は意図するように進むものではない。フルブライト提案の提出までも紆余曲折があったし、決議に至るまでにはさらなる困難が待ち受けていた。

クーデンホーフが最初に突き当たった壁は、ヨーロッパとアメリカの政治運動に対する認識の違いでもあった。

まず、フルブライト提案が提出されるまでの道のりを見ていくことにしよう。

決議案提出からさかのぼることおよそ三ヶ月前の一九四七年一月六日、クーデンホーフはフルブライトから書簡を受け取った。

親愛なるクーデンホーフ・カレルギーへ

一月四日のご丁寧な手紙にお礼をいいます。

あなたのヨーロッパ合衆国についての見解によれば、それはかなりの価値があると思っています。そして現時点で、その運動を支援しようと考えています。しかし、上院で決断がくだされるよりもずっとはやく声明に署名することで公に奉仕するという立場にあるものにとって、このような方法が懸命であるとは考えられない。

基本的に、このような手段を認め、薦めはしない。実際のところ、公共の関与を問うよりも上院で議論することが最も効率的だと考えている。[49]

クーデンホーフはパン・ヨーロッパ運動のアメリカ支部の参加者らに署名された「ヨーロッパ合衆国のためにアメリカ合衆国国民に訴える」という宣言を出し、それに署名をするようにフルブライトに頼んでいた。しかし、フルブライトは署名を断った。フルブライトは上院議員が非公式な団体に所属することは好ましくないと述べた。ヨーロッパ統合の理念には賛成するが、クーデンホーフの組織する非公式な政治運動や組織への参加は断ったのである。クーデンホーフの組織するパン・ヨーロッパ同盟には、オーストリアなどをはじめ各国で中心的な役割を果たしている現役の国会議員が参加はしていたが、あくまで政府とは別組織であった。

しかしなぜフルブライトはそれほどまでに躊躇したのだろうか。

非政府組織への懸念はフルブライトに限らず、おおくのアメリカ人議員が共有していたものであった。クーデンホーフは、以前にもパン・ヨーロッパ同盟のアメリカ支部を設立するさいに、資産家のヘンリー・モーゲンソーからも非政府組織の問題点を指摘されていた。

あなたの声明は、極めて興味深く、私の息子にも伝わったと確信しています。土曜日に息子の農場でランチを共にした時に渡したのです。私の弁護士が本日私にいったのは、法人化されていない委員会には入るべきではないそうです。あなたの委員会はいつそしてどこで法人化されるのでしょうか。弁護士がいうには、法人化されていない委員会では、すべてのメンバーがすべての負債にたいして義務を負うというのです。[50]

この書簡には、外交官であると同時に実業家でもあるモーゲンソーの徹底的な現実感があらわれている。モーゲンソーは、非公式な団体に所属することを嫌った。確かに、クーデンホーフがこれまで組織してきた政治運動団体は、責任の所在が明確にされていない。たとえば、政治運動の過程で、第三者の名誉を傷つけたりした場合に、責任の所在が明確にされていない以上、運動参加者全員が被害を被ることとなってしまうのだ。それ以外にも、金銭面など、法的側面の不備はたくさんある。こうした点をモーゲンソーは懸念しているのだ。

フルブライトの拒否の理由も同じものであったのだろう。

非公式な政治運動に参加することを拒むフルブライトにたいして、クーデンホーフは思いがけない提案をする。

・・・われわれの嘆願への署名をあなたがためらう理由を理解しました。しかし、エルバート・トーマス上院議員が前例となって署名をしてくれました。あなたがこの問題を再考してくれることを望みます。

もちろん、あなたができる最も効果的なのは、ヨーロッパ連邦に共鳴する上院決議を提出するか、上院にこの特別な問題を研究する委員会を設置するかです。

私がワシントンに戻り次第、この問題についてあなたと議論できることを嬉しく思います。[51]

大胆な発想である。クーデンホーフは「ヨーロッパ連邦に共鳴する上院決議を提出するか、上院にこの特別な問題を研究する委員会を設置するか」と

述べ、上院議員は上院で意見をのべるべきだというのであれば、そうしてくれと頼んだのである。

アメリカでの非公式な政治運動を一転して公式なものとしようとしたのである。

そしてクーデンホーフにとって、「ここで起こりうる最良の出来事」が起った。

驚くべきことに、この申し出に答えたフルブライトが早速、決議案を上院に提出したのだ。決議案は、ルイジアナ選出の下院議員であるヘイル・ボッグズによって下院にも提出された。

フルブライトに会うために、滞在先のニューヨークからワシントンへ赴いた時、クーデンホーフは「両眼から涙が溢れているのに気づいた」。一九二三年以来の主張がアメリカという大国の議会に正式に認められようとしているのだ。かれは、「いっしょに旅行している人々に気づかれるのを避けるため、窓の方に向いてペンシルバニアの春の遠景を眺めながら神に感謝した[52]」。

しかし、アメリカでの成功を喜ぶと同時に、クーデンホーフは以後の運動の方向性について考えなくてはならなかった。これまで、行なってきた有識者を中心とした非政府主体の運動ではなく、国会議員主導による、政府を取り組むことを視野に入れた政治運動を展開していくべきであることを、フルブライトとの交渉を通じてクーデンホーフは悟ったのである。

＊

ようやく、クーデンホーフが「セミ・オフィシャルな主体」の設立を思い立った経緯の全体像がつかむことができた。

これまでの政治運動はどこまでも理念の啓蒙にすぎなかった。欧州統合という理念を実現しようとすれば、実際に各国の議会に行動を起こさせなければならないのだ。そのためには、各国の政策に直接かかわることになる国会議員のみによる「セミ・オフィシャルな主体」を設立する必要がある。

実効性を重視するアメリカの国会議員たちとの出会いを通じて、クーデンホーフは理念を実現化するための方法を獲得したのだ。

アメリカでの活動を通してクーデンホーフはパン・ヨーロッパ理念の実現に大きく前進したことになる。

しかし、なぜアメリカは欧州統合を支持し、クーデンホーフと積極的にかかわろうとしたのだろうか。

そこには、クーデンホーフとチャーチルと同様に、ソ連への脅威があった。

第二節　マーシャル・プラン

欧州復興計画、通称「マーシャル・プラン」はクーデンホーフがヨーロッパに戻った後、一九四七年四月から開始された。

四月二八日、モスクワでの英米ソ三カ国外相会談から帰国したマーシャルは「西ヨーロッパの苦しい状況が重大化しており、緊迫化しているのを身をもって知り、動転していた[53]」という。

ソ連との会談を通して、マーシャル長官はソ連の恐ろしい意図を読み取った。

この時期アメリカは自らの単独行動が大国間の協力関係を破ることにつながることを恐れ、ヨーロッパへの援助を積極的に行えない状態であった。ア

メリカのヨーロッパ諸国への援助の足止めこそがクレムリンの狙いであることにマーシャル長官は気づいたのだ。

会談ではドイツとオーストリアの講和問題について議論がなされたが、ソ連は英米の提案にことごとく反対した。特にドイツの処遇については、英米が連邦制を主張するのに対して、ソ連は強力な中央集権制を主張し、議論は一切進まなかった。経済問題では、英米が提案する四カ国経済共同統合案に反対、さらに百億ドルの賠償を申し立てて譲らず、ここでも議論が進展することはなかった。

マーシャル長官はこの情況を「医者が頭をひねっている間に、患者の病状は刻々悪くなっている[54]」と表現し、ソ連の強硬な姿勢のおかげで議論が紛糾し、解決策を示せずにいれば西欧の情勢は日増しに悪化することを懸念している。交渉をできるだけ引き延ばし、ヨーロッパ情勢を悪化させることこそがクレムリンの意図なのだ。長引く経済不況は、ヨーロッパ諸国に資本主義経済の限界を認識させ、社会主義経済へ転向するきっかけとなるだろうという考えだ。

確かに、一九四七年初頭から欧州各国は「経済の計画化」に乗り出している。東欧諸国ではソ連を模した「計画経済化」が実行された。西欧でもオランダ政府は詳細な国民経済の計画表を作り、国民に今後の経済の方向を示し、フランス政府も「近代化並びに施設に関する四カ年計画」を作成し、イギリス政府は「計画された社会民主主義」の名の下に国有化政策に着手している。これらのヨーロッパ経済の評価として、クレイトン米国務次官は「ヨーロッパの危機」と題した覚え書きで「私的営業の衰退と国有化の推進」といった社会主義的政策が広がりつつあることを指摘した。さらにこれに続発する政治危機が拍車をかけているとのべ、「西欧の社会主義化」に警鐘をならしている。[55]

ことの重大さを察知し、ヨーロッパ復興が一刻の猶予も許さないことを悟ったマーシャルは、ジョージ・ケナンを呼び出した。

ジョージ・ケナンは在外研究員としてロシアに長く滞在した、ロシア問題のスペシャリストであった。一九四六年二月二二日、のちにアメリカの対ソ政策の基軸となる「長文電報」と呼ばれる電報をモスクワから打電し、その洞察力が認められワシントンに呼び戻され、新設されたナショナル・ウォー・カレッジの外国事情担当副指揮官として前年から国防にたずさわっていた。

マーシャルは五月五日、国務省内に政策企画本部を設置し、ケナンを本部長に就任させた。そしてヨーロッパの混乱を救出する計画を早急に練り上げるよう命じた。マーシャルの焦りは、尋常なものではなかった。かれはいつになく焦った面持ちで「小事にこだわるな[56]」とケナンにいった。

マーシャルの緊急の要請を受けてたケナンはのちの「マーシャル・プラン」の下地となる欧州復興計画案の作成をはじめる。この時、かれがもっとも関心をよせていたのがいわゆる「ドイツ問題」だった。

それまでアメリカは、ドイツ占領政策の重点をドイツ人公職員の非ナチ化と民主化に設定していた。そうした従来の占領政策にたいして、ケナンは「ドイツの復興こそヨーロッパ全体の復興の重要な基礎」だと考え、「ドイツ経済の復元に決定的な重点」を置いた。[57]

しかし、ドイツ経済の復興がドイツを大国として復活させることで新たな戦争の火種となることだけは避けなければならなかった。ヨーロッパ大陸の中心に位置する大国ドイツの経済はヨーロッパ全体の経済復興に必要不可欠であるが、同時にドイツの復興は世界大戦の二の舞となる恐れもあったのである。

アメリカ政界、とりわけ国務省内でのこうした関心にあわせるように、クーデンホーフはドイツ問題に関して「ドイツとの平和にかんする覚え書き[58]」を執筆し、アメリカ国務省関係者らに送っている。

全六項目で構成されるこの覚え書きは「第四ドイツ帝国の阻止」という項目からはじまる。

ドイツ第一帝国は、第一次世界大戦を引き起こした。成功したワイマール共和国はナチズムの萌芽であった。そしてドイツ第三帝国は第二次世界大戦をはじめた。いかなるドイツ第四帝国も、遅かれ早かれ爆発するヨーロッパの時限爆弾であり、帝国が共和国であろうと、独裁であろうと、ソ連国家であろうと関係はない。この危機に対して、民主主義は防御とはならない。ワイマール共和国の民主主義は、ヒトラー帝国の出発点であった。ドイツの非武装化も第一次世界大戦後のヨーロッパを守りはしなかった。・・・いかなる連邦議会もドイツの危険をチェックすることは不可能である。これまでの三つのドイツ帝国はどれも連邦制のもとに成立していたのだ。同じような政府と議会はもはやドイツ危機を継続させるだけである。・・・ふたたび戦争と革命によって、ヨーロッパの秩序を揺するのだ。

クーデンホーフはドイツ再建に際してのドイツの連邦化を鋭く批判している。かれは新生ドイツの政治体制についてドイツの「共同体への転換のみがヨーロッパの未来を救う」という。まず、「どのドイツ国家も将来にドイツ第四帝国の核となるほど強力であってはならない。しかし、それぞれのドイツ国家はそれぞれの市民がプライドと愛国心を持てるほどの大きさを維持しなくてはならない」といい、バイエルンをはじめとする六つの国家にドイツを分割することを提案する。[59]

それら六つの国家が「共通な議会・政府・大統領をもたない共同体」として生まれかわることを提案している。その「共同体の国家主権は、内部政府の議会と機関によって統一される」という。さらに、それらのドイツ国家は「共通市場によって統一」され、そのためには「ベネルクス三国のように、政治的独立にほとんど影響することのない」ドイツの国々の間での「関税同盟」の組織を提案する。

ドイツを六分割することは確かにドイツが肥大し暴走することを抑制してくれる。しかし、最大の懸念はドイツに存在するルール鉱山の所有権の問題であり、ドイツが鉱山の所有権を有するかぎり、ドイツは戦争を行なうのに必要な石炭や鉄鋼をいつでも手に入れることができてしまうのである。

そこで、クーデンホーフはマーシャルやケナンが懸念している小さすぎるドイツと大きすぎるドイツというこれまでのヨーロッパが抱えてきた最大のジレンマをヨーロッパ連邦によって解決できるという自説をつぎのように披露している。

分割された六つのドイツ国家は「イギリス自治領がそれぞれ独立して国連に加盟しているのと同様に、ヨーロッパ連邦にそれぞれ独立して加盟する」というのだ。そして「ヨーロッパ連邦は、ルール鉱山の所有権を引き継ぐことで、分割問題を解決する。そして、占領軍にかわって、連邦警察軍をおくことで、占領問題を解決する。このように、ドイツをヨーロッパ国家の一員として向かえ入れる道はできているのである」と説明している。

分割された六つのドイツ国家がそれぞれ「ヨーロッパ連邦」に加盟することで、ドイツ領内のルール鉱山をヨーロッパ連邦が所有しても不合理は生じないという考え方である。

また、クーデンホーフが、「連邦警察」に代表されるように、ヨーロッパ統合の形態として加盟国の主権に優越する連邦政府の樹立を前提としたものを構想していた点は、すでに述べたとおりである。

一九四八年三月二二日にマーシャルがクーデンホーフに送った書簡には、ドイツ問題に関するマーシャルの見解が述べられている。

> 最近のロンドンでの西ドイツにかんする話し合いでは、「ドイツを含めた西ヨーロッパの経済の再建と、自由な人々の共同体としての民主的なドイツの傘下のための基礎作りの保証の必要性」という合意に達しました。同時に、最終的に統合された際のドイツのもっとも望ましい形はなんらかの連邦的な性格を持ったものであることが合意された。それは連邦は十分な権限をもつが、各州の権限も確保するというものだ。そうしたドイツはヨーロッパの共同体に入ることを認められ、ヨーロッパ復興に最大限の貢献を果たせるものと望まれる。
>
> あなたの送ってくれたドイツ・コモンウェルス提案は、私にドイツ問題の助言をくれる事務官たちに渡しておいた。かれらは吟味することでしょう。[60]

マーシャルはドイツを連邦化する構想を語っており、クーデンホーフの提案とはことなる。

しかし、連邦化されたドイツを「ヨーロッパの共同体」に組み込むことで、安全を確保し、同時にヨーロッパ復興に役立てようとする構想はクーデンホーフの六つのドイツ国家をそれぞれヨーロッパ連邦に加盟させることで、分割問題、鉱山問題を解決できるとした提言と近い。

クーデンホーフのこうした構想がマーシャルやケナンら「マーシャル・プラン」立案過程に深くたずさわったものたちにどの程度影響を与えたかを知ることはできない。しかしクーデンホーフが主張するように、ケナンが中心となって作成した進言書は、「特定の国籍の国民としてでなく、ヨーロッパ人としてものを考えることから出発するよう強く希望したのである[61]」という考えが次第に強くなってくることは事実である。ケナンらは、マーシャル・プランの適用に際して、ヨーロッパを統一させることが重要であるという認識を確実に持つようになったのだ。

しかし、ケナンらがヨーロッパの連邦化を構想するのは、クーデンホーフのようにヨーロッパの繁栄のためだけではなかった。

ケナンらがヨーロッパの統合を願う真意は、効率性という観点にあった。ケナンは各国に個別に援助を行なったときに生じると想定される問題を次のように説明している。

> アメリカは先を争う各国の要求のすべてを、次から次へともち込まれ応接のいとまもなくなるだろう。その要求はみな競合するがゆえに水増しされ、誇張されたものとなる。・・・そんなことになれば、多くの面で政治的には不評を買うに決まっている選択がわれわれアメリカ側に押しつけられ、ヨーロッパ各国政府は、自国の選挙民からとくに受けの良くない計画の問題点に対する非難をわれわれに転嫁してくるだろう。[62]

ケナンは、複数の窓口との交渉は複雑になり、不必要な援助まで支払わなくてはならなくなってしまうことになることを懸念している。各国との対応をそれぞれ個別に行なうよりは、まず、ヨーロッパ内で調整してもらってか

ら、アメリカと交渉をしてもらいたいという考えがケナンの深意なのであろう。

さらに、マーシャル・プランがヨーロッパ経済の復興と同時にアメリカ経済を助けるという重要な意味も併せ持っていた点も指摘しておかなくてはならない。この時期、アメリカが経済面で不安視していたのは、ヨーロッパのドル不足である。ヨーロッパ経済の衰退が、とくにドル不足というかたちであらわれる以上、アメリカの対ヨーロッパ輸出は減少し、アメリカ経済に多大なる影響を与えるのではないかとの懸念がアメリカ政界で広がっていた。マーシャルだけではなく、アチソン国務次官補やクレイトン次官などもその危機感を感じ取っていた。だからこそ、援助は最大限に効率的に行なわなければならなかったのである。

結論を先に明かせば、マーシャル・プランはヨーロッパのドル不足を解消し、アメリカ経済にプラス効果をもたらすこととなった。欧州各国の国際収支はマーシャルプラン実施中に赤字から脱却をしているのだ。そして輸入の多くをアメリカに頼っている。[63]

こうした背景からは、アメリカはヨーロッパの国内政治体制などを考慮することなく、アメリカの都合によってヨーロッパ諸国が「ひとつのテーブルに着き」統一することを要求しているように思われる。しかし、すべてアメリカの都合のためというわけではなく、ヨーロッパとしてまとまるほうが、ヨーロッパにとっても理想的形態であるという考えも同時に持ち合わせていたことも事実である。

ケナンはヨーロッパ全体の経済について、「長期的な欠陥のひとつは、その細分化の行き過ぎ、商業取引上の自由な競争性の欠如とくに大きな消費者市場が欠如していることだ[64]」と分析しており、経済市場を統合することがヨーロッパ全体の利益となると考えていた。

この考えは、マーシャル自身がクーデンホーフに宛てた書簡のなかで語っている。

親愛なるクーデンホーフ・カレルギー伯爵

あなたのヨーロッパの連邦化とドイツの統合についての興味深い提案について考えました。三月三日にワシントンでお会いしたときにあなたがおいていってくれたものです。

ヨーロッパの連邦化のための特定の運動やプログラムに我が政府が関与し、援助することはかないませんが、共通利益と安全保障のためにさらに一段と統合しようというヨーロッパの国々の努力にはシンパシーを感じます。一九四七年一一月一八日にシカゴで私が述べたように、「ヨーロッパはうまく機能すれば、地理的、歴史的にもともと共同体として機能するようにデザインされているのです。もし、人々が彼ら自身の自由意志によって運営できれば、かれらの性格のため、国民国家はヨーロッパ共同体が調和的で効果的に機能するように形作られている。歴史の論理は、彼ら自身の生存のためだけではなく、全世界の安定と繁栄と平和のための緊密な関係の共同体をつくることを示しているのです」。

ヨーロッパ復興計画は参加する国々の緊密な協力にその成功がかかっています。[65]

マーシャルプランがヨーロッパ諸国への金銭的な援助というだけでなく、ヨーロッパの統合を視野に入れた計画であることをマーシャル自身が語っているこの書簡はとても重要である。

マーシャルは、ヨーロッパの地理的、歴史的、文化的統一性に着目し「うまく運営すれば共同体として機能することができる」という見解を披露している。こうしたヨーロッパの統合にアメリカ政府首脳が意向を示していたことはケナンからクーデンホーフに宛てられた書簡に「ヨーロッパの諸国を緊密なる共同体にしようとするあらゆる意図にたいしてあたたかいシンパシーを持っています[66]」と述べられていることからも明らかである。

これまでの経緯をまとめれば、マーシャルやケナンらにとって、なによりも緊急を要するのは「西ドイツの経済情勢の改善と生産力の復興」であった。そして、ドイツを統合されたヨーロッパに組み込むことがヨーロッパの安全に繋がることであるという認識を持つようになったのである。

同時に、ケナンはヨーロッパ経済を復興させることは「西ヨーロッパに関するソビエトの誤算を証明するまたとない機会」だという。[67] そもそもマーシャルが援助計画を構想したのが、ヨーロッパ経済のじり貧がヨーロッパの共産化を招くという危機感からであった。つまり、最大の懸念であるように思われるドイツ問題もまたソ連への脅威から生まれた問題であったということだ。

ドイツ問題がソ連の脅威と密接に関係しているという懸念はクーデンホーフも抱いているものであった。

チャーチルに宛てた書簡の中では「数年のうちにドイツがすべてのポーランド人をシベリアかどこかへ連行し、その領土をロシアと同盟ドイツで分割するというロシアからの申し入れがあるだろうということを、考えなくてはなりません。そうなれば、ドイツとフランスの緊密な協力関係はドイツがロシアに結合することで妨げられてしまいます。そしてヨーロッパはロシア支配か核戦争かという悲劇的な選択を迫られることになります[68]」とのべ、ドイツ問題の解決が遅れれば、ドイツがロシア支配下におかれ、ソ連の脅威が増すという警告を発している。

言い換えれば、ドイツ問題はソ連への脅威に収斂していたということだ。

第三節　プラハ—冷戦の狭間—

コペーの古文書館に通い始めてからすでに一週間以上がすぎていた。もうジュネーブをはなれなくてはならない。

しかし、史料の収集はまだ十分ではない。

帰り際に「また、近いうちに来ることになると思います」と私は館長に伝えた。

館長は微笑むと、「なにか助けが必要だったら、いつでも連絡をするように」といった。

*

私は、成田プラハ間の往復の航空券を購入していた。だから、日本に帰るためには、プラハに立ち寄ることになる。

翌日、あらかじめインターネットで予約していたジュネーブ発の長距離バスでチェコ共和国の首都プラハへ向かった。そのバスの最終目的地はポーランドらしく、乗客のほとんどはポーランド人だった。観光客なのか、みな遊び疲れて言葉少なだった。

バスに揺られながら、私は再びクーデンホーフとチャーチルのことを考え

た。

クーデンホーフもチャーチルも、そしてアメリカ政府も欧州統合を望んでいた。かれらは、ソ連にたいする脅威を共有していたからだ。

私が、かつて東欧とよばれたチェコ共和国の首都プラハを訪れるのにはもちろん理由があった。

チェコは当初マーシャル・プランへの参加を表明していたにもかかわらず、ソ連邦政府の圧力によって参加を阻まれた経験をもつ。

ヨーロッパ大陸のちょうど中心に位置するチェコは、つねに西欧とソ連の狭間で揺れ続けた「反西欧としてのロシアが、他のどこよりも強く感じられる」場所だ。

チェコ人はソ連・ロシアとどのような気持ちで接し続けてきたのだろうか。それが知りたかった。

バスは早朝六時にプラハのフローレンツ駅に到着した。

朝から開いているカフェで数時間を過ごすと、街の中心にあるナーロドニー・ツジーダという交差点に隣接している建物のオフィスに向かった。

あやしげな、洞窟のようになった入り口をくぐり抜け、細い石造りの螺旋階段を三階分あがる。そして、インターホンをおす。

三重にかけられた鍵が開けられ、ドアが開く。

「ああ、君でしたか」

ピーター・ガイスラー氏は、チェコのジャーナリストだ。私はガイスラー氏からこれまでにも、幾度も社会主義時代のチェコの話を聞いていた。

ガイスラー氏は、一九六八年の民主化革命「プラハの春」が行なわれていたとき、チェコの最高学府カレル大学に在籍し、学生運動を目の前で見てきた。

一九八九年のビロード革命はジャーナリストとして取材した。さらに、一九九三年のチェコとスロバキアの分裂も取材した。

つまり、三つの革命を目の前で体験したのである。

しかし、いまではその話とはかけ離れた生活をおくっているようだ。

ガイスラー氏は、いつも退屈そうにオフィスに籠っている。大きなマグカップに白ワインを水道水で割って飲んでいること以外に、かれが具体的に何をしているのか私は知らない。

しかし、かれが自嘲気味にはなす昔話は、真実味がありとても興味深いものだった。

私は、ガイスラー氏にクーデンホーフについてどう思うか尋ねてみた。

「クーデンホーフですか。たしかに、日本人にとっては面白いテーマかもしれません。しかし、ぼくはあまり好きではないです。青山光子のことは、以前に何度か取材をしたことはありますが、まったく面白くないです」

かれが、クーデンホーフのようないわゆる"美談"を好まないことははじめからわかっていた。彼は歴史の闇に隠された、嘘っぽい話を好むのだ。

それで、私は日本で調べた時に得たかれが好みそうな話を切り出した。

「レーニンとの関係はどうですか？」

彼の目は生き返ったようになった。

「レーニン、ですか」

彼の目はさらに説明を求めていた。

「クーデンホーフとレーニンとの直接的な接点はありません。でも、クーデンホーフがパン・ヨーロッパ運動をはじめる時に、最初に資金を提供した人物が、レーニンにも革命資金を送っているんです」

ガイスラー氏は身を乗り出して質問をしてきた。

「それは、確かな話ですか」

「もちろんです。マックス・ワールブルグという人物で、いまでも大きな銀行がハンブルクにあります。クーデンホーフの自伝のなかに彼の名前が出てきます。ワールブルグがレーニンに革命資金を渡していたということは、ロシア革命の資金の流れを追った多くの研究ですでに明らかにされています」

「なるほど、面白いですね。ヨーロッパ統合運動とソ連とが関係していたということですか」

ガイスラー氏はすぐに私のいいたいことを理解してくれた。

「そうです。ヨーロッパとソ連。面白い繋がりがありそうではないですか。そこで、聞きたいのですが、ヨーロッパの人びとの社会主義、あるいはソ連への眼差しとはどんなものだったのでしょうか」

ガイスラー氏はどう答えようか迷っているようだった。

「ヨーロッパの人びとというと私も自信がありません。しかし、私たちスラブの人びとからすれば、ソ連が救世主となり、よりよい生活を自分たちに与えてくれると考えていたのはたしかでしょうね」

そう言って、一呼吸を置くと、埋もれていた記憶をたぐり寄せるようにゆっくりと話をつづけた。

私がはじめて政治的な話を聞いたときのことを教えましょう。

私の父の名前はイヴァンといいます。そうです、ロシアの名前です。かれの父親、つまり私の祖父がロシアびいきだったのです。祖父も父もずっと思っていました。ドイツでもなく、オーストリアでもなく、ロシアが救世主なのだとね。

人の思考というものは、コンピューターのようにすぐに変えることはできません。帝政ロシアで革命が起ろうが、祖父達にとって、ロシアはロシアでしかなかったのだと思います。そのロシアが社会主義がいいというのなら、それがいいのだろうと。それぐらいのことしか、考えていなかったのでしょう。

それからずっとあとになって、かれらははじめて気づいたのでしょう。ロシアが自分たちを救ってくれるというのは、淡い幻想に過ぎなかったということを。

確か、私が五歳のときでした。祖父が言ったんです。「こんなはずじゃなかった」とね。

かれは、五〇年かかったんです。幻想に気づくのに。

ガイスラー氏が五歳ということは、一九五〇年代後半ということだろうか。それから一五年ほどするといわゆる「プラハの春」という改革運動が起る。すくなくと、その時期までは、ガイスラー氏の祖父はソ連に対して反感を持ってはいなかったということになる。

「つまり、ヨーロッパの人びとがソ連にたいして魅力を感じていて、統合運動にもソ連の影響があったということは考えられるということですね」

「その通りです。ロシアというのは、ヨーロッパにとって、とくに私たちスラブの人びとにとって、とても大きな存在でした」

ガイスラー氏は昔話を思い出して、その余韻に浸っていた。

「政治の話はそれまでも聞いたことがあったかもしれない。でも、覚えているのはあのときが初めてです。いまでも、あのときのことはしっかりと覚えています。食卓の雰囲気、明かりの黄色い色。どういうわけか、はっきりと覚えているんですよ。あのときが、私のはじめての政治体験でした」

そういって、ガイスラー氏はわっはっはと笑った。

＊

ガイスラー氏のオフィスを出てから、プラハ市内を散歩した。

二週間ばかりのヨーロッパ滞在は終わりを向かえようとしてた。明日には日本に帰らなくてはならない。

季節はすでに秋で、時折ブルタバ河から吹く風は冷たかった。

もうすぐ帰るのだから我慢すればいいのだが、それにしても寒かった。なにか羽織るものが必要だと思い、ナ・プジーコピェ通りに向かった。旧市街と新市街を隔てるこの通りは、日本語に訳せば堀の上通りということになる。新市街が建設されるまでは、ここは旧市街を守る堀だったのだ。

街の人口が増加すると、街の範囲を広げるように堀を埋めて新市街を建設した。それでも人口が増えれば、さらに街の範囲を広げる。新市街の先にはヴィノ・フラディと呼ばれる住宅街が広がっている。「ヴィノ」とはワインのこと。「フラディ」とは丘を意味する。かつてワインのためのぶどう畑が広がっていた丘に住宅街を建設したのだ。

まるで大樹の年輪のように街は成長を続けている。

詩人ならば「大樹の街プラハ」とでもいうのだろうか。「大樹の街プラハ」とつぶやいているうちにナ・プジーコピェ通りにさしかかった。

ナ・プジーコピェは資本主義を象徴しているようだ。ラ・コステやベネトン、H&M、ZARAといったいわゆる西側の店がきらびかやな装飾をこらして連なっている。どの店も「セール」の張り紙を派手に強調して、通行人の購買意欲をかき立てようと必死だ。

私は、手頃な上着を求めてH&Mに入った。

上着を選びながら、ガイスラー氏が社会主義時代のプラハを「灰色の街」といっていたことを思い出していた。

ガイスラー氏はどこかまったく別の街のことをいっていたのではないかと思わせるほど、いまのプラハはカラフルな街になっている。べつにいまのプラハに不満があるわけではないが、「灰色の街」を一目でもいいから歩いてみたかったとすこし残念な気持ちがした。

黒のジャケットを買うとそれを羽織って街をもう少し歩いた。

歩きながら、もう一度これまでの経緯を振り返ってみた。

アメリカではマッカーシズムなどにみられるように、ソ連社会主義にたいして極端な反応をした。しかし、チェコではそのようなイデオロギーへの恐怖などというものはなかった。たとえロシア帝国がソヴィエト連邦と名を変えても、巨大な隣人であり、守ってくれるものであったのだ。

ガイスラー氏が述べた通り、近隣諸国にとってロシアはとても大きな存在なのだ。

だから、ソ連と国境を接しているヨーロッパがソ連との関係を一切断ち切って統合を進めることなど不可能なのだ。

クーデンホーフとチャーチルはこのようなソ連の脅威を共有したうえで協力関係を築いていたにもかかわらず、なぜふたりは対立しなければならなかったのだろうか。

ソ連の脅威に対抗するためには、クーデンホーフが目指す連邦制によって結束された強い欧州を建設するべきなのではないだろうか。にもかかわらずチャーチルがクーデンホーフと対立することになったのは、なぜだろうか。

ひとつだけ確かなのは、マーシャルプランとクーデンホーフの「セミ・オ

フィシャルな主体」が対立のきっかけになったことだ。

なぜなら、「セミ・オフィシャルな主体」の創設はこれまでの統合運動から一段階進むことになる。これまでは、いくら参加人数が多くとも、あくまで私的な運動に過ぎなかったのだ。それが、国益を担っている国会議員のみによって構成される主体となると、各国の意図の違いが明確にならざるを得ない。だからこそクーデンホーフはチャーチルと歩調を合わせなくてはならなかったが、ふたりの意図の違いも明確にならざるを得ない。

しかし、あいかわらずわからないのは、チャーチルの正確な意図だ。

これまで、チャーチルはクーデンホーフの構想に賛成し続けている。にもかかわらずかれらが対立するのはチャーチルがクーデンホーフと異なる構想を抱いていたからということになる。

だとすれば、対立の要因を探れば、チャーチルの真意が見えてくるのではないだろうか。

第三章　対立のはじまり

第一節　連邦制と連合制

コペーから帰国後の一年はあっという間に過ぎた。

一年という時間、私はクーデンホーフとチャーチルとつき合い続けた。常にクーデンホーフとチャーチルのことが頭から離れなかった。しかし、新たな史料を手に入れることができない日本でできることは限られていた。

史料を整理し、史実と照らし合わせながら、事実関係をひとつひとつ確認する。古文書館で入手したクーデンホーフとチャーチルの往復書簡を部屋中にひろげて整理する。時系列に並べてみたり、内容でグループにわけたりする。

そして様々な視点から読み返す。

毎日がその繰り返しだった。

そんな作業を繰り返しているうちに、思いがけずチャーチルの隠された意図が浮かび上がってきた。

チャーチルは、最初から連邦制には反対していたのかもしれない。欧州合衆国論者としてチューリッヒ演説などを行っていたにもかかわらず、かれは連邦制による統一には反対だったのだ。

チャーチルが連邦制による統合に反対するのは、イギリスの立場を考慮したものであるようだ。イギリスが大英帝国を捨てて欧州の統合に参加することはできない。だから、チャーチルはゆるやかな連合制による統合を構想していた。しかし、それでは強い欧州の建設は難しいものとなってしまう。

チャーチルの構想が次第に明らかになるにつれて、国家主権をどの程度制限するかという、連邦制と連合制をめぐる激しい議論の輪郭が私の中で描かれてきた。

クーデンホーフとチャーチルの激しい対立がはじまろうとしていることがわかった。

しかし、クーデンホーフとチャーチルの往復書簡だけでは決定的に情報量が不足していた。チャーチルの娘婿のダンカン・サンディスや、その他のイギリス人たちとの往復書簡が重要な役割を果たしているように思えたからだ。

チャーチルは自らの真意をひっそりとベールに包み、サンディスらを通じてその真意を実現しようとしているようだった。

二〇〇九年夏、私はふたたびジュネーブに赴いた。

*

古文書館も、館長も一年前と同じままだった。

城はピンクのままだし、館長は相変わらず短パンとTシャツ姿だった。肩にはセーターを羽織っている。

二〇〇八年の世界同時不況や、それにともなうEUの混乱などの事実を無視するかのように、レマン湖のほとりのちいさな町、コペーはゆったりとしたときの流れを維持していた。

「ひさしぶりですね」

館長はそういうと、昨年とまったく同じように閲覧室に私をみちびき、必要な史料を尋ねた。一年前にここに通った日々がまるで昨日ことのようだった。

「一九四七年の往復書簡を出してください」と私はいった。

館長に理由を尋ねられてもすぐに答えられる準備は整っていた。一九四七年はクーデンホーフとチャーチルの間に決定的な対立が生じた時期だ。

しかし、館長は理由を尋ねなかった。試験の合格も昨年のまま維持されているようだ。

「それでは、いちいち取り出すのも面倒ですから、三つほどあらかじめ出しておきます」

そういうと館長は、一九四七年からの三つぶんの箱を机の上に出してくれた。

「また、別の箱が必要なったら声をかけてください。隣の部屋にいますから」

「ありがとうございます」

そういいながら、はやる気持ちを抑えられない私はさっそく一九四七年の箱から書簡を取り出した。

書簡に目を通しながら、「やった」と思わず声を出してしまった。

思ったとおり、激しい対立の実態が記された書簡を見つけることができたのだ。

*

マーシャル・プランが発表されて間もない一九四七年六月二四日、チャーチルの娘婿ダンカン・サンディスは、クーデンホーフに手紙を送った。

> マーシャルの要求は、各政府がひとつのテーブルでヨーロッパの協力について話し合うことだ。このときに、非公式な機関が切りはなされた別々の状態で活動しているなんて実に滑稽だ。これらを一つに統合するなんらかの努力が必要だと思う。[69]

サンディスが手紙で述べているように、マーシャルは、欧州の各国個別に支援を行うのではなくて、欧州全体に対して支援を行うことを表明していた。そのためには、欧州諸国は「ひとつのテーブル」につき、ヨーロッパ全体の損失を算出し、どのような部門に、どのような支援が必要かを算出しなければならなかった。こうした状況は、欧州が一つにまとまる絶好の機会である。だから、サンディスは、「今こそこれらを一つに統合するなんらかの努力が必要だ」と主張した。

しかし、この「一つに統合するなんらかの努力」が両者の間の構想の相違をきわだたせることとなったのである。

一九四七年七月一九日にダンカン・サンディスへ送った手紙の下書きが遺されている。筆跡は乱れ、憤りが伝わる。

親愛なるダンカンへ

グスタードでの最高の話し合いの場で、君は、君の同僚たちと会うことのできる絶好の機会になるからとパリの会合に出席するべきだと勧めてくれたね。

君の招待に従った後、レオン・マッカスもパリに来るということを知ったのだが、私たちはどちらも君のグループと統合するということについていっさいの知らせを受けてはいない。・・・・日曜日のミーティングには出席することはできない。[70]

サンディスは、自分の同僚であるイギリスの国会議員たちに会わせたいといい、クーデンホーフをパリに呼び出そうとする。しかし、クーデンホーフは、それがあらかじめ準備された、クーデンホーフとチャーチルの二人の運動の統合協議の場であることを知るのである。だから、クーデンホーフは、サンディスに騙されたと感じ、怒りの手紙を送ったのだ。

クーデンホーフがつかんだ情報通り、七月二〇日に行なわれたパリでのランチ・ミーティングでは、チャーチルが組織し、ダンカンが運営を行なっている「統一ヨーロッパ運動」と、この年の九月に発足が予定されているクーデンホーフの「ヨーロッパ議員同盟」との統合について協議されることがすでに決まっていた。

クーデンホーフが組織する運動とチャーチルが組織する運動の両者の運動の統合交渉のイニシアチブをサンディスがとったということだ。

このとき、すでにクーデンホーフは一九四七年九月に発足予定の「セミ・オフィシャルな主体」である「ヨーロッパ議員同盟」の基盤を築いており、「ヨーロッパ議員同盟」がチャーチルの「統一ヨーロッパ運動」を吸収するかたちで統合することを考えていた。しかし、サンディスはあくまで「統一ヨーロッパ運動」を基盤に据えようとしていた。そして、サンディスの行動の素早さが、この争いの勝敗を決定的なものにした。

七月二二日にパリでの統合協議を欠席したクーデンホーフのもとにサンディスから手紙が届いた。

親愛なるリチャード

七月二〇日のランチに参加した人に送った手紙と同封物のコピーを同封します。君がいなかったのは残念だが、きみがわれわれが提案したことに同意したと、マッカスから聞いたので、嬉しい。

僕は、僕らの間で、誤解があることがとてもストレッスフルだ。きみは僕がどれだけ君のために働いてきたか分かっているだろう。マッカスが話してくれてすべての君の抱いている誤解が解かれることを望んでいる。

君が、グスタードに戻ったのかどうかわからないからパリのホテルにも送っておく。

追伸、もしマッカスの手が塞がっているようなら、君自身で合意書類に署名して、すぐに僕のところに送り返してくれたらうれしい。

きみと、イーデルにご多幸あれ。

きみの友、ダンカンより。[71]

イタリアの国会議員レオン・マッカスは、クーデンホーフが組織したばかりの「ヨーロッパ議員同盟」の議長をまかされている人物である。運動の統合交渉は、クーデンホーフのいないところで、すでに決着がついてしまったようだ。この手紙の主な目的は、その合意書に署名をたのむことだった。

さらに追い打ちをかけるようにして、一九四七年八月五日、チャーチルから手紙が届いた。

それは、「ヨーロッパ議員同盟」の名誉議長を依頼した七月二一日の手紙に対する回答だった。

七月一九日にサンディスに出し抜かれたことを知ったにもかかわらず、二一日にチャーチルに手紙を出しているのは、クーデンホーフがサンディスの行為をかれの独断で行なったものだと考えたかったからだろう。

一九四七年八月八日にヨーロッパ議員同盟への参加を呼び掛けるためにノルウェーの下院議長宛につぎのように記している。

ミスターG．スミス

ノルウェー下院議長へ

昨年、光栄にもサン・モリッツで会談をさせていただき、あなたがヨーロッパ連邦の理念に同意してくれていることをしりました。

このアイディアはチャーチルのイニシアチブとマーシャル・プランとヨーロッパ復興のパリ会談によってすばらしい前進をとげました。・・・第一回ヨーロッパ議会と呼べるものを準備しています。グスタードで九月八、九、一〇日に行なう予定です。ヨーロッパの民主的な議会のほとんどすべてから代表者が出席します。[72]

クーデンホーフは、ヨーロッパ連邦創設の理念が「チャーチルのイニシアチブ・・・によって素晴しい前進をとげました」といい、チャーチルがクーデンホーフ自身の運動の協力者であるという認識を主張し続けている。

もちろん、クーデンホーフがノルウェー議会からの支持を得るために事実を意図的に歪曲してチャーチルの影響力を利用しようとしたと考えることもできる。

しかし、クーデンホーフは、チャーチルに「ヨーロッパ議員同盟」の名誉議長就任を依頼している。

クーデンホーフはチャーチルとサンディスが通じていると認識することとなったにもかかわらず、チャーチルが自分に対し、かつて約束したように「公正に振る舞う」ことを信じたかったのかもしれない。

ヨーロッパ議員同盟は、クーデンホーフがヨーロッパ中の国会議員に送った「ヨーロッパ連邦に賛成か？」というアンケートが基盤となっていた。前述した通り、このアンケートに「イエス」と答えたもののリストをもとにしてヨーロッパの統合運動は推進されていたし、ヨーロッパ議員同盟はその中核であった。クーデンホーフはチャーチルに名誉議長を依頼する際に、当然のこととしてこのアンケートを同封していた。

しかし、クーデンホーフの驚くことに、チャーチルはまずこのアンケートに回答することを断ってくる。

親愛なるクーデンホーフ＝カレルギーへ

ヨーロッパ連邦にかんするアンケートを同封してくれた、七月二一日の手紙をありがとう。

しかし、私自身は、一般的慣行からいって、アンケートにサインはしません。なぜなら、私は「連邦」をにおわせるようなはっきりとした形をもった組織体にコミットしたことはないからです。

しかしながら、一般的なヨーロッパ統一理念にたいする私の温かいサポートはすでにご承知でしょう。

ヨーロッパ議員同盟の名誉議長にムッシュー・ブルム[73]とともに就任するようにとのお誘いに感謝します。シンパシーを強く感じます。しかしながら、正式な返答をする前に、本当に代表者が集まるのか、とくにイギリスとフランス議会から十分な人数の代表団が来るのかを確認しておきたい。イギリス議員グループの議長ゴードン・ラングから得られる情報では、安心できる状態では全くないということですが、このことに関して情報をいただけないでしょうか。[74]

これは、チャーチルがはじめて自らの態度を明らかにした貴重な手紙である。

そして、第一節で引用した一九四三年の演説以来、公の場ではいかなるときも、文明論以上のことはのべてこなかったチャーチルがはじめて、「『連邦』をにおわせるようなはっきりとした形をもった組織体にコミットしたことはありません」と述べ、連邦化に対しては、賛成しかねるという態度を明らかにしたのだ。

「チューリッヒ演説」での経緯をみれば、確かに明言こそしていないものの、クーデンホーフの意図していた欧州大陸の連邦化に反対するということはなかった。

そして、仏独和解による大陸の連邦化を暗黙の前提として、クーデンホーフと「チューリッヒ演説」以来一年以上にわたって協調してきた。しかし、突然連邦化反対の姿勢を明らかにしたのだ。この表明は暗黙の大前提を一瞬にしてひっくり返してしまった。

これまでの経緯を振り返れば、クーデンホーフは大陸欧州の連邦化を前提としたパン・ヨーロッパ運動を行なっており、チューリッヒ演説をきっかけとして、チャーチルと協力関係を築くようになった。そして、チャーチルはクーデンホーフの協力を得ながら、自らの運動主体である「統一欧州運動」を設立した。しかし、このふたつの運動の統合がもちあがると、チャーチルは「連邦化」に賛成した覚えはないとして、クーデンホーフの構想に反対した。

チャーチルはクーデンホーフに近づき、クーデンホーフの運動の基盤である人脈リストを利用した。そして、いつの間にか、両者の運動の統合という名目によって、自らの統一欧州運動に塗り替えようとしたのだ。

にもかかわらず、「ヨーロッパ統一理念に対する私のあたたかいサポート」を強調し、クーデンホーフの前提としている統合理念に理解を示している。そして、クーデンホーフの組織する連邦化を前提とした「ヨーロッパ議員同盟」の名誉議長を引き受ける余地も残している。

では、チャーチルはいったいなにを考えていたのだろうか。

第二節　ハーグ会議

一九四七年九月一日。

チャーチルは「君のあたたかい私への名誉議長の推薦について、正式な主

体が構成されるまでは、差し控えたい[75]」といい、「ヨーロッパ議員同盟」の名誉議長の職を正式に辞退した。

しかし、その組織の動きには注目をしていた。ヨーロッパ議員同盟の第一回会議である「グスタード会議」が開催された後、チャーチルはクーデンホーフに書簡を送った。

> グスタードでの議会会議の審議に強い関心をもつ。
> 労働党議員たちが理念の実現の可能性を高め、それと同時に統一ヨーロッパの早急な必要性をもたらした。これだけでも、この歴史ある一流の大陸に生きる勇敢な人びとの平和で繁栄し自由な生存への確かな望みをもたらした。[76]

この書簡で、チャーチルはとくに「労働党議員たち」に注目をしている。イギリスの政権をになう労働党は、一九四八年一月、ベヴィン外相のイニシアチブによって「西欧同盟」を発足させている。このことからもわかるように、イギリス労働党は決して欧州の統合に反対しているわけではなかった。軍事、経済、社会のそれぞれの側面で西欧諸国の緊密な協力を目指すこの同盟は、欧州統合の足がかりとなる政策であった。

しかし、労働党は、敵対政党である保守党のチャーチルが「統一ヨーロッパ運動」を組織、欧州統合を推進しているという国内の政局のため、国内ではヨーロッパの統合にたいして懐疑的な姿勢を崩さなかった。与党と野党の対立という単純な構造に加え、「統一ヨーロッパ運動」のような国家責任を持たない、非公式な組織をつくるというチャーチルのスタンドプレーも労働党がチャーチルの統合運動に懐疑的になる理由であった。

にもかかわらず、チャーチルよりも急進的な連邦化を掲げる「ヨーロッパ議員同盟」でイギリス労働党議員が活躍していることをチャーチルは皮肉交じりに賞賛したのだろう。イギリス国内の政党の利害がおよばない「ヨーロッパ議員同盟」にはRGWマッケイをはじめとする多くのイギリス労働党議員が参加していた。

チャーチルにとって「ヨーロッパ議員同盟」とはなによりもイギリス労働党議員の参加と支持を得ている組織という意味を持っていた。チャーチルはヨーロッパ議員同盟の会議の結果などよりも、労働党議員が活動しているということが重要であり、気にかかることであった。

イギリス国内で労働党とチャーチルの対立の兆しが表面化してきたのは一九四八年の初頭だった。イギリスの新聞でチャーチルの「統一ヨーロッパ運動」と与党労働党の対立が報じられるようになったのだ。

この時期、チャーチルは「ハーグ会議」の準備を進めており、イギリス国内での労働党の反対は大きな痛手であった。

新聞で労働党との対立を知ったクーデンホーフはチャーチルに書簡を送った。

> 昨日の新聞で、労働党と統一ヨーロッパの対立について記事を見ました。労働党は、労働党抜きではヨーロッパの統合は実現できないということがわかっているにもかかわらず、対立してしまうことを遺憾に思います。
> 労働党は、パン・ヨーロッパ運動を最初の頃から支えてくれていました。だから、あなたが労働党とうまくやっていけていないことにとても残念に思います。
> ハーグ会議に招待していただけなかったので、私が橋渡しをすることも

できませんでした。

しかし、あなたはいつでも私にフェアな態度でせっしてくれました。このボイコットが私とは全く関係のないことを表明しておきます。[77]

チャーチルはクーデンホーフをハーグ会議に招待せず、両者の対立は深まるばかりであった。

五月七日から一〇日にかけて、チャーチルは「統一ヨーロッパ運動」を基盤にした「ハーグ会議」を開催する。この会議には八〇〇名を越えるヨーロッパ政界の重鎮たちが出席した。その中には、数名の元首相、二九名の元外相、さらには現役閣僚も顔を揃えていた。また、シューマンやミッテランなどまで参加していた。

ハーグ会議の開催にさいして、チャーチルは、クーデンホーフの功績を無視するかのような振る舞いをした。ヨーロッパ中の統合論者を集めたこの会議に、チャーチルとサンディスはあえてクーデンホーフを招待しなかったのだ。

ハーグ会議の開催を事前に知ったクーデンホーフはサンディスに怒りの書簡を送った。

ハーグ会議に関してだれも私になにも知らせようと思わなかったということに、私がどれほど驚いているか理解しなくてはならない。

最近、君に送った手紙の中で私たちの組織の協力体制を終結する理由を説明した。私たちの議会では、その精神に従いハーグ会議の成功のために労働党と統一ヨーロッパの対立を克服するためにあらゆる手を尽くした。私たちの議会はヨーロッパ連邦のために働く社会主義とそうでないグループのちょうど中立した絶妙な立場にいる。この立場が、他の全ての非議会組織から独立した立場を保証してくれているのだ。

これが、私がハーグ会議に出席すると今すぐに答えを出せない理由なのだ。[78]

ハーグ会議に招かれなかったクーデンホーフは、逆に「ヨーロッパ議員同盟」の議員たちに、ハーグ会議を欠席させることで、ハーグ会議の参加者を減らす抵抗を試みた。この対立の詳しい経緯はあとで考察するが、クーデンホーフのこの企ては失敗に終わる。クーデンホーフの必死の抵抗にもかかわらず、先に述べた通りハーグ会議は八〇〇名以上の参加者を集めることに成功するのだ。

ハーグ会議からしばらくして、クーデンホーフはチャーチルに書簡を送った。

書簡は「私たちのキャンペーンに決定的な前進をもたらす、あなたの個人的な勝利にお祝い申し上げます」と好意的に書き出された。

しかし、「個人的な勝利」とは、チャーチルのスタンドプレーに対する精一杯の皮肉であった。

「あなたがお世辞を言われるよりも率直な批判が好きだということを分かっているので、あなたのオープニングスピーチに関して、歴史を学ぶものとして、二点の批判的な評価をさせてください」と書簡は続けられる。そして、チャーチルの演説に関する批判が始まる。一点目に挙げているのは、ヨーロッパ統合を最初に志したものは誰かという歴史的事実の誤認を指摘するものであった。

「第二点目は、ハーグ会議が正式には六番目のヨーロッパの会議であり、最初ではないということを協調しておきたいです」といい、一九二三年から

五回にわたって開催されているパン・ヨーロッパ会議の詳細を述べた。パン・ヨーロッパ会議は、クーデンホーフが主催した国際会議で、書簡で説明されている通り、フランスのブリアン首相、オーストリアのイグナーツ・ザイペル首相、チェコスロバキアのベネシュ大統領など、当時の権力者たちが参加した会議であった。

クーデンホーフは、これらの五回におよぶ会議の詳細を書いた。そして「あなたが、『ヨーロッパで最初の会議』と呼ぶことは、ブランタジネットのエドワード王を思い起こさせます。かれは自分のことをエドワード一世と称していたのです。アングロサクソンの王家は前の人の名前を継承しているという事実を無視してまで。ハーグ会議がパン・ヨーロッパ運動を無視する理由があるとは思えません。これはパン・ヨーロッパ運動にたいして卑怯な行為です」[79]と書簡を結んだ。

クーデンホーフは「卑劣な行為」とまでいうほどに、チャーチルのハーグ演説に怒った。

チャーチルが、ハーグ会議を「ヨーロッパで最初の会議」と称し、クーデンホーフの存在を歴史から消し去り、みずからが欧州統合運動の生みの親であることを主張したことは、あきらかに「公平な振る舞い」ではなかった。

ではなぜ、チャーチルは、クーデンホーフが邪魔になったのだろうか。ハーグ会議を主催し、八〇〇名のヨーロッパ政界の重鎮をそろえるまでの指導的役割をつかみ取るチャーチルが、クーデンホーフを排除しなければならなかったのは何故なのだろうか。それも、あからさまな対立は避け、水面下でクーデンホーフの「ヨーロッパ議員同盟」を統合するという手段を用いたのはなぜなのだろうか。

クーデンホーフとチャーチルおよびサンディスとの対立は周囲のものが気にかけるほどだった。イギリス保守党の重鎮レオ・アメリーは「君とダンカンとの対立にとても不安を感じている。そしてハーグに君が招待されず、スピーチできるのかどうかということも不安だ[80]」とクーデンホーフに書いている。

アメリーとクーデンホーフの交友は古く、多くの書簡をやりとりしている。アメリーはクーデンホーフに息子のジュリアンも紹介し、家族ぐるみでつき合っていた。[81] ジュリアンも国会議員となり、父の死後もクーデンホーフと書簡を送りあった。

かれは、クーデンホーフと頻繁に長文の文通を行ない、かれの行動をあたたかく見守るように、励ましと、冷静な判断の示唆をあたえている。

深い信頼関係を築いていただけに、クーデンホーフもかれの助言を聞き入れることが多かった。政治的な利害関係を越え、アメリーから友人としてクーデンホーフに送られる手紙は、信憑性がたかく、重要である。

アメリーも懸念するような激しい対立の最中で、クーデンホーフは、「ハーグ会議」開催を妨害するように労働党にはたらきかけているのではないかという疑念をきっぱりと否定したのである。

いいかえれば、チャーチルがクーデンホーフを疑うほど「ヨーロッパ議員同盟」とイギリス労働党は密接な関係にあったということだ。

その親密さを裏付けるように、先に引用した一九四八年三月一五日のハーグ会議に招待されないことに怒ったクーデンホーフの手紙には続きがある。

> イギリスの労働党は、政府レベルでパン・ヨーロッパ・イニシアチブをとっているので、私たちはイギリス政府と対立するような行動を取りはしないのだ。だから、私たちの最終的な態度は、労働党の協力のほどにかかっ

ている。

私たちのイギリス議会グループ議長でヨーロッパ議員同盟の副議長であるマッケイは調停者として最良の立場にあります。そして、社会主義者と非社会主義者との間で行なったような交渉の焼き直しとなることは望んではいません。私は、かれにこれからは全ての時間を交渉に力を注ぎ、成功するであろうことを望みます。

シンボルが私たちの協力の最初の第一歩となるでしょう。そこで、私は二五年間にわたって使用され、最近ヨーロッパ議員同盟のシンボルとして採用されたものをヨーロッパ合衆国のシンボルとすることを提案します。

この手紙でクーデンホーフは「イギリスの労働党は、政府レベルでパン・ヨーロッパ・イニシアチブをとっている」とのべ、労働党との関係の深さを強調している。

重要なのは、クーデンホーフは、ハーグ会議に招待されなかったことに怒りつつ、労働党との繋がりをもっているという自らの利点をいかして、チャーチルにたいして有利な立場から協力関係を築くことを申し出ていることである。サンディスからの統合の申し出に対して怒り、敵対しているにもかかわらず、チャーチルとの協力関係を築こうとしているのである。

では、なぜクーデンホーフはチャーチルと協力関係を築かなくてはならなかったのだろうか。

そもそも、なぜ急進的な欧州の統合には反対だった労働党がクーデンホーフの「ヨーロッパ議員同盟」と協力的な関係を築いたのだろうか。

ハーグ会議直前の一九四八年五月五日下院議会で、欧州統合派でありチャーチルが党首を務める保守党の議員から、ヨーロッパ政策の消極性を追求されたアトリー首相は「実行可能な問題を実行可能な方法であつかい、経済分野・社会分野・防衛分野で我々の計画を働きかけること」が正しい統合への道筋だと述べ反論している。[82]

アトリー首相のこの発言は現状を直視した的確なものである。

クーデンホーフに、手続き上の問題を指摘し、「ヨーロッパ議員同盟」が理念ばかり先行して、組織としての実体を保てていないことを非難したチャーチルであるが、逆にイギリス国内では、アトリー首相から理念ばかりが先行し「実行可能」ではないと判断されてしまったのだ。

そのような労働党の批判にもかかわらず、チャーチルが急進的に活動を推進していくのは、独仏和解によってヨーロッパ大陸を強化しなくてはならないという危機感があったからだ。クーデンホーフがこの点を強く意識していたことは第二章で述べた通りであるが、チャーチルもまた、同様であった。

一九五〇年三月一六日の下院議会で、共産主義勢力と大西洋同盟勢力が対立する境界線において、「この長い最前線は、西ドイツの積極的な援助なしには実効的に防衛することは不可能である」[83]と述べた。さらに「私は躊躇することなく言いたい。責任ある政治指導者の思考からドイツの貢献というものが除外されている限りは、実効的な欧州の最前線の防衛を維持することは不可能なのである」[83]と述べ、チャーチルは労働党政権がこの問題を避けていることを非難した。

しかし、このような批判にもかかわらず労働党は、チャーチルの「統一ヨーロッパ運動」を実現不可能であると否定するだけで、労働党としてのドイツの扱いとヨーロッパ統合にたいする態度を明確にすることはなかった。

唯一の態度表明と考えられるのが「政府レベルでパン・ヨーロッパ・イニシアチブをとっている」とクーデンホーフが書簡で説明するように、労働党

は「ヨーロッパ議員同盟」と協力関係を築いていたということである。

もちろん、この表現はクーデンホーフが自らの立場を有利なものとするために誇張しているとも考えられる。労働党がほんとうにパン・ヨーロッパ理念を支持していたかはわからないのだ。ただ、マッケイら労働党議員が「ヨーロッパ議員同盟」に参加していたということは重要である。

しかし、労働党が「ヨーロッパ議員同盟」と協力関係を持ち続ける理由については、クーデンホーフも一度も語っておらず、労働党の目的は分からなかったようである。

クーデンホーフは、労働党に正面から批判されているチャーチルにたいしては、有利な立場にあったが、労働党の真意を知らないという点においては、チャーチルと変わりはなかった。そこで、クーデンホーフは、チャーチルにたいして有利な立場から協力関係を築こうとした。

ハーグ会議に招待されないことを知るまえであるが、クーデンホーフは「ヨーロッパ議員同盟」が採用したシンボルをチャーチルの「統一ヨーロッパ運動」にも採用するように提案している。

先週、ヨーロッパ議員同盟の議員総会がグスタードで行なわれた第一回定例会議のさいに行なわれました。そこでの結果をお送りいたします。最も重要な決定は、一九四八年九月八日にインターラケンでヨーロッパ合衆国の憲法に関する議会を開催することを決定したことです。

ほかには、委員会の決定事項として、ヨーロッパ合衆国のシンボルと旗を採用しました。

素晴しいものとなるでしょう。ヨーロッパ合衆国にかんするすべての運動は、四半世紀にわたって使用されてきたこのシンボルと旗を採用するべきです。この共通のシンボルは、ほかの何にもまして、われわれの運動を鼓舞する共通のスピリットを指し示してくれます。

だから、統一ヨーロッパ運動がこのシンボルを採用してくれれば、とても嬉しいのです。黄金の太陽とその上に描かれた赤十字は、グリーク・スピリットとクリスチャン・ラブというわれわれの文明の二つの基本的な要素を表しています。

マーシャル・プランと議会活動との調整のために、一月一日に妻とともにニューヨークへ発ちます。

あなたとあなたの家族に幸運がありますように。

メリー・クリスマス、そしてハッピー・ニューイヤー[84]

クーデンホーフは、これまでに述べてきたようにサンディスの主導による両者の運動の統合に強く抵抗していたが、一方で、分散する運動組織をまとめる必要も感じていたのだろう。

クーデンホーフが手紙に書いている「ヨーロッパ議員同盟の議員総会」について「このヨーロッパ議員総会の経過は荒れていた。多くの議員が留保条件をいろいろと出したからである[85]」と自伝のなかで振り返るように、各国の国会議員たちが集う会議では、これまで以上に具体的な話し合いがなされるために、本質的なことを述べられなくなり留保条件が多く出されることとなったのだ。

残念ながら、グスタードでの会議の議事録は手元にないが、イギリス労働党議員がおおくの留保条件を出していたとしても不思議ではない。

そうした状況のなかで、クーデンホーフは自身の運動に参加している労働

党がクーデンホーフの望む連邦化による欧州の統合を本当に支持しているのか疑念を抱くようになっていたのではないだろうか。

労働党の不可解な行動の真意を探るためにも、サンディスの敷いたレールに乗らずにチャーチルの「統一ヨーロッパ運動」との連携の必要性を感じたのかもしれない。

前述したとおり、対立軸をあいまいなままにしたサンディスの企てが、統合運動を複雑なものにし、労働党の不可解な行動を生む要因となっているからだ。

不可解な労働党の言動に翻弄されていたのはクーデンホーフだけではない。国内で、与党労働党と対立し、さらにはヨーロッパ統合運動内部でも大陸ヨーロッパで主流を占めるクーデンホーフと対立し孤立状態に立たされたと感じたサンディスはその苦悩をクーデンホーフに伝えている。

親愛なるリチャード、

ウィンストンが二月一六日の手紙ありがとうと言っている。ハーグ会議について労働党ともめていることについて言及してくれた手紙だ。労働党にはやっかいな党派がある。内閣の内でも外でも労働党首脳の決断は道義的に間違っているし、戦術的にも馬鹿げている。・・・少しずつ状況が変化してこの反対姿勢を変えることを望んでいる。

君の手紙を読んで、統一ヨーロッパ運動と君が協力し合えないということを知って、とても残念だ。はじめて会ったときからずっと頑張ってきたじゃないか。[86]

しかし、このような逆境にもかかわらず、一九四八年五月七日から一〇日の「ハーグ会議」で、労働党と対立するチャーチルは、以前にもまして大きな前進をみせた。

あくまで政府間協力の枠組みで欧州統合を構想する労働党に対して、八〇〇名におよぶヨーロッパ政界の重鎮が集結したハーグ会議の決議では、国家主権についてその一部をヨーロッパへ委譲することを明記したのだ。それはクーデンホーフがいうように、チャーチルの「個人的な勝利」であった。

決議には、国家主権について、「ヨーロッパの国々は、統合と共通の資源の正当な開発と共通の政治経済活動をおこなうために、その主権の一部を委譲し統合するべき時期が到来したことを宣言する[87]」と明記された。

このチャーチルの言動は整合性を欠いたものである。なぜなら、第一章でのべたようにかれは、連邦化には反対であったはずだからだ。[88]

そして、それこそが「ヨーロッパ議員同盟」の名誉議長を引き受けない当初の理由であったはずである。もちろん、連邦化に対して反対したのは、たった一度だけであり、以降は曖昧な態度をとっていたが、ハーグ会議でのこの決議は、むしろクーデンホーフの想定してた連邦化構想により近づく結果となっているのだ。

では、チャーチルの意図はなんなのだろうか。

このとき、ハーグ会議の出した決議そのものが政治家チャーチルの抱くヨーロッパ統合構想と結びつかないという可能性を考えておかなくてはならない。ハーグ会議の基盤であるチャーチルの「統一ヨーロッパ運動」は、現役を引退した政治家たちが多く含まれており、国家への責任のない一般私人なのであったということは考慮すべき事実なのだ。

ハーグ会議では、「ヨーロッパ議会」を設立することが明記されたが、その議会の参加者が国家への責任のない一般私人である以上、非政府的な知識

人の集まりであり、諮問的機関としての役割を与えられたに過ぎなかった。
この点は、労働党議員で当時の外相であったベヴィンが指摘している。[89]
さらにチャーチル自身もあくまで市民的な行為であり、責任ある政府の決議とは異なるということをアトリー首相に伝えている。[90]
対照的に、クーデンホーフの「ヨーロッパ議員同盟」の存在意義は、その名の通り、国会議員のみによって構成されているという点である。
それはクーデンホーフがいうように「セミ・オフィシャルな主体」としての意味を持ち、各国議員がそれぞれの政府に提案を持ち帰ることで、理念の実現の可能性を大きく高めるのだ。
どの国の政党にも属さないクーデンホーフは、国内の政局に左右されずに、各政党の議員を集めることができたし、交渉も柔軟に行なった。
イギリスの労働党と有効な関係を築くことができないチャーチルとは、この点において対照的であった。
そして、労働党がクーデンホーフのヨーロッパ議員同盟にいくらかの国会議員を送り込んだのは、多くの現職を退いた元国会議員によって構成される統一ヨーロッパ運動よりもいくらかは実現性があると判断したからであろう。
こうしてみると、「ヨーロッパ議員同盟」「統一ヨーロッパ運動」そしてイギリス労働党という三者の関係は極めて複雑である。

*

私は、書簡をめくる手を止めて、これまでの経緯を整理してみた。
チャーチルのアトリー首相への説明どおり「ハーグ会議」での発言はあくまで私人としてのものに過ぎず、チャーチルの真意が連邦化に否定的であるという立場を考慮に入れれば、労働党の議員はチャーチルの「統一ヨーロッパ運動」に参加するほうが妥当な選択だろう。しかし、労働党の議員が連邦化をかかげる「ヨーロッパ議員同盟」に参加をするというねじれ現象が起こっているのである。
このねじれ現象の要因は、連邦制度に賛成していないにもかかわらず「ヨーロッパ議員同盟」に参加する労働党の不可解な振る舞いだ。くわえて、チャーチルがハーグ会議で突然急進的な欧州の連邦化をかかげたことも事態をより複雑なものとしている。
この複雑な対立構造をどのように説明すればいいのだろうか。
私は、スイスに旅立つ直前に、日本で行ったあるインタビューのことを思い返してみた。
インターネットで「クーデンホーフ」について検索していると、ミヒャエル・クーデンホーフ＝カレルギーという画家の作品を見つけた。気になって調べてみると、ミヒャエル氏は私の調べているクーデンホーフの甥だった。
さらに詳しく人づてに調べると、ミヒャエル氏は現在、日本人と結婚して神奈川の茅ヶ崎に住んでいることがわかった。私は、さっそくインタビューを申し込んだのだ。
六月一六日、私は横浜駅のそごうで買った、霧笛楼のチョコレート・ケーキをもって、指定された時間に茅ヶ崎駅のロータリーにたっていた。しばらくすると、黄色のちいさな軽自動車に乗ってミヒャエル夫妻が迎えにきてくれた。後部座席に乗り込むと、ミヒャエル氏は、片言の日本語で「コンニチハ」と言った。客人である私に気を使いつつも一生懸命前方に注意しながら、海辺の住宅街の入り組んだ細い道を進んでいった。
「日本語を話すのですか」と尋ねると恥ずかしそうに少しだけと答えた。

「普段はドイツ語です。あとチェコ語と英語を話します」
プラハに留学していた私は、うれしくなってチェコ語で挨拶をしてみた。すると、ミヒャエル氏もうれしそうに「チェコ語を話すのですね」とチェコ語で答えてくれた。
茅ヶ崎駅から一〇分ほどのところにある一軒家がかれらの住まいだった。リビングでコーヒーを出してもらい、さっそくインタビューに答えてもらった。ドイツ語はわからないので、チェコ語で行うことにした。
ミヒャエル氏は、叔父であるクーデンホーフと幾度かあったことがあった。そして、政治から家族のことまでいろいろと話をした。クーデンホーフは穏やかな人柄で話しやすかったという。
「クーデンホーフのパン・ヨーロッパ運動についてなにかご存知ですか」と私は尋ねた。
「ええ、もちろんです。いろいろなことを話しましたから」
「では、かれが多くの有名な政治家たちと親交があったこともご存知ですか」
「もちろんです。ド・ゴールやアデナウアーなどいろいろな欧州を代表する政治家たちの話をしていました」
私は、一番知りたかったことを尋ねた。
「チャーチルはどうですか」
「チャーチルですか?ええ、そうですね。親交があったようですね」
「チャーチルについて、なにを話していましたか」
「かれは、大酒飲みだったそうです。一緒に酒を飲んだことがあるといっていました。愉快な人だったようです」
「それだけですか」
「チャーチルについての話は、そこまで多くはありませんでした」
「そうですか。実は、クーデンホーフとチャーチルとの間には、確執のようなものがあったようなのです」
「え、チャーチルとですか」
ミヒャエル氏は意外そうな顔をした
「そうです」と私は答えた。
「ド・ゴールとは意見が対立したという話を聞いたことはありますが、チャーチルについては、そんなことがあったなど知りませんでした。どのような対立があったのですか」
「私も詳しいことはまだわかりません。ただ、ジュネーブにクーデンホーフの私文書が保管されており、そこにチャーチルとの往復書簡が大量に遺されています。それを読むかぎりでは、ふたりの間に何らかの確執があったようなのです。私も、詳しいことはまだわからないので、もしも、あなたがクーデンホーフからなにか聞いていればと思ったのです」
「チャーチルとの書簡がジュネーブにあるのですか。」
「ええ、そうです。たくさん」
ミヒャエル氏はますます意外だというような顔をした。
「そこまで、チャーチルと深い交流があったとは知りませんでした」

*

もしも、クーデンホーフがチャーチルとの対立について語っているとすれば、往復書簡を読むさいに、とても助かることになると思っていた。その期待は見事にうらぎられてしまった。

いま、直面している労働党を巻き込んだ複雑な対立の構造も往復書簡から読み解くしか方法はないということだ。

ミヒャエル氏とのインタビューでわかったのは、クーデンホーフは、チャーチルとの対立について周囲のものにあまり饒舌に語っていなかったようだ。政治家たちとの交流を多く語ってくれたとミヒャエル氏は言っていたが、チャーチルとの交流については酒を飲んだこと以外には語っていなかったようだ。

私は、ふーっと大きなため息をついて頭のなかをもう一度整理した。

メモ用紙を取り出して、大きく三角形を描いた。それぞれの頂点にクーデンホーフ、チャーチル、労働党と記してみた。

クーデンホーフの構想は明快だ。連邦制による統合だ。

チャーチルは「統一ヨーロッパ運動」という基盤を自らつくり、欧州統合運動にコミットしようとした。だからかれは、「ヨーロッパ議員同盟」に参加している労働党の連邦主義の議員たちを自らの運動に取り入れたかった。そうすることで、イギリスが一致団結してヨーロッパ統合に力を注げると考えていたのだろう。そのためには、クーデンホーフの功績をなきものにし、自らが欧州統合運動の主流として君臨しなければならなかった。

問題は労働党である。労働党は連邦化に反対である。しかし、「ヨーロッパ議員同盟」との関係を築いた。

なぜ、労働党はクーデンホーフの「ヨーロッパ議員同盟」と深い関係を築いたのだろうか。「ヨーロッパ議員同盟」との関係を築くことによって労働党が得をすることがあるのだろうか。

労働党はクーデンホーフのつくった「ヨーロッパ議員同盟」という基盤を利用し、政策を実現しようと試みていたのかもしれない、という考えが浮かんできた。

もし、この仮説が正しいとすれば、それは相手に間者を送り込み内部から支配するという「トロイの木馬」さながらの行為だ。

クーデンホーフとチャーチルの書簡のなかでは、両者とも労働党の意図をこの時まだ、正確には理解できずにいる。かれらも、私と同じように労働党の動きに翻弄されているのだ。

では、つぎに考察するべきは、労働党の意図ということになる。

特に、「イギリス労働党」という印字の入った書簡には細心の注意を払いながら、私は書簡をめくった。

第三節　イギリス労働党の働き

チャーチルが労働党政権との溝を深めるのとは対照的に、クーデンホーフは労働党国際局長デニス・ヘアリーと親交を築いていた。

チャーチルと労働党の対立が表面化したまさにその時期である、一九四七年八月にクーデンホーフはヘアリーに書簡をしたためた。

ヘアリーへ

ロンドンでのあなたとの会合は楽しかったです。

ヨーロッパ議員同盟の組織は、ヨーロッパの議会会議を開催できるほどまでに進展しました。あなたに出席していただけるように、プログラムと招待状をお送りします。そしてゲストとして会議の間はグスタードのパレスホテルに滞在していただきます。

イギリス代表団は二四名になる予定です。イギリスの国会の議員数の割合を考えると、一人の議員はその国の二百万人の代表となるのですから、

イギリスはわれわれのアンケートにたいして好意的な回答を与えてくれたということになります。

三分の二は労働党からです。真のヨーロッパ連邦のためにあなた自身とその同僚議員をグスタードに連れてきていただければ、ヨーロッパの理念にとってとても力強い助けになります。同封の統計を見ていただければ、われわれが、イタリア、ルクセンブルク、オランダ、フランス、ギリシャ、ベルーギー、スイスで多数派かもしくはほとんど多数派を占めていることが分かります。ですので、われわれの議会主導の見込みは輝かしいものです。くわえて、イギリスのたすけがあれば、直面しているすさまじい困難を克服する希望となります。[91]

チャーチルの主催したハーグ会議に反対したイギリス労働党は、クーデンホーフの「ヨーロッパ議員同盟」の主催する会議には一六名もの労働党所属議員を出席させるのである。

さらに、クーデンホーフが「真のヨーロッパ連邦のため」という明確で断定した表現を使っていることも意外である。チャーチルの統合政策を実現不可能であるとみなしたイギリス労働党議員宛の手紙だとは思えないほどの表現である。

この後も、クーデンホーフとヘアリーは幾度も書簡を交わし、友好関係を深めている。これらの書簡からは、まるで労働党が大陸ヨーロッパ諸国におとらず熱烈な連邦主義であるかと思われるほどである。

しかし、その二年後の一九四九年に情況は一変する。三月二九日にクーデンホーフがイギリスのレイトン卿へ送った書簡にはつぎのように記されている。

ご承知の通り、ヨーロッパ議員連盟のイギリスグループは最近、いっさいの言い訳もなく、私たちの組織から脱退しました。この行動の背景には、組織の本部をグスタードからロンドンに移動しようとしたマッケイの企てがあります。この企てが失敗したからかれは、脱退し、すべての大陸のグループにもそうするように依頼したのです。大陸グループはヨーロッパ議員同盟に忠誠を誓ってくれており、だからイギリスグループは今や孤立状態です。

この情況は、イギリスにとっても、大陸にとっても非常に残念な事態です。そこであなたに仲介者になってもらい、協力関係を築けるような解決策を探って欲しいのです。ヨーロッパ運動に対する私たちの関係は二の次です。

イギリスグループがヨーロッパ議員同盟から脱退し、そしてヨーロッパ運動に加盟したなんて、まったく不合理な話です。フランスとイタリアグループなどはヨーロッパ議員同盟から脱退せずに、ヨーロッパ運動にも加わっているのですから、イギリスグループもそうすればいいのです。そして結局は、ヨーロッパ議員同盟とヨーロッパ運動の交渉はいまだ宙ぶらりんなのです。[92]

「ヨーロッパ運動」は、サンディスが「統一ヨーロッパ運動」と「ヨーロッパ議員同盟」のメンバーやその他の欧州統合運動を統合してあらたに発足させた組織である。もちろん、この時点でも「ヨーロッパ議員同盟」は正式には加盟しておらず、「ヨーロッパ議員同盟とヨーロッパ運動の交渉はいまだ宙ぶらりん」の状態であった。

チャーチルと対立していたはずの労働党は、マッケイの働きかけによって、クーデンホーフの「ヨーロッパ議員同盟」から「いっさいの言い訳もなく」脱退し、チャーチルの「ヨーロッパ運動」に参加したのだ。

書簡によれば、当初マッケイは、「ヨーロッパ議員同盟」の本部をロンドンに移そうと計画していた。フランスやイタリアといった欧州大陸の主要国が中心となって組織された「ヨーロッパ議員同盟」をイギリス主体の組織へと変えようとしていた。まさに「トロイの木馬」さながらの計画を実行しようとしたのである。

しかし、計画は失敗に終わった。そこで、イギリス議員たちは「ヨーロッパ議員同盟」を脱退し、イギリス人が主体となっているチャーチルの「ヨーロッパ運動」へと移ったのだ。

書簡のなかで「フランスとイタリアグループなどはヨーロッパ議員同盟から脱退せずに、ヨーロッパ運動にも加わっている」とのべられているように、国会議員がふたつの運動をかけもちするするということも当然のように行なわれていた。

このような情況は当初から予期されていたことで、一九四七年初頭にクーデンホーフはチャーチル宛の書簡の中で「ヨーロッパ議会の構成員となるための国会議員にたいする制限を設けることは、他の委員会との重複を避けるための最良の保証となります[93]」とのべ、理念や政策の相違にかかわらず各国の議員が複数の運動に重複して参加できてしまうことを問題視していた。

クーデンホーフとチャーチルの両者の運動の対立は一九四八年から続いてきたことで、情況は変化していなかった。にもかかわらず、一九四九年春のこの時期に「ヨーロッパ議員同盟」所属の労働党議員が「なんの言い訳もなく」脱退した。いいかえれば、脱退した議員たちには表立ってできる「言い訳」がなかった。

では、なぜこの時期でなければならなかったのだろうか。

考えられるのは、労働党の周囲で、なんらかの変化が生じたということである。この時期に、労働党内外でいったいどのような事態が発生していたのだろうか。

労働党国際局長のヘアリーからの返事にその手がかりが見つけられる。

> ヨーロッパ中の社会党に「ヨーロッパ運動」に関するわれわれの見解について詳細を告げたところだ。だから誤解はもう生じないと思う。マッケイとの問題に関しては、きみとは文通をすることはできない。なぜなら、労働党はどちらかといえば、ヨーロッパ運動に反対しているというよりも、ヨーロッパの連邦化に反対しているからだ。そしてマッケイの行動は、党内部の規律にとっても問題なのです。[94]

ヨーロッパ中の社会党に「ヨーロッパ運動」に関する労働党の見解を説明したというのは、マッケイの脱退によって、他のヨーロッパ諸国で、イギリス労働党が「ヨーロッパ議員同盟」と正式に決別したとみなされたからだ。だから、イギリス労働党が「ヨーロッパ議員同盟」とは対立してはいないのだということを諸国の左派政党に説明をするようにクーデンホーフが頼んだのだ。[95]

さて、ヘアリーの説明によれば、ヨーロッパ統合への態度を決めかねていた労働党は、「ヨーロッパ運動に反対しているというよりも、ヨーロッパの連邦化に反対」しているということになっている。

ヘアリーは、マッケイの行動をあくまで個人の行動とすることで、党とし

てのかかわりを無かったことにしている。そうすることで、これまでの労働党議員のヨーロッパ統合を目指す政治運動への関与は、労働党の政策ではなかったといっているのである。

もしかりに、マッケイたちの行動がヘアリーが言うように個人の責任によるもので、労働党は関与していなかったとしても、連邦化そのものに反対しているというのは、それまでの労働党の方針からしてもやや行き過ぎた発言であるように思われる。労働党の方針が明らかに変わったと考える方が筋が通っている。

そして、マッケイらの個人的な行為としていることから、労働党が党としてチャーチルの運動に加わるわけではないと説明している。労働党は、賛成こそ明言はしなかったものの、ヨーロッパ統合への試みを幾度となく公式な場で議論してきた。にもかかわらず、欧州統合運動への関与をすべてマッケイの個人的な行為だとして、それまでの政党としての統合運動との関与はいっさい否定したのである。

こうした労働党の振る舞いは、サンディスがいうように「道義的にもまちがっているし、戦略的にも馬鹿げている[96]」のではないだろうか。

しかし、このような労働党の二転三転する態度にクーデンホーフが怒った様子はない。

クーデンホーフは、労働党の態度の急変を予期していたようである。

クーデンホーフは次のように返事を書いている。

ヨーロッパの社会党にヨーロッパ運動に対するあなたの見解を説明してくれてとても嬉しい。もう誤解は生じないでしょう。今の時点で、ヨーロッパ議員同盟に反対して、サンディスとマッケイといっしょにヨーロッパ運動に議員セクションをつくろうとしているのは、オランダのポーツマス氏だけです。

実は、組織の問題以上に私を困らせているのは、イギリスの両方の党がヨーロッパの連邦化に反対しているということなのです。スイスとスカンジナビアとイベリア半島を除いて大陸ヨーロッパの多数派が連邦化に賛成しているにもかかわらずです。

政治的、経済的、哲学的理由によって、大英帝国が連邦体制下にはいることで、その主権の大部分をあきらめなくてはならないことを理解しています。いっぽうで、私はフランスとドイツの和解がヨーロッパ連邦によってしかもたらされないことを確信しています。

大西洋条約がこの行き詰まりを打開してくれることをのぞみます。なぜなら大英帝国にとって敵対的な大陸連合(continental union)となるのではないかという危険を回避してくれるのです。そうすれば、大英帝国はそれにはいらないというかたちでアソシエートしてくるでしょう。それはヨーロッパ連邦を組織することを可能にしてくれるのです。イギリス島とスカンジナビアを含んだ広い枠組みです。

もう一つの可能性ある解決策は、三同盟による大西洋同盟の強化です。大英帝国、アメリカ合衆国、ヨーロッパ合衆国です。もし大英帝国が大陸に次のことを約束してくれれば、それはヨーロッパにとって、とても助けになります。

第一…大英帝国はヨーロッパ連邦には加わらない。

第二…大英帝国は大西洋条約の精神にのっとり、大陸連邦の創設に反対しない。

そのような基盤のもと、イギリスの独立と主権を傷つけずに大英帝国と

連邦ヨーロッパの緊密な協力関係が成立するのです。この問題を大西洋条約というあたらしい視点から考えこの難しく繊細な問題を解決しヨーロッパを救ってくれることを頼みます。[97]

「私を困らせているのは、イギリスの両方の党がヨーロッパの連邦化に反対しているということなのです」と記したクーデンホーフは、労働党もチャーチルの保守党も「連邦化」に反対していることをしっかりと認識している。

前述したヘアリーの書簡などから、労働党が「連邦化に反対している」ことはわかるが、チャーチルが党首を務める保守党も連邦化に反対しているとクーデンホーフは確信するようになった。

さきにのべたように、チャーチルが準備したハーグ会議では、急進的な連邦化を目指す決議がなされていた。にもかかわらずクーデンホーフはチャーチルが連邦化には反対していると考えるに至ったのだ。

これは、おそらく、「ヨーロッパ議員同盟」と「統一ヨーロッパ運動」あるいは「ヨーロッパ運動」との対立軸が見いだせないためにクーデンホーフがようやく見いだした対立軸なのかもしれない。

たしかに、チャーチルは対外的にはヨーロッパ合衆国論者として名声を得、国家主権を制限したかたちでの欧州統合を表明していたが、アトリー首相にたいして、ハーグ会議での自分の言動はあくまでも市民的なものであり、それは明らかに責任ある政府による決議とは異なるといっている。[98]

連邦化に反対することは、経験主義的な政治を行なってきたイギリスにとっては、当然の反応であった。

そこで、クーデンホーフは、はっきりと連邦化はイギリスをのぞいて行なわれることをこの書簡で明言することで、労働党の支持を得ようとした。「大英帝国はヨーロッパ連邦には加わらない」ことを明言し、イギリスを除いたヨーロッパ大陸の連邦化の道筋を説明している。それは、「三同盟という大西洋同盟の強化」だ。「大英帝国、アメリカ合衆国、ヨーロッパ合衆国」による同盟であるとクーデンホーフは説明している。

この提案は画期的な内容であった。なぜなら、労働党政権はヨーロッパ統合という場合に、それはイギリスを含めたヨーロッパであることが当然としてみなされていた。だからこそ、早急な連邦化に反対していたのである。

しかし、クーデンホーフが意図していたのは、一九二三年の著書『パン・ヨーロッパ』でも明言している通り、イギリスを除いたヨーロッパ大陸の連邦化なのであった。

この、イギリスの立場についての大前提は、連邦化や連合化という議論によって、これまで注意されてこなかった。しかし、クーデンホーフはようやく、労働党と自らの理念の決定的な相違を理解したのであった。

クーデンホーフがこの本質に気がついたのは、北大西洋条約によって、アメリカの存在を意識しはじめたからだ。そして、労働党の態度の急変の裏には、北大西洋条約の締結という大きな出来事が存在していた。

第四節　明かされる構想—大西洋世界の中心として—

一九四九年四月四日、北大西洋条約が調印された。

欧州と北米の一二カ国の間で締結された集団安全保障条約である北大西洋条約は、ヨーロッパの統合にとって、大きな意味をもつ。

これは、前年の三月末の英米加の三か国による極秘交渉を起源としている。

この北大西洋条約をきっかけとして、イギリス労働党政府は、外交関係の軸を大陸ヨーロッパからアメリカへと移すこととなる。つまり、ヨーロッパの安全保障にアメリカ合衆国の全般的な軍事的介入が確保されることとなったのである。イギリス外務省は、一九四九年五月九日「世界第三勢力か西側の結束か?(A Third Word Power or Western Consolidation)」と題される極秘外交文書を作成した。第三勢力とはヨーロッパを指し、西側の結束とは北アメリカとの結束を意味する。つまり、ヨーロッパからアメリカへと外交政策の軸を移す必要性を説いたのである。

ヘアリー労働党国際局長の突然の連邦化反対もこのような情況にあわせたものであった。

極秘交渉といっても、イギリスにおいてヨーロッパ大陸との関係よりも、アメリカとの関係を重視しようとすることは政府首脳や与党労働党内だけの議論であったということではない。

保守党の重鎮レオ・アメリーからの手紙には、イギリス国会議員のあいだで、ヨーロッパ大陸と距離をおくべきだという考えが主流となりつつある現状をうかがい知ることができる。

北大西洋条約調印のおよそ半年前の一九四八年一〇月にアメリーはクーデンホーフに手紙を書いた。

インターラケンの資料を送ってくれてありがとう。しかし、この国の人達がヨーロッパ連邦のメンバーになれるという可能性があると誤解しないでくれ。マッケイやかれの下院の連邦同盟の友人たちのような者たちは、ここではちっとも世論を代表してるわけではないんだ。(筆者注…原文に下線)

ルランドノで保守党の総大会に参加してきたところだが、統一ヨーロッパへの私たちの参加という本来の趣旨に対するベーバーブロックの攻撃によってつくられた強い感情を考慮に入れ、ヨーロッパにおける我々の利害と英連邦の立場は相反するものではないと三〇〇〇人かそれ以上の聴衆に安心するように呼びかけた。・・・大陸ヨーロッパの連邦化が実現可能だとも私自身は信じられないし、とるべき本当の道とは、英連邦のようなシステムだと私は考えている。

しかし、もし大陸が連邦化したら、それとイギリスとが関係するとすれば、それはカナダとアメリカとの関係のようになるだろう。[99]

英国保守党の下院議員レオ・アメリーは、たとえヨーロッパ大陸が連邦化したとしても、イギリスが連邦のもとにはいることは不可能なことであると、きわめて現実的な提言をしている。

「ヨーロッパ議員同盟」に積極的に参加しており、この書簡の半年後には裏切ることになる労働党議員マッケイらの行為を「ここではちっとも世論を代表しているわけではない」と下線まで付してはっきりと明言している。

アメリーは保守党議員であり、「保守党の大会に参加してきたところ」と書いている通り、イギリスを含めない欧州統合は保守党では主流の考え方だったのだろう。

「イギリスが関係するとすれば、それはカナダとアメリカとの関係のようになる」と書いているように、イギリスと大陸ヨーロッパはカナダとアメリカのように、互いが独立し合うことを前提に、緊密な関係を築くことをアメリーは示唆している。

そして、ヨーロッパ大陸と距離を置こうとする姿勢の背後には、次第にア

メリカ合衆国を視野に入れた構想の一部であるのだということが分かってくる。

つづけて、アメリーはクーデンホーフに書簡を送る。

イギリスのヨーロッパに対する態度について何年も君と意見を交わしてきた。しかし、戦後のこの状況はそれを変える必要があると僕に思わせた。ヨーロッパ議員同盟ではドアも窓もイギリスのために開け放っている。

しかしイギリスは帝国であるから、統一ヨーロッパのメンバーであるよりも支援者であることの方がいいのだろう。大陸はこちらで別に連邦化する。ヨーロッパにもイギリスにもいいことだから、すぐにこの問題は明確化するだろう。

今の時点で、ほとんどの人びとは統一ヨーロッパというときに、なにを自分が意味しているのかを変わっていないから問題は非常に混乱しているのだ。

統合ヨーロッパと英連邦と大西洋を越えて、軍事的経済的協力関係になるはずであるアメリカ合衆国との協力の計画を創り出したら、君はヨーロッパに多大なる貢献をすることになる。延期や、ヨーロッパの連邦をあきらめること抜きでだ。

インターラケンでの宣言にのっとった、連邦が必要なのだ。なぜなら、ヨーロッパは「国際的な問題を調停できる連邦委員会」が必要なのだ。もしかすれば、この春にでもプラハでできるかもしれない。欧連邦はそんなには強くはない、しかし、欧州連邦は委員会によってその権限を拡大されるのだ。[100]

アメリーは、引き続き、クーデンホーフにイギリスとヨーロッパ大陸の統一との関係について提言をしている。

アメリーは、統合理念の実現は「ヨーロッパに多大な貢献」である一方で、極めて困難な作業となることを示唆している。

そしてアメリーの重要な指摘は、大陸の連邦化か連合化という問題ではなく、イギリスと大陸ヨーロッパの関係こそが重要であるとする点である。

アメリーは、連邦であれ連合であれ大英帝国をかかえるイギリスが欧州統合の枠組みに入ることは無理であるという前提を保持しつつ、イギリスが統合に協力的になれるための道筋を示した。

ヨーロッパの安全保障にとって、ヨーロッパ大陸の権限の拡大が必要不可欠である。そのためには、「国際的な問題を調停することのできる連邦委員会」の設立が求められる。しかし、それだけでは軍事的な安全保障までは、保障することはできない。そこで、「大西洋を越えて」アメリカ合衆国の介入を促すことができれば「ヨーロッパに多大な貢献をすることになる」。

大陸が統一するだけでは、イギリスにとっては脅威になるに過ぎない。しかし、イギリスが統一された大陸に有効な影響力を保つことができるのであれば、それはイギリスにとってとても都合の良いことである。その道筋を強調すれば、大陸の統合に対してイギリスの支持を得られることができるということをクーデンホーフに伝えている。

そして、イギリス人を納得させるための方法として、「統合ヨーロッパと英連邦」と「アメリカ合衆国との協力関係」を示している。

ヨーロッパ統合を独仏問題の延長として考えていたクーデンホーフにとって、これは革新的な視点であったに違いない。クーデンホーフは米ソに対抗するための第三勢力としてのヨーロッパ統合を念頭に置き続けていた。それ

が、イギリスが仲介役となることで、アメリカをも引き入れたより広大な枠組みの可能性をアメリーは示したのである。

さっそく、クーデンホーフは、ヨーロッパ統合を考えるさいに、アメリカとの関係を視野に入れることで、イギリスの立場をよりよいものにするというアメリーの提案をチャーチルにする。

一九四九年一月二七日、クーデンホーフはチャーチルに書簡を書いた。

敬愛なるウィンストン・チャーチル議員へ

統一ヨーロッパのための運動の統合のためにダンカン・サンディスが働いてきたのだというあなたと意見をともにできなくて残念です。

反対に、かれは設立以来二〇年以上経つこの運動を、あらたな「ヨーロッパ運動」と古い「パン・ヨーロッパ運動」を対立させることによって、切り裂いたのです。その間私は、両者を統合させようと試みていました。

今ここに来て、対立は明らかです。「パン・ヨーロッパ」はヨーロッパの連邦化の実現を目指していますが、「ヨーロッパ運動」はヨーロッパ基本法にも、連邦政府にも反対しています。

この対立の唯一の解決策は、一一月にナショナル・レビューに掲載された、レオ・アメリーの見解にあなたが賛成してくれることです。それはイギリスはヨーロッパ合衆国に参加も反対もしないということです。カナダがアメリカ合衆国に対してとる姿勢のようにです。北大西洋条約の締結は、そのようなイギリスの方針をとりやすいものにしてくれます。そして、大英帝国とヨーロッパ連邦とアメリカ合衆国の緊密な同盟は、共通の文明の発展と防衛のための最良の枠組みとなるでしょう。

一方で、一九世紀前半にオーストリアがドイツ連合にたいしてとった行動のように、もしイギリスがヨーロッパ連合にたいして単独で立ち向かうのは、イギリスと大陸は敵対し、唯一共通の敵のためだけに協力することになります。[101]

クーデンホーフは、チャーチルの運動とみずからの運動とが対立する原因を「連邦化の実現」にたいする考え方の違いだとする。そのうえで、「唯一の解決策」は、イギリスを連邦構想からはずすことであるという。そして、背後にアメリカの支えを得ることとなったイギリスには、大陸の連邦化を容認し、支援し、連邦化後も有効的な関係を築くことができると説得としている。

しかし、この書簡に対してもチャーチルは態度を明らかにしなかった。ただ「興味深く読みました」という電報を送っただけだった。

チャーチルが沈黙を続ける間にもイギリスの反連邦主義的な姿勢は欧州統合プロセスに亀裂を生じさせていた。

イギリスと大陸ヨーロッパ諸国との亀裂が表面化したのは「欧州審議会」の設立に関する交渉過程においてであった。ハーグ会議では、前述したようにチャーチルのイニシアチブによって「欧州審議会」を設立することを決定していたが、それがどのような機関になるのかは曖昧なままにされていた。[102]

大陸諸国は「欧州審議会」を超国家的な欧州連邦の基礎となる機関にしようと考えていたが、イギリスは政府間協力を行なう協議の場として捉えていた。

結局、一九四九年一月二八日に、イギリス案に近いかたちでの協議の場としての欧州審議会を設立することが決まった。

この協議では、「欧州審議会」設立という成果よりも、イギリスと大陸ヨー

ロッパ諸国での欧州統合構想の違いが明確にされてしまったという負の要素のほうが大きかった。

この情況に危機感を抱いたクーデンホーフは四月二二日、チャーチルに書簡を送った。

敬愛なるウィンストン・チャーチル議員へ

統一ヨーロッパへの輝かしい運動の進展にもかかわらず、ヨーロッパの統合が、危険な袋小路に入り込んでいることが心配です。イギリスとフランスが決定的に違った考えを持っているからです。

イギリスは諮問会議と国際議会を持ったヨーロッパ・コモンウェルスを目的とし、一方でフランスは連邦憲章と連邦政府に基づく真の連邦制を願っています。

イギリスがヨーロッパ連邦のメンバーになれないことは十分に理解しています。一九三〇年二月一五日のサタデー・イブニング・ポスト紙でそのことについて、あなたはすでに言及しています。

フランスの真の連邦を目指す議論にも同意します。フランスは、ヨーロッパ連邦以外にドイツとの和解の道はないという現実に直面しているのです。

フランスはドイツがヨーロッパから抜け出しロシアにつくかぎり同等の権利は受け入れません。ドイツはフランスが同等の権利を認めない限りフランスとの和解はありません。

数年のうちにドイツがすべてのポーランド人をシベリアかどこかへ連行し、その領土をロシアと同盟ドイツで分割するというロシアからの申し入れがあるだろうということを考えなくてはなりません。そうなれば、ドイツとフランスの緊密な協力関係はドイツがロシアに結合することで妨げられてしまう。そしてヨーロッパはロシア支配か核戦争かという悲劇的な選択を迫られることになります。

私たちはこの危険な袋小路を抜け出す道を探らなくてはならない。ドイツの統一にかんして、オーストリアとプロシアの間で交わされたかつての古典的議論を思い起こさせます。この議論がドイツの統一を半世紀おくらせ、そして一八六六年の戦争へと導いたのです。ほんの一二年後には両方の国は、ハプスブルク独裁ではなく、緊密な協力関係にもとづいたドイツの統一こそが最良の選択であったと認識するのです。

北大西洋条約は、ヨーロッパ問題にたいして同じような解決方法を導き出してくれます。

イギリスはヨーロッパともアメリカとも同盟関係になったのだから、大陸における反英主義の危機にたいしては安全となった。大西洋条約の精神の名において、ヨーロッパ連邦のメンバーとしてではなく、アメリカ合衆国を後援者でありパートナーとすることができるのです。

この条約は、アメリカ合衆国、イギリス連邦、ヨーロッパ合衆国という三国同盟に発展するでしょう。[103]

イギリスとフランスの対立を「危険な袋小路」とクーデンホーフは表現している。

ロシアへの危機感はクーデンホーフとチャーチルが共有するものであった。だから、クーデンホーフはロシアへの危機感をさらにあおることで、チャーチルを説得しようと試みている。

大陸とイギリスが対立している以上、イギリスは大陸の統合から除外されるべきなのである。しかし、イギリスを除いたヨーロッパが統合されても、イギリスとアメリカの間に同盟関係がある以上、イギリスは巨大化したヨー

ロッパに対して危機感を抱く必要はなくなると説明している。

クーデンホーフはイギリスが大陸の連邦化に反対するのは、大陸が連邦化することで、イギリスに対する脅威となることを恐れていることが最大の理由であると考えているのだ。そこで、超大国アメリカを同盟国として抱えるイギリスには、ヨーロッパ大陸を脅威に感じる必要はないと説明している。

そして、「アメリカ合衆国、イギリス連邦、ヨーロッパ合衆国という三国同盟に発展するでしょう」という提案で書簡を締めくくった。しかし、この提案に関して詳細はまだ述べられていない。

チャーチルからの返事はすぐに届いた。

親愛なる伯爵

四月二二日の手紙をありがとう。ヨーロッパ運動が素晴しい進展をとげたというあなたの意見に同意します。しかし、私は危険な袋小路に陥っているとは思わない。むしろ反対に、すべての国のすべての政党において協力することを決定したということは十分に証明されているし、私たちの少しばかりの忍耐が、なんらかの人びとに現時点では克服できない障害を克服させてくれるのでしょう。

貿易と生産品の問題が、おそらく最も困難なものかと思われます。しかし、先月、ヨーロッパ運動が主催したウェストミンスターでの経済会議は、ヨーロッパ共通市場の方針のしっかりとした基盤を築けたと感じています。

もちろん、地理的、歴史的、外部との繋がりによって、特別の問題を抱えている国々もあります。あなたと私が住んでいるスイスとイギリスです。スイスはその伝統的な中立政策で、イギリスは連邦諸国を抱えています。

健全な意志と解決への決断がこれら以外にもさまざまな問題の解決法を見つけるでしょう。イギリスが統一ヨーロッパの結実にむけて、多大な貢献などできず、する意志がないなどと考えるべきではありません。

心を込めて、ウィンストン・チャーチル[104]

チャーチルは「危険な袋小路」にさしかかっているというクーデンホーフの分析を否定している。そして、話題をそらすように貿易問題を中心に述べている。

最後には、イギリスが「統一ヨーロッパの結実にむけて」さらにコミットしていく姿勢を述べている。

やはり、チャーチルはつねにコミットメントしていくことでヨーロッパ大陸にイギリスの影響を根付かせたいと考えているようだ。

クーデンホーフは早速、返事をしたためる。

親愛なるウィンストン・チャーチルへ

五月八日の手紙ありがとうございました。ヨーロッパの発展について私以上に好意的でうれしいです。

イギリスとスイスが特別な状態にあるという点について完全に同意します。私の最新の冊子「ヨーロッパは統合を求めている」ではスイスの立場はあきらかです。すなわち、ヨーロッパ連邦を推進するが、参加はしない。イギリスの立場はさらに複雑です。大陸まで進出していって、統合を望みますが、連邦化は防ごうという印象をもちます。

健全な精神と決定がこれらの問題のよい解決策を導くというあなたの信念に共感します。

だからこそ、大陸はイギリス特有の問題を理解しなくてはならないのだ

と思います。同時にイギリスも連邦化以外は、フランスとドイツの和解はなく、すなわち平和と自由を確証してくれるものはないのです。

そうした相互がかかえる決定的な問題の理解が、ヨーロッパ統合のためのおたがいの協力を推進できるのでしょう。

あなたのいうとおり、この協力関係を築きたいと思います。そして今日まで幾つもの誤解が生じたことを残念に思います。[105]

クーデンホーフはチャーチルがイギリスがヨーロッパの統一にコミットメントしていくとのべたことに対して、「イギリスの立場はさらに複雑です。大陸まで進出していって、統合を望みますが、連邦化は防ごうという印象をもちます」として非難をしている。

クーデンホーフは、イギリスが参加する以上、ヨーロッパの連邦化は不可能となる。これはチャーチル自身が批判する労働党の見解とまったく変わらないものになってしまうと考えていたのだ。

チャーチルはクーデンホーフにたいして、ヨーロッパの統合にコミットメントしていく姿勢を明らかにしているが、その発言とはうらはらに、一九四九年一〇月にはイギリス政府は欧州統合を捨てて英米関係強化を決定している。[106]

つまり、北大西洋条約以降、イギリスはヨーロッパとの関係よりもアメリカとの関係を重視するようになるのである。

そこで、クーデンホーフは、ある提案をする。

敬愛なるウィンストン・チャーチル議員へ

ヨーロッパ合衆国にかんするパン・ヨーロッパ運動の新しい方針をお送りします・・・。

独仏和解が連邦政府のもとのヨーロッパ連邦という枠組みでしか達成できないため、このイニシアチブはとても重要です。

手遅れになる前にこの連邦を完成させるために、そしてドイツ国民が中国人のようになってしまう前に、パン・ヨーロッパはかつての活動を復活させます。友愛率直のイギリスの同志に頼みます。

ところで、あなたがたの政党の最近の決議をみれば、イギリスがヨーロッパの共同体を促進させることを願っているのがわかります。しかし、英国自治領と合衆国との絆に影響を及ぼすであろう大陸のめざす真の連邦には入れないのでしょう。

イギリスの態度が地理的、政治的、経済的状況から来ていることは分かっています。イギリスにとって大西洋は隔たりなどではなく、ハイウェイなのでしょう。ドーバー海峡は大西洋よりも広く感じるのでしょう。

私たちが直面している問題は、イギリスと大陸の政策の協力です。アングロサクソン大陸とヨーロッパ大陸が両者ともに利益を得ればいいのです。

解決策としては大西洋同盟を軍事同盟以上のものにすることです。そして南米も含み、ワシントン、ロンドン、ストラスブールの大三角形をつくることです。そうすれば、イギリスは必然的にヨーロッパとアメリカの橋渡しができます。カナダも含めてです。イギリスが大西洋世界の中心となるのです。どうか、ご検討ください。[107]

私は、幾度もこの書簡を読み返した。

この書簡で、ヨーロッパ、イギリス、アメリカの広大な三角形を描くという壮大な構想がはじめて明らかにされているのだ。それも、「イギリスが大

西洋世界の中心となる」構想である。つまり、イギリスがヨーロッパと北アメリカの中心となることを提案しているのである。

ヨーロッパが統合すれば、それはイギリスにとっての脅威となるどころか、イギリスを世界の中心にすることになるのだ。

イギリスを除いたヨーロッパ大陸のみが連邦化することは、イギリスにとって脅威であるとも考えられるが、視点を変えれば、むしろヨーロッパが統合することでイギリスが世界の中心になるというのである。

これは、壮大な構想であった。これこそが、チャーチルが意図していたことだったのだろうか。

私は、あせる気持ちを必死に押さえながら、チャーチルの返信を手に取った。

*

親愛なるクーデンホーフ・カレルギー伯爵

一一月二日の手紙と同封物をありがとう。

イギリスを抜かしたヨーロッパを創りあげるという解決策には賛成しかねます。シューマンやスパークがいうように、イギリスの参加がヨーロッパ統合には不可欠です。最終的にその統合体がいかなる形をとるのかについて今は申せません。しかし、次のステップはとにかく欧州評議会をすべての意味においてより強くすることです。

クリスマスと新年を幸せにお過ごしください。

心を込めて、ウィンストン・チャーチル[108]

イギリス連邦、欧州大陸、アメリカ大陸という大三角形の中心にイギリスが君臨するというクーデンホーフの壮大な構想に対するチャーチルの返答は用心深い。

チャーチルは、欧州の統合にイギリスを直接参加させず、外在的にヨーロッパ大陸を指導する立場を模索しているのではなく、その逆に、イギリスは欧州統合に主体的にかかわり、内在的な存在意義を欲しているのだと主張している。しかし、チャーチルのいうように「イギリスの参加がヨーロッパ統合には不可欠」だと、イギリス国会議員たちの間で考えられていたわけではないし、おそらくチャーチルの本心もイギリスが参加することは想定していたとは考えにくい。

アメリーは、イギリス政界のヨーロッパ統合にかんする情況をクーデンホーフに次のように伝えた。

親愛なるディッキー

イギリス議員グループがヨーロッパ議員同盟から脱退してしまうという事態にきみが直面して、とても恐れている。・・・ヨーロッパ統合に興味を持って、なんらかの別の独立した機関を設立しようとする公人がいなくなってしまうのではないかと恐れている。他方で、この国でヨーロッパ統合を支持している主な人たちは私の見解に同調してくれていると思ってくれてかまわない。この見解は先月の一〇月のランディドーノで行なわれた保守党議会で満場一致で受け入れられた。保守党の主要人物でこの見解に反対する人はいなかった。ダンカン・サンディスももちろんだ。社会党の責任ある議員たちにも同じことがいえるのではないかと思っている。・・・君の主張の最大の敵は普通のイギリス紳士だ。つまり急激な前進を拒否す

る私たちイギリス人の現実主義で、控えめな伝統だ。イギリス人は完全なる連邦がすぐにできるなどとみなしていない。だから連邦に対して如何なる立場を取るかということについては興味を示そうとはしない。かれらは、それが防衛に関することだろうが、経済協力に関することだろうが、諮問議会での議論だろうが近い将来になにを成し遂げられるのかということにのみ興味を持っているのだ。[109]

アメリーのいう「私の見解」とは、イギリスはヨーロッパ大陸の統合には直接参加せず、大陸と緊密な協力関係を築くというものだ。イギリスがとりうる唯一の道としてアメリーはイギリスが統合に加わらず、外在的に影響力を保持することをのべている。つまり、一九四九年初頭の時点でイギリスは、統一ヨーロッパに加わらず、ヨーロッパ大陸に影響力を保てるような立場を模索しているのである。

また、イギリスにおいてヨーロッパ統合運動が、第三章で述べたようにだれがリーダーシップをとるべきかという主導権争いとなってしまっているという実態が書簡の中で明らかにされている。熾烈な権力闘争によって「ヨーロッパ運動」以外のヨーロッパ統一を掲げる政治運動はなくなり、結果としてヨーロッパの統合に関する様々な意見が交わされなくなってしまうという閉塞的な事態が生じているようだ。そして、イギリス人は「近い将来になにを成し遂げられるのかということにのみ興味を持っている」ので、欧州統合にたいする関心は低くなっている。

そうした現状に対して、クーデンホーフは「近い将来」イギリスに起るであろうことについて、つぎのように述べている。

君の党の多くの人が君の意見に賛成してくれていると知って、嬉しい。ランディドーノで行なわれた保守党議会の統一ヨーロッパにかんする議事録を送ってくれないだろうか。

世界平和は英連邦とアメリカ合衆国とヨーロッパ合衆国の軍事的・経済的なつながりを基礎とするものであるとかつてなく確信している。英国と大陸の協力関係を築かなくてはならない。それは欧州的な枠組みではなく大西洋的な枠組みであるべきだ。ヨーロッパはStaatenbund（国家の結束）ではなく、Bundesstaat（結束されたひとつの国家）を必要としている。かつてのStaatenbundは内乱を引き起こしてきてしまったことは歴史が証明している。Bundesstaatに変わらなければならないのだ。英語にもフランス語にもこの言葉は訳せなくて申し訳ない。[110]

クーデンホーフはここでもイギリスと欧州大陸とアメリカとの関係が重要であるという見解を主張している。さらに、複数の国家が連合する連合制による統一ではなく、連合されたひとつの国家となる連邦制による統一の必要性を主張している。

この書簡が書かれた直ぐ後の一九四九年四月に締結された「北大西洋条約」によって、ヨーロッパにおけるアメリカの存在は一段と増すことになる。北大西洋条約が締結されるという情報を得たクーデンホーフは三月二八日、アメリーにつづけて書簡を送った。

親愛なるレオ

・・・大西洋条約の締結はイギリスの統一ヨーロッパにたいする態度を変えさせるだろう。この条約はすばらしい大西洋世界の新しい機構の枠組

みを提供してくれる。それはアメリカと英連邦とヨーロッパ合衆国を基礎とするものだ。なぜなら、この条約はイギリスに統一ヨーロッパへの参加から手を引くことのあらゆる利点を与えることになるからだ。統一ヨーロッパのメンバーとなることの利益はかなり少なくなるだろう。イギリスにとって、ヨーロッパ連邦の一員になるよりはパートナーになるほうがよっぽど利益になるからだ。[111]

クーデンホーフは、北大西洋条約の締結によって、自らの考えに強い確信を得たようだ。イギリスがアメリカとの橋渡しをすることによって外在的にヨーロッパに関与していく姿勢を明らかにしている。

アメリーもクーデンホーフからの書簡にたいして「大西洋条約締結が英連邦にとって、ヨーロッパ連邦の完全なるメンバーとしてではなく、ヨーロッパ統合のパートナーとしての可能性を様々な意味で広げるという見方に賛成だ[112]」と返事をおくり、クーデンホーフの見解に完全なる同意を示している。

以上の往復書簡からも、イギリスがヨーロッパの「パートナー」としての立場を取ることにとても積極的になっていることがよくわかる。

こうした認識がアメリーの所属する保守党内でも共有されているにもかかわらず欧州統合に主体的に関わることを望んでいるという書簡を送ってきたチャーチルにたいしてクーデンホーフは、つぎのように返事を送っている。

親愛なるウィンストン・チャーチルへ

一二月二二日の手紙に感謝します。イギリスがヨーロッパ連合に完全に参加することを確信しているのですね。

イギリスはヨーロッパ最高の国家だといつでも尊敬しています。ですからイギリスのヨーロッパ連合での身分を考慮に入れて、もっとも満足のいくようにあらゆる方法を考えなくてはなりませんね。この気持ちを大多数のヨーロッパ人は共有しているでしょう。

イギリスの人びとが連邦的結束がかれらの大陸への貢献と両立しないと考えたの場合に限り、大陸諸国は連邦化を先延ばし、イギリスの展開を待つのか、あるいはイギリス諸島とスカンジナビアとイベリア半島と東欧への窓は広く開け放ったまま、シャルルマーニュの帝国の範囲内で始めるべきなのかという問題が持ち上がってきます。この解決策は、満足にはほど遠いものでしょう。しかし政治的経済的には必要なこととなるでしょう。

ヨーロッパが待てないのは、一九五二年というデッドラインがあるからです。マーシャル・プランの終了時にもしもヨーロッパが連邦化していなかったら、悲劇の新たな波がやってくるのです。革命と戦争は避けられないものとなるでしょう。

ヨーロッパ評議会でのあなたの希望を共有します。そして、より強力になるように私ができることはすべてやります。しかし、ストラスブールでの天王山は議会に対して閣僚委員会が反対することで、それはヨーロッパ連合への障害となるでしょう。

各国家の議会と世論とアメリカ合衆国の強力なサポートがあってのみ、議会はこの戦いに勝利することができます。しかし、これは過去と未来との戦いですから、私は勝利を確信しています！[113]

クーデンホーフは、イギリスが主体的にかかわろうとすることに対して懐疑的な姿勢を崩していない。かれのいうように、イギリスが欧州統合に主体的に参加することは現実的な選択ではない。アメリーや他の保守党議員の考

えるように、外在的にヨーロッパ大陸をコントロールすることがイギリスにとって最も合理的な選択といえる。

このような前提を考慮するとクーデンホーフとチャーチルのやり取りに不可解な二つの疑問が生じてくる。

第一に、これほどまでにイギリスにとって好都合であるにもかかわらず、チャーチルがクーデンホーフの提案にあえて異議を唱えたのはなぜなのかということである。なぜこの時期にチャーチルはイギリス政界の主流から逆行するような見解をわざわざクーデンホーフに伝える必要があったのだろうか。保守党内で外在的指導的立場が模索されているにもかかわらず、チャーチルはなぜクーデンホーフ宛の書簡の中で「イギリスの参加がヨーロッパ統合には不可欠」であると述べたのはなぜだろうか。

第二は、なぜクーデンホーフは欧州大陸が不利になるような統合構想を提案したのだろうかという点である。クーデンホーフは、あまりにもイギリスの立場に配慮しすぎなのではないだろうか。一見すれば、イギリスに迎合しているようにも考えられる。まるで、ヨーロッパ大陸が統合さえできれば大陸がイギリスの支配下に入ってもかまわないというようにすら受け取ることができてしまう。

一九四九年一一月四日にアメリーからクーデンホーフに宛てられた書簡は、このふたつの疑問を解く手がかりとなる。

親愛なるディッキー

最近はとても忙しかった。二週間以上もまえに君の著書をもらっておきながら、やっと二、三日まえに読み終わったところだ。きみはとてもすてきな物語を語ってくれている。

私にとっては、今では取り返しのつかない過ぎ去ってしまった美しい世界をのぞき見るようで、最初の部分がとても興味深い。少なくとも我われの世代にとっては気にかかることだろう。中盤のほとんどのところについてはもちろん私にもなじみ深いものだ。結局のところ、私たちはこのフィールドでほぼ四半世紀にわたって仲間として活動してきた。現在の状況にはきみも満足できるのではないかとおもう。すべては動き出し、なにごともこの動きをとめることはないだろうから。

君も知っての通り、今行なわれようとしている特別なことに関して、現在の私の立場は、特にこの国の連邦化には懐疑的だ。ある程度はヨーロッパそれ自体にもだ。ただし、私が懐疑的という時、それは敵対的にいっているわけではない。

ただ英連邦諸国の関係をみてきた私の経験が、もし連邦化が実現した時に、参加国が本当にそうした体制をとるのかどうか疑わしくさせるのだ。時間だけがそれを証明してくれるだろう。数年のうちにきみの望むような方向を実現させるかもしれない。どんな場合にも、仏独和解と相互理解は将来の共同体の基盤であり、フランス市民で、ドイツ的な価値観の影響を受けた中央ヨーロッパで育ったという君のもつ二重の立場は最良のものだ。

ベーバーブロックは先日の保守党大会の前日の論文で、統一ヨーロッパに反対する断固たる立場をとった。しかし、会議の一体性は保てるだろう。二つの考えは基本的に相互補完的なものであるからだ。中央委員会が印刷したら、ディヴェートのコピーをきみに送ろう。・・・

追伸、一一月一日のパン・ヨーロッパ運動の最新の提案が同封されたきみの手紙を受け取ったので、これを口述している。きみは私がはじめの時からどれほど心の底からきみの努力を助けてきたか知っているはずだ。そ

してきみの本の中で私のことについて述べてくれたことを深く感謝している。しかし、私はいつでも明確にしておきたい。

この国が、協力的なコモンウェルス型をめざすヨーロッパ運動とうまくやっていける間は、私はヨーロッパ連邦には反対するだろう。大陸ヨーロッパ諸国が準備が進んでいたとしてもだ。

だから、残念ながら私はきみの提案に署名することはできない。かつてのように外から祝福を祈らせてくれないだろうか。

そのような前提ならばきみのウィンストンへの手紙はうまくいくのだろう。

フローレンスが徐々に回復傾向にあることを君にお伝えできるのはうれしい。

この手紙はきみがパリに旅立つまえに君の手元に届くようにグスタードにおくる。

レオ[114]

クーデンホーフの送った著書はかれの回想録であった。アメリーはこの本を読みながら、自分自身の半生を振り返っていたのかもしれない。クーデンホーフとアメリーは一九四〇年以来の親交を暖めてきていた。

しかし、イギリス国会議員であり、イギリス国民を代表している以上、イギリスの国益を損なうことになりかねないヨーロッパ大陸の連邦化に公式に賛成することは許されないとアメリーは述べている。立場が二人の友情を傷つけることのないよう細心の注意をはらってアメリーはクーデンホーフの送ったパン・ヨーロッパ運動の方針に「署名することはできない」と伝えた。

イギリスが大陸ヨーロッパの統合にたいして、外在的な立場をとるということは、クーデンホーフもアメリーも一致した見解であった。にもかかわらず、ふたりの見解が異なったのは、大陸ヨーロッパの統合が連邦制によるものか、そうではなくゆるやかな連合制であるべきかという点であった。アメリーは「この国が、協力的なコモンウェルス型をめざすヨーロッパ運動とうまくやっていける間は、私はヨーロッパ連邦には反対するだろう」とのべている。つまり、インドやカナダといったそれぞれの国家がひとつの国として自立していながらも、英国王の統治下にあり、他の国よりも緊密な関係を築くという大英帝国のようなコモンウェルス、あるいは連合制によるヨーロッパ大陸の統合をアメリーは想定している。

対照的に、クーデンホーフはすべてのヨーロッパ諸国の国家主権に優越する連邦政府のもとに統合される連邦制を想定している。

そこで、クーデンホーフが「連邦化」に固執している点を考えなければならない。

クーデンホーフは、ヨーロッパ大陸が連邦化することによって、イギリスの外在的な支配から逃れられると想定していたのではないだろうか。

クーデンホーフはチャーチルに、ヨーロッパ大陸が統合することで「イギリスが大西洋世界の中心になる」と説明しているが、ヨーロッパ大陸が連邦化することが強い求心力を生むことをあえて触れていない。

イギリスがヨーロッパ大陸とアメリカとを指導下におけるという保証は実はどこにもないのである。もちろん、「橋渡し」としてバランサーとしての役割は重要であり、アメリカとヨーロッパ大陸双方から利益を引き出すことは可能かもしれない。しかし、それは絶対的に安定した地位では決してない。

もし、安定したヨーロッパ大陸が連邦制によって統合され、統一した行動をとるようになれば、それはイギリスにとってあまりにも巨大でコントロー

ルすることが困難となってしまう。

チャーチルはおそらくそのことに気づいているのだろう。だから連合制による統合にこだわっているのだ。連邦制ではなく、主権国家の集合体としての連合制によってヨーロッパ大陸が統合されれば、ヨーロッパ大陸内の国々で対立が生じ、その対立の仲介役としてイギリスが介入できれば、イギリスのヨーロッパ大陸への指導力はより大きなものとなる。

チャーチルにとって、大陸ヨーロッパの統合に内在的にかかわらないという姿勢を早い段階で明らかにしてしまうことは、イギリスの大陸ヨーロッパへの影響力を少なくしてしまうものだという危機感があった。だから、統合プロセスにかかわり、連邦化を防ごうとしているのだろう。

統合運動に内在し、内部から自らの都合にあわせて変革を行うという手法はこれまでに述べてきたように、イギリス人が得意とする交渉手段である。

*

私は、このような連邦制と連合制をめぐるクーデンホーフとチャーチルの議論は欧州統合の本質的な問題を議論していたという事実を知って興奮した。

興奮と同時に不可解なことに気づいた。

これほどまでに本質的な問題を議論しているにもかかわらず、現在、ふたりがこのような議論を繰り広げていたことはほとんど知られていないのはなぜだろうか。

もしかしたら、ふたりの議論は封印されてしまったからなのではないだろうか。

では、このふたりの対立はいかなる終焉を迎えるのだろうか。

私は、クーデンホーフとチャーチルの往復書簡がやりとりされた日付を整理してみた。

すると、ある事実に気がついた。

クーデンホーフとチャーチルらの書簡のやり取りが突然少なくなる時期があるのだ。それは一九五〇年の五月ごろからだった。その時期、ヨーロッパでは何がおこっていたのだろうか。一九五〇年五月に何がおこったのだろうか。

手元においてあった世界史の教科書の年表をみてみた。すると、「一九五〇年五月八日…シューマン・プラン」という文字が飛び込んできた。

クーデンホーフとチャーチルの議論の終焉の幕開けとなったのは、フランス政府が発表したシューマン・プランだったのではないだろうか。

クーデンホーフとチャーチルの議論してきた欧州統合のありかたとは、まったく異質な欧州統合プロセスを提案するシューマン・プランが、かれらの対立に終止符を打ったということなのだろうか。

第四章　シューマン・プラン—あるいは対立の終焉—

第一節　イギリスとヨーロッパ大陸

一九五〇年五月八日。ヨーロッパにおける対独戦終戦の一九四五年五月八日からちょうど五年目のその日、フランス外相ロベール・シューマンの特使が列車で西ドイツのボンへと向かっていた。

翌五月九日、早朝。ボンに到着した特使は、アデナウアー西独首相と面会し、ジャン・モネが起草した仏独石炭鉄鋼統合計画の概要を告げる。

ドイツの石炭と鉄鋼の超国家的な共同管理体制の構築をかかげるこの計画は、それまでの「ドイツ問題」の解決策として議論されてきたクーデンホーフやチャーチルがかかげる欧州の統合とは大きく異なっていた。

クーデンホーフやチャーチルは、欧州の国会議員たちで構成される「ヨーロッパ議員同盟」や「欧州評議会」をつくり、そこで欧州統合の在り方を議論し、欧州基本法を制定したうえで、欧州連邦、あるいは欧州連合を形成しようとしていた。

それにたいして、シューマン・プランは、「ドイツ問題」の解決のみを目的とし、統合の領域を石炭と鉄鋼に限定するというもので、極めて実務的なものであったのだ。

この発想は、マーシャル・プランにつながるものがある。マーシャル・プランもまた、経済支援のみを前面に掲げることで、ヨーロッパ諸国の結束を強めたのだ。

サンディスは「マーシャルの要求は、各国政府がひとつのテーブルでヨーロッパの協力について話し合うことだ[115]」とのべ、当時ばらばらになっていたヨーロッパの統合運動を結束させようとし、それが「ヨーロッパ運動」の成立へと繋がったのである。もちろん、複数の運動の統合への動きはむしろその対立を深めることとなってしまったことは、今までに調べてきた通りだ。

しかし、点在するヨーロッパの統合運動をまとめようとするきっかけとなったことは間違いない。

マーシャル・プランは欧州の統合を促進させ、一九四八年八月には貿易や為替、関税にかんする協議の場として欧州経済協力機構（ＯＥＥＣ）が設立されるに至っている。

マーシャル・プランが経済政策のみを前面に掲げることによって各国政府のヨーロッパ統合への動きを促進させたとすれば、シューマン・プランはさらに石炭・鉄鋼政策に統合を限定することでより各国政府が決断しやすい環境を創り出したということになる。

こうした手法は皮肉にもアメリーがいうように経験主義的なイギリス人がもっとも好むものであった。さらに、実現性をもたせるために、クーデンホーフやチャーチルが西ヨーロッパ全域の国家を統合することを前提していたのに対して、シューマン・プランではわずか六カ国のみが統合の対象となっている。

計画の詳細についての説明を受けたアデナウアー首相は、電話ですぐにシューマン外相にこの計画を歓迎する意向を伝えた。

アデナウアーからの了解を得たフランスは、午前中の閣議でモネの構想を了承し、午後には、シューマン外相によって「シューマン・プラン」は世界中に知らされた。

現在のＥＵ(欧州共同体)の起源となるこの計画は、イギリス政府首脳、政界の有力者たちに事前に知らされることはなかった。

当日になって唯一知らされたのは、外相のアーネスト・ヘヴィンだけであった。駐英フランス大使のマグリシの突然の訪問を受けたヘヴィンはあわてて至急の電報をパリの英国大使館をはじめとするヨーロッパ大陸に点在するイギリス外務省関係オフィスに送っている。

一九五〇年五月九日

閣下

本日、フランス大使が緊急の伝達を携えて私のところにやってきました。今朝のフランス政府の閣議で了承された決定についてです。この決定は今

週ロンドンでおこなわれる三国会議にシューマンによって提出されます。今夜には記者発表されます。

二、フランス内閣の決定の概要は以下の通りです…フランス政府は　西ヨーロッパのすべての石炭および鉄鋼の管理生産をひきつぐ機関が設立されるべきであることを提案する。その機関は所有権はもたないが、管理権限をもつというものです。

M・マシグリは、これは西ヨーロッパの統合をもたらす最初の具体的な提案であるとフランス政府は考えていると説明いたしました。

三、私は、提案の詳細を最大の注意を払って検討いたしますが、現段階ではコメントは申せませんと、M・マシグリに伝えました。[116]

ヘヴィン英外相にとって、マグリシの訪問は晴天の霹靂であったに違いない。おまけにそれは、シューマン・プランに関する相談ではなく一方的な通告であった。

シューマン・プランの詳細を突然聞かされ、その日のうちに公式発表を行なうと通告されたヘヴィンは取り乱した。

「提案の詳細を最大の注意を払って検討いたしますが、現段階ではコメントは申せません」と答えるのがやっとだった。

対照的に、前述の通り西ドイツのアデナウアー首相、さらにアメリカのディーン・アチソン国務長官にはフランス政府から事前に打診があった。

イギリスは明らかにフランス政府に出し抜かれた。とくに、イギリスの欧州統合運動を牽引してきたチャーチルやアメリーら保守党議員たちは完全に立場を失ってしまった。シューマン・プランへの対応をめぐって、イギリス国内でも保守党と労働党の対立ははげしさをましていった。

・・・シューマン・プランと統一ヨーロッパ全体にたいしてのわれわれの現政権の態度は、その考えを承認しているに過ぎない。知っての通り、私はいつでも連邦体制や関税同盟に完全なるパートナーとして参加はできないといっている。しかし、いつでも親密な特恵のよき隣人だ。労働党のドキュメントがこの点をはっきりさせてきた点はいいことだと思う。一方で、独善的トーンと孤立的社会主義は嘆かわしいことだし、タイミングも悪い。[117]

アメリーは冷静な分析を行なっている。ここでもアメリーは「親密な特恵の隣人」としてヨーロッパの統合にかかわり続ける姿勢を強調している。これはイギリス政府の考えでもあった。しかし、シューマン・プランへの具体的な対応というわけではない。いかなる対応をするべきなのか明確な判断はできないでいるのだ。

タイミングの悪さを指摘しているのはおそらく、一九五〇年六月二日の閣議で、イギリスがシューマン・プランに加わらないことを決定してしまったことである。

この日の閣議には、アトリー首相は休暇でおらず、外相のヘヴィンもまた病気で欠席していた。この閣議決定が今後のイギリスの立場にどれほどの影響を及ぼすことになるかも理解せぬまま、急遽議長となったハーバート・モリソンが閣議決定を下してしまったのだ。今後、欧州統合プロセスの主導権を事実上フランスに譲ってしまったかたちとなる。

一九五〇年六月の書簡で、アメリーはイギリス議員たちのシューマン・プランへの反応をつぎのように記している。

親愛なるディッキー

・・・シューマンプランに関する議論は絶望的に混乱した。主な原因は、イギリス人はなによりもあらかじめ基本方針が決まってしまっているということを感情的に嫌っていることだ。詳細に関する議論を帰納的に積み上げていった結果として基本方針を出すことを好んでいる。フランス人は一般的な基本方針や演繹的な対象がなければ、動くことはできない。

私たちがヨーロッパに何を望んでいるかということと、私たちが参加することが可能なのかという間においてさらなる混乱が生じている。君も知っての通り、私はその枠組みの中に我われが入ることができないが、緊密な協力関係を外部から築くという条件を明確にした上で、ヨーロッパ連邦という理念に反対ではない。同様に、我が政府は、外部からの協力のみであるがはじめから関与することで、シューマン・プランがカロリング朝に達することを支持することを明らかにした方がいいだろう。しかし、今回の議論の中では、もし、超国家的な主体がつくられた場合、その外にとどまっておくことは危険であるという政府批判が相次いだが、私自身はそうは思わない。[118]

フランスに主導権を握られてしまったというイギリス国会議員内での焦りが垣間みられ、シューマン・プランに対する拒否反応とでもいえる対応が明らかになっている。

それは無理もないことである。シューマン・プランの突然の発表によって、イギリスは欧州統合運動の中心的役割から突如として傍流へと追いやられてしまったのだ。

シューマン・プランは石炭と鉄鋼に限定されているが、超国家的な機構をつくろうとしていることは画期的である。シューマン・プランが実現性を増していくなかで、イギリスの国会議員たちの間で、どのような立場を取るべきなのかについてさらなる混乱が生じている。

アメリーは、ここでもイギリスは大陸の統合には加わるべきではないという姿勢を主張しているが、他の議員たちにとって大陸が連邦化するならば、それに乗り遅れるべきではないという焦りもあるようだ。

しかし、国際政治は思わぬところで急変した。一九五〇年六月二五日に朝鮮戦争が勃発したのだ。東の果てで勃発したこの戦争は、欧州統合に極めて重要な意味を及ぼした。朝鮮戦争は「ドイツ問題」をさらに深刻なものとした。

アメリカは朝鮮半島に米軍を大規模に派遣した。その結果、もし欧州大陸で同様の戦争が勃発した場合、アメリカは欧州大陸に軍隊を展開することが絶望的となってしまった。英仏軍を中心とした欧州の軍事力ではソ連軍に太刀打ちできるとはだれも考えなかった。そこで、唯一の選択肢は西ドイツの再軍備化であった。アメリカはドイツの再軍備化を強く主張した。しかし、フランスが承知するとは思えなかった。仏独和解を前提とした欧州統合は危険な袋小路へと突入しつつあった。そうした危機的状況にもかかわらず、イギリス労働党政府はフランスの提案したシューマン・プランを後押ししようとはせず、否定的な態度を崩さなかった。

ここで、チャーチルはイギリスの存在意義を示す起死回生の提案をする。

朝鮮戦争勃発の二ヶ月後の一九五〇年八月一一日に開催された欧州審議会の会合で、チャーチルは、「欧州軍」創設構想を披露した。

われわれは、これまでそうであったように、国連に対する我われの忠誠を再確認するというだけでなく、同時に統合された指令系統をもつ欧州軍の迅速なる創設を要請する宣言を行なうことによって、実践的で建設的なる道筋を提起するべきであり、そこでは我われ全てが価値あり名誉ある役割を担うべきである。[119]

チャーチルは、「欧州軍」創設という新しい課題を掲げることで、欧州統合プロセスのなかでの自らのイニシアチブを取り戻そうとした。

チャーチルの提案を受けた欧州審議会の総会は、「欧州防衛大臣の権限下にある、統合された欧州軍の迅速なる創設を要請する」決議を採択した。

では、チャーチルが提案した「欧州軍」とはどのようなものであったのだろうか。

チャーチルは八月一五日に覚書を執筆し、欧州軍構想に関する具体的な描写を行なっている。[120] この覚書では、師団規模の単位では国籍の混同を避けるということも示されている。つまり各国の軍隊がひとつの師団となり、統合されるという軍組織を構想している。さらに重要なのは、チャーチルの構想では、イギリスが一〇個師団、アメリカが一〇個師団、そしてフランスが一五個師団、ドイツが一〇個師団というように、アメリカを加えている点である。

ここに、チャーチルの欧州統合の構想の深意を読み取ることができる。軍の編成を国単位で行なうことによって統合されながらも国家主権を強く意識させられる。

かれの頭の中には連合制としての統一欧州という構想があったのではないだろうか。そして、背後にアメリカを抱え込むことで、イギリスのヨーロッパに対する優越的立場を獲得しようとしていた。

チャーチルの「欧州軍」構想にたいして、モネは一九五〇年一〇月二四日に「プレバン・プラン」として「欧州防衛共同体」を発案する。この「欧州防衛共同体」は超国家的な軍組織を構想していた。つまり師団よりも小さい単位において、各国軍が混合される軍隊を想定しているのである。チャーチルが各国の国防軍を存続させることを前提としているのに対して、モネの構想ではそれが否定されている点で、このふたつの構想は全く異なったものであった。

このような本質的な相違をかかえながら、一九五一年九月一〇日、チャーチルはパリで、イギリス大使オリバー・ハーヴェイの主催する晩餐会でジャン・モネやポール・レイノー、そして仏国防大臣の補佐官であるステラン将軍と席をともにした。この席上、チャーチルは「欧州軍」についてフランスが中心になってすすめている「欧州防衛共同体」の計画がチャーチル自身の構想とはまったく異なるものであることを指摘した。そして、チャーチルは「現在計画されている欧州軍は、せいぜい『どろどろの混合物』に過ぎない」とモネの構想を批判した。

しかし、晩餐会の場でモネの考えが変わることはなかった。さらにチャーチルは翌日、かつての部下にして戦友のアイゼンハワー米大統領とこの問題について意見交換をしたが、逆にアイゼンハワーはチャーチルの意見には反対で「人生には何度か、不可能と思われることを試みることが必要である」とたしなめられてしまう。

アイゼンハワーにとっても「どろどろの混合物」のような軍隊の編成は「不可能であると思われた」。しかし、朝鮮戦争はすでに勃発しており、なによりも西ドイツの再軍備化を優先したいアメリカは、シューマン・プランと

いう大胆な発案により欧州大陸の指導的役割を確立しつつあるフランスの意向に沿うのが最良の選択肢だと考えたのだろう。

チャーチルはまたしても孤立したのである。

イギリスの抵抗むなしく「欧州軍」構想は破棄された。モネの「欧州防衛共同体」もまた、条約が発効することはなく破綻した。

しかし、一九五一年四月一八日、パリで欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）設立のための条約が調印された。

シューマン・プランが実現したのだ。

これまで、対立をしながらもクーデンホーフとともに欧州統合運動を牽引してきたチャーチルは、ECSCの設立によって、完全にその居場所を見失ってしまった。

第二節　沈黙するチャーチル

一九五一年一〇月にチャーチルが首相として政権に復帰したとき、かれの苦悩はさらに深まる。

一九五一年一〇月二五日の総選挙で保守党は勝利を収めた。党首のウィンストン・チャーチルは再び首相として内閣を組閣することとなった。七六歳だった。二六日夜に開票結果を知ったチャーチルは数時間後には組閣作業を始めた。

チャーチルは、欧州統合という重要な政策を担うことになる外相に、次期首相と目されるアンソニー・イーデンを就かせた。

イーデンは欧州統合論者ではなかった。しかし、チャーチルの戦時内閣時代より外相として外交政策にたずさわり、チャーチルの外交方針を誰よりも熟知している人物だ。

欧州統合派では、事務局長としてチャーチルとともに「ヨーロッパ運動」を牽引してきたダンカン・サンディスが供給相に就任した。ほかにも、内相のデイヴィッド・マクスウェルや、住宅相のハロルド・マクミランなど多く入閣させ、それまでのアトリー政権の欧州統合への慎重な方針を転換するかに見えた。

保守党は、野党時代にアトリー政権の欧州政策を「反欧州的である」として強く非難し続けていたからそれは当然のことのように思えた。

しかし、実際にチャーチル政権が運営をはじめても、アトリー労働党政権の外交方針の大幅な変更を試みることはできなかった。じつは、今回の選挙はそれまでの三度の総選挙の中で、労働党が最大の得票数を記録している。しかし、小選挙区のいたずらで保守党が二七議席の僅差で勝つこととなったのである。だから、これまでの労働党政権の方針を大胆に変更することはチャーチルにもためらわれた。

アトリー政権の方針を大幅に変更することができないにもかかわらず、サンディスをはじめとする欧州統合派を多く入閣させてしまったことは、チャーチル自身のジレンマを深いものとするねじれ現象を生じさせることとなる。

きっかけはすぐにやってきた。

チャーチル首相就任の直後の一九五一年一〇月二六日、パリから急ぎの電報が届いた。

シューマンが記者会見で、ヨーロッパの欧州軍についての見解を求められたさいに、アチソンとモリソンが強く奨励してくれる「ヨーロッパ連邦」についての草案を提出するつもりだと述べたのだ。

これに対して、イーデンは慌ててシューマンのもとを訪れ、確認をとり、次のように報告をしている。

M・シューマンはフランス政府がそのような提案の打ち上げのイニシアチブを握ろうとしているなどと述べてはいないと言いました。そのような問題は、ヨーロッパ評議会の大臣閣議で話し合われる問題であるべきだといいました。・・・ブレバン氏は日曜日のマルセーユでの演説でヨーロッパ連邦について言及しましたが、これはかれの自発的で個人的な見解であるとのことです。[121]

シューマンは「連邦化」に言及した覚えはないとイーデン外相に伝えている。そしてそのような問題は「欧州評議会」で話し合われるべきだと述べ、欧州統合プロセスの中心はチャーチルの設立した「欧州評議会」にあるという認識を示している。

しかし、イギリス政府がそのようなシューマンの言及を信じることはなかった。ヨーロッパ大陸の連邦化が実現性を増している事態を重く見ていた。

一九五一年一〇月三一日、イーデン外相のもとに、外務省のピアーソン・ディクソンから「欧州統合」と題する報告書が提出された。これは、欧州統合政策にかんするイギリス政府の立場を明らかにするためのものである。そのなかに「英国の立場」として六項目が書き込まれている。

a. われわれは、政府間ベースのすべての統合への計画に、積極的に関与する準備ができている。

b. 防衛的な考慮、われわれの英連邦との関係、そして英スターリング地域によって、欧州におけるいかなる超国家的な統合にもわれわれ自身とわれわれの政策を従属させることはできない。

c. われわれは誠意と、それらの作業へと緊密に連合するわれわれの希望を保証すべきである。

d. われわれは欧州審議会の諮問的な役割を発展させることを希望する。

e. われわれは、欧州の超国家的な機構や統合計画とイギリスとが連合する方法を考慮する準備をしている。[122]

この報告書では、イギリス政府が「連邦化」および「超国家的な統合」に断固反対する姿勢が明確にされている。しかし、「われわれは、欧州の超国家的な機構や統合計画とイギリスとが連合する方法を考慮する準備をしている」とのべ、大陸ヨーロッパの連邦化の流れに外在的にイギリス政府もかかわっていく「準備をしている」という点が付け加えられている。

野党時代には、保守党議員の多くが参加する「ヨーロッパ運動」はいわば「圧力団体」として機能していた。保守党の政策は欧州統合に深くコミットすることであり、チャーチルは先頭に立って自らが欧州統合を牽引していくことを旗印として掲げていた。

しかし、首相となり、イギリスの国益を一身に担った現在のチャーチルにはそれができなかった。報告書にはイギリスが欧州統合を牽引するべきであると主張する姿勢を読み取ることはできない。かわりに、大陸ヨーロッパの統合にたいして、極めて否定的な態度ばかりが目立つ。つまり、チャーチルは自らが批判していたアトリー政権の欧州統合政策をほとんどそのまま引き継いでしまった。にもかかわらず、閣内にはヨーロッパ運動の中心人物であるサンディスらが入閣しているのである。かれらのチャーチルにたいする圧

力は凄まじかった。

チャーチルが設立した欧州評議会の本部がおかれているストラスブールのイギリス政府代表部はいらだちを隠さなかった。レオ・アメリーの息子でイギリス政府代表団のジュリアン・アメリーら保守党議員は連名でチャーチルに長文の書簡をしたためた。[123] この書簡は、厳しい要求で締めくくられている。

諮問委員会におけるイギリスの威厳の回復のために、あなたがなんらかの積極的な行動をとり、統一ヨーロッパの安全保障と経済発展において英国政府がその役割を果たすのだということを示していただきたい。[124]

ストラスブールのイギリス代表団は、欧州統合のリーダーシップをチャーチルが握ることを要求している。しかし、チャーチルにはフランスから主導権を奪い返すことはできなかった。

モネの構想した「シューマン・プラン」はこれまでクーデンホーフやチャーチルが議論を重ねてきた欧州統合プロセスとは明らかに異質なものであった。ジャン・モネがのちに自ら構想したシューマン・プランをふりかえって「もしやり直せるものなら、私は（経済、市場ではなく）文化から始めるだろう」[125]といったというように、シューマン・プランには理念はないのである。

クーデンホーフとチャーチルは「連邦制」か「連合制」か、そしてイギリス連邦と欧州大陸の関係をいかにして構築するかという点で決定的な対立を孕んでいた。しかし、ふたりの議論はアメリカとソ連というふたつの大国の狭間に位置するヨーロッパの復興のために統合するのだという理念の基礎を共有していた。国際社会でのヨーロッパの復権のためにどうするべきかという点で「連邦制」か「連合制」かという対立が生じていたのである。

「連邦制」にすれば、より強いヨーロッパが誕生するが、それは欧州諸国の権限を弱めてしまうことにもなりかねない。一方で、「連合制」のもとに統一されれば、欧州諸国の権限は温存されるが、ヨーロッパとして米ソに対抗できるほどの強さを発揮できるとはかぎらない。

こうした欧州統合のデザインを議論してきたのがクーデンホーフとチャーチルであった。

対照的に、シューマン・プランには欧州連邦、あるいは連合の形成という壮大な理念はなく、石炭と鉄鋼の共有というレベルでの機能的統合に過ぎなかった。

しかし、こうした点がむしろ現実的で、これまでの欧州統合運動がすべて非政府組織によってなされていたのにたいして、シューマン・プランははじめて欧州各国政府が主体的に統合を推進することとなった。西ドイツ、イタリア、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクといった大陸諸国の政府はこぞってシューマン・プランに参加し、ECSCの加盟国となっているのだ。

チャーチルが首相となった時は、すでにシューマン・プランが欧州統合の主流となって、動き出してしまっていたのだ。フランス政府は欧州統合のリーダーとして確固たる地位を築き上げていた。

チャーチルが長いこと温めてきた、イギリス政府主導の欧州統合や、クーデンホーフが半世紀をかけて構想した連邦制による欧州統合のありかたは、欧州を機能的に統合しようとするシューマン・プランによって、過去のものとされてしまっていた。

ある日、イギリスのスタフォード・クリップス蔵相はシューマン・プランの発案者であるモネのオフィスにやってきて、問いただした。[126]

「あなたは、私たちイギリス抜きでドイツとやっていこうというつもりなのですか？」

モネは落ち着きはらって答えた。

「友よ、あなたは私が三〇年以上にわたってイギリスについてよく知っていることをご存知だろう。疑いなく、あなたがたはこの計画にはじめからのってくるでしょう。もし、そうでないとしたら、あなたがた抜きでやります。私は、確信しているのです。あなたがたは現実主義だから、私たちが成功すればその現実を受け入れるとね」

モネは、圧倒的優位な立場に立っていた。もはや、イギリスが欧州統合の主導権を取り戻すことは不可能であった。

チャーチルが、「ヨーロッパ運動」を再興させることはなかった。この時期からクーデンホーフともほとんど連絡を取らないようになっていた。

チャーチルに唯一残された道は、シューマン・プランに加わり、欧州統合プロセスに再びコミットすることであったが、それも厳しい状況であった。

そうしたなか、一九五一年一二月一七日、パリでチャーチルとイーデンはプレバン首相とシューマン外相らフランス首脳と会談をした。

その日の報告書にはチャーチルの発言についてつぎのように記されている。

ミスター・チャーチルは、議論の出発点としてシューマン・プランを取り上げるべきだと提案しました。保守党は特にフランスとドイツの長年の憎しみに終止符を打ち、ドイツをヨーロッパ・ファミリーに再び迎え入れようと約束している点においてこのプランを歓迎します。・・・かれはイギリスがこの構想のすべての点に同調できるというわけではないながらも、イギリスの参加を望んでいる。[127]

シューマン・プランとどのように関わっていくべきなのか、チャーチルには決断できなかったのだろう。「この構想のすべての点に同調できるというわけではないながらも、イギリスの参加を望んでいる」という曖昧な態度はチャーチルの苦悩をよくしめしている。そして立場を明確にできないイギリスはヨーロッパ大陸にとって「厄介なパートナー」という存在に過ぎなくなってしまう。

なにごともできないまま、一九五五年四月、チャーチルは遂に辞任した。八〇歳であった。イギリスが大国としての幻想にしがみついている間に、フランスやベルギー、オランダ、ルクセンブルクといった国々が中心となって欧州統合プロセスは着々と進行していた。

首相辞任後、チャーチルは二度の総選挙を戦い、当選した。しかし、かれが議場にあらわれることはほとんどなかった。

こうして、大英帝国の栄光に固執し続けたチャーチルは、ヨーロッパ統合の表舞台からひっそりと姿を消したのであった。

かつて、ヨーロッパ統合運動の一角を精力的に牽引したチャーチルが、欧州統合論者として語られることは現在ほとんど、ない。

クーデンホーフもまた、欧州統合の表舞台から姿を消していった。以後もこれまでに築き上げてきた人脈をいかして独仏和解の仲介役として尽力したが、歴史の表舞台に再び上がることはなかった。

欧州統合の歴史は、クーデンホーフとチャーチルの対立から、チャーチルとシューマンとの対立へと移った。そして、チャーチルがシューマンとのリーダーシップ争いに破れたとき、もはやクーデンホーフを思い出す人はいなかった。

第三節　忘却

九月も末になると、中欧の夏は終わりを告げ、冬の予感が漂ってくる。その日も朝から厚い灰色の雲が空一面を覆っていた。

九月二二日、チェコのボヘミア地方にある町、ポベジョビッツェ。

ポベジョビッツェは首都プラハの西南二〇〇キロに位置し、ドイツ国境にほど近い町である。ドイツに近いこともあって、第一次世界大戦後、チェコスロバキア共和国が誕生するまでは、ロンスンペルグというドイツ語の名前で呼ばれた町だった。

町の北東に、古城がある。しかし、城とは名ばかりで、実際は田舎町の少し大きめな地主屋敷といったほうが正確だ。

おまけにすでに廃墟で、人が住めるような状態ではない。外から見ると、屋根は崩れ落ち、ところどころに残るクリーム色の外壁はほとんどはがれ、茶色いレンガがむき出しのままだ。前庭は、崩れ落ちた外壁や、変色したレンガなど瓦礫が散乱し荒れ放題である。

わきに目をやる。すると灰色の景色の中に、なにか光ったものを見つけた。

「リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー。ヨーロッパ統合思想の父、チェコ共和国のヨーロッパ連合加盟の道を切り開く」と金色の文字で記してある。

黒の御影石でできた記念碑だ。城の入り口脇の崩れかけた門に掲げられたその記念碑には、末尾に、二〇〇四年五月というチェコがＥＵに加盟した日付が記されている。

クーデンホーフはＥＵができるより前の一九七二年には死んでいるから、チェコがＥＵに入る機会を彼が切り開いたというのは、あくまで比喩的な表現に過ぎない。しかし、本当に、ヨーロッパの人びと、チェコの人びとが日本人を母に持つリヒャルトを「ヨーロッパ統合思想の父」とみなしているのだろうか。

わたしは昼食をとるために入った近くのレストランで、隣にいた五人の老人に城のことを尋ねた。

「あのお城は誰のものですか」

突然声をかけてきたアジア人に対して老人たちは一瞬驚き、活発な議論がはたと止まった。短い沈黙の後で、一人が口を開いた。

「城？城はそこにあるよ」

そうじゃない。聞きたいのは城の場所じゃない。

「わかっています。ただ、あのお城が有名だと聞いたのですが、どうして有名なのですか」

「さあ、古いからじゃないかな。ツーリスト・インフォメーションなら向こうにあるから、そこで聞いてみればいい」

かれらは本当に何もしらないのだろうか。少し質問を変えてみる。

「実は僕は日本から来た学生なのですが、クーデンホーフ＝カレルギーという人について調べているんです。城の前に記念碑があったのですが、そのことについて何か知っていますか。」

「記念碑かい。そんなのがあったのか。知らなかった」

みんなで顔を見合わせる。

「かれの母親は青山みつこと言うのですが」

「ああ、ミツコ！ミツコ！」

といったのは、カウンター越しに話を聞いていた若いウェイターだった。

ウェイターは、ミツコならば知っているというようなそぶりだ。

「有名ですか」
「時々、日本人の観光客がそれで来るからね。日本人なんでしょ」
「詳しいことを知りませんか。彼女のここでの評価は、どのようなものですか」
「さあ、日本人だってことだけだよ。彼女は、ここの城に住んでいたのかい？」
質問をするはずが、逆に尋ねられてしまった。
ウェイターと私の会話を聞いていた老人たちは、さっぱりわけがわからないというように不満げだった。
ウェイターもそれ以上のことは知らなかった。

城の前に設置された市が管理するツーリスト・インフォメーションの事務所だけが真新しかった。
城の中は一体どのようになっているのだろうか。
私はこの城を見にここまでやってきた。しかし、想像以上のひどい状態を目の当たりにして、いくらか戸惑っていた。
午後二時。約束どおりの時間に、城中を案内してくれるという城の管理人が坂道をのぼって町からやってきた。
近くで昼食でも食べていたのだろうか。案内人は茶色い髭を蓄えた口をモゴモゴと動かしながら、笑顔で握手を求めてきた。
前日にインターネットで調べて、予約をすれば城の中を案内してくれることを知り、案内を頼んでおいたのだ。城は現在、ポベジョビッツェ市の管理下にあるということだった。城を修復して、一般客に公開することで町の観光の目玉としようとしているらしいが、一見する限りそれはずいぶんと先のことになりそうだ。

資金がまったく集まらず修復作業が遅々として進まないのだという。
案内をたのんで城内を見せてもらうわけだが、入城料や案内料は請求されない。かわりに、事務所の入り口に募金箱が置いてあり、気持ちの分だけ入れてくれと言われた。
城の修復に使うということだった。
いくらほど入れればいいのだろうか。相場がわからない。私は小銭を入れている右側のポケットを探った。すべての小銭を手のひらにのせて数えてみると六〇コロナ、日本円にして三百円相当だった。たったこれだけでいいのだろうか。不安はあったが、とりあえず小銭を全部入れた。
案内人の方をみると、金額にはそれほど固執している様子もなく、頷いて、ありがとうと言った。それから、「日本から来たのかい？ミツコが目当てだろ」と言った。
ミツコとは青山光子のことだ。
青山光子は、たしかに日本人にとって有名な存在だ。とくに、吉永小百合がＮＨＫの特別番組でミツコの生涯を演じて以来、日本では多くの人が関心を持つようになった。そこから、さまざまな逸話が生まれた。ゲラン社の香水のＭＩＴＳＵＫＯは、ウィーンの社交会で注目を集める青山光子からとられた名前であるといった類いの話だ。
小林秀雄や白洲正子といった門下生を従えた有名な放蕩人だった青山二郎は光子の親戚にあたる。白洲や二郎経由で光子を知る人も多い。
そういった人たちが〝ミツコ〟の足跡をもとめてやってくるのだろうか。
しかし、私がここにやってきた目的は、青山光子ではない。
目当ては、彼女の息子だ。
私が興味があるのは、リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギーだと伝え

ると、管理人はそっちか、というように頷いた。

「ミツコ、ミツコといってやってくる日本人は結構いるが、クーデンホーフ＝カレルギーを目当ての日本人はあまり来ないな。それにしても、こんな田舎町までわざわざ来てくれてありがとう。では、城内を案内しましょう」

城の管理人はそう言うと、廃墟のなかに私を招き入れた。

崩れかけた城門をくぐると中庭があった。

管理人は庭の中央に立って説明をはじめた。

「かつて、ここはロンスンペルグと呼ばれていました。この城はとても古いもので、歴史的価値があります。建築物としての値打ちは結構なものです。建設時より、さまざまな改築が施され、様式が統一されていないため、そのぶん貴重なのです。

また、クーデンホーフ＝カレルギーというハプスブルクの伯爵一家が一九世紀から二〇世紀まで住んでいたことでも有名です。

ハインリッヒ・クーデンホーフ＝カレルギーは知的な人物で歴史を好みました。こわれてしまっていますが、そこにある噴水や壁にある彫刻等は、バロック様式のもので非常に価値が高いといわれています。かれは、いくつもの外国語を自在に操ったそうです。そして、外交官として、トルコの大使館を経て、一八九二年には日本のトーキョーに赴任しました。そこで、かれはミツコという日本人女性と出会い結婚します」

一八九六年、光子とハインリッヒは二人の息子を連れて東京からアルメニア人執事のバビクと共に、ハインリッヒのふる里であるボヘミアのロンスンペルグにやってきた。クーデンホーフはその後、父のハインリッヒが死んでから、一四歳でウィーンの学校に通うまでこの城の中で教育を施されることになる。

そのあいだほとんど、外の世界との接触はなく、まるで双子のような兄のハンスが唯一の遊び相手だった。

クーデンホーフはその時のことを回想録のなかで、次のように綴っている。

ロンスンペルグにおける私の幼年時代は幸福で心配がなく、楽しい夢のようであった。庭園を囲む壁は、われわれを下界の騒がしさから切り離していた。ロンスンペルグの城はそれ自体が一つの世界であり、平和のオアシスであった。[128]

たしかに、この町を一見すれば、「城それ自体が一つの世界」だったのだろうと思う。しかし、「平和のオアシス」という点には疑問を抱かずにはいられない。

クーデンホーフは「平和のオアシス」と言い切ることで、幼年時代の出来事を封印してしまっているように思える。

クーデンホーフの回想録を読んでいて気になるのは、かれがその著作のなかで、自らを正当化することに必死になっていることだ。遠い幼少時代を振り返る描写の中には一点の染みも感じることはできない。

クーデンホーフからこの回想録を贈られたアメリーは「今では取り返しのつかない過ぎ去ってしまった美しい世界をのぞき見るようで、とても興味深い[129]」と感想を記している。

しかし、私は廃墟の古城の中で、クーデンホーフのいう「平和のオアシス」を想像することはできなかった。それは単に、私の想像力のなさというわけではないだろう。

この『回想録』は、ヨーロッパ統合の啓蒙的な意味を含んでいる。だから

自らの誠実さ、偉大さ、そしてヨーロッパ統一思想がどれほど、多くの人びとから支持されたのかをこの本で示しておく必要があったのは確かだ。しかし、いっさいの過ちを認めず、ひたすら成功物語だけを述べられると、不自然さが感じられる。意図的に隠された”何か“を意識させられてしまう。

だから、読み手にとっては「パン・ヨーロッパ運動」の時間的経過を知る資料とはなり得ても、人間クーデンホーフ＝カレルギーを知りうる手がかりにはなりにくい。そこには、年を重ねた人間の深みや渋み、悲哀といったものが完全に抜け落ちている。

執筆当時六八歳であったかれが、隠していたかもしれない”何か“とはなんであったのだろうか。

台所から暗く狭い階段を昇って、三階までやってくる。管理人が説明をはじめる。

「ここは、ミツコが使っていた部屋です。この応接間で彼女は一日のほとんどを過ごしていました。絵を描いたり、本を読んだりしていました」

応接室には暖炉と思われるものがあり、広々としていた。家具が一切おかれていないせいなのか、広い部屋は私にはとても寂しく映った。ミツコはこの部屋で何を思って毎日を送っていたのだろうか。

「奥の部屋が、長男ハンスの部屋ですが、彼はこの応接間を通らずに、自室に入れるように直通のドアをつくりました」

なぜ、ハンスはわざわざミツコのいる応接間を通ることを拒否したのだろうか。ハンスとミツコの間には一体何があったのだろうか。確執だろうか。そうだとすれば、その確執はいつ、どのようにして生まれたのだろうか。

疑問を抱きつつ、管理人に促されて奥にあるハンスの部屋にいくと、異様な雰囲気を味わった。

「ハンスは、気違いでした」

と、管理人は言い、天井を見上げた。

そこにはトランプのクイーンの絵が描かれていた。廃墟となった今もその絵だけがくっきりと残った。

スペードの女王。

それは西洋ではとりわけ悪魔的な意味を持つ。ロシアの作家プーシキンの作品に『スペードの女王』という短編がある。オペラにもなったこの作品では、人間の力を凌駕するなにか特別な力、運命を翻弄する得体の知れない力をスペードの女王は意味している。

ハンスがスペードの女王のどこに魅力を感じたのかは知るすべはないが、かれが運命に翻弄されていたのであろうことは事実なようだ。

「長男であるハンスは、成人すると父親であるハインリッヒの遺産を相続しました。そのなかに、この城も含まれており、彼はここで暮らし続けました」

詳しい話をたずねると、案内人は少しだけハンスの異常さについて説明を加えた。

「ハンスはミイラを愛していました。ミイラはちょうど、その辺りにあったといいます」

管理人は、部屋の右端を指し示しながら話を続けた。

「かれがミイラを愛し出したのは、比較的若い頃からだったといわれています。おそらく十代の後半から二十代前半といったころでしょう」

「どうしてわかるですか」

と、私は質問をした。

「ハンスがラブレターを書いているからです。ミイラにね」

もうこれ以上は知らないというふうに、管理人は話を切り上げてしまった。クーデンホーフは、「気違い」であった兄ハンスをどう思っていたのだろうか。

一九四六年末、クーデンホーフはチェコスロバキア外相のヤン・マサリクに兄ハンスについて述べた手紙を送っている。

親愛なるヤン・マサリク

僕の電報にも電話にもまったく返事がないのでこうやって手紙を書いています。

君が僕に会うのに気乗りしないのは政治的な理由からだけで、個人的な問題ではないと僕は理解しているつもりです。そして近いうちに違うかたちで君と会いたいと思っています。

僕は悲しい知らせを受け取ったところだ。僕の兄がピルゼンの人民裁判所にズデーテンの反逆者として捕まってしまったらしい。

今回の起訴にたいして、判断するすべは何もない。何年もの間兄とは連絡を取っていなかったから。でも、彼の前の弁護士、エドワード・オツカ氏は、ピルゼンから兄の無実を確信していると知らせてくれた。僕が知っている唯一のことは、僕の兄は、そのすばらしい芸術的才能にもかかわらず、早い時期から半分気が狂ってしまっているのだ。だから、僕は家族に成年すると同時に、できるだけはやく補助人の監視下におくべきだと勧めたのだ。

このような状況のもとでは、どんなことも不公平にならざるを得ない。なぜなら、彼の精神状態からかんがえて彼に責任能力はないのだから。

ほんの一粒でさえ真実はないのだから。この拘束は彼の精神錯乱の証拠となるに違いない。

ユダヤ人の妻と非アリウス主義の子供をもちながら、そのような家族の没落と徹底的な破壊を目的に掲げている男とその政党の勝利を願うことなど、僕の兄、つまり気違いしかできないことなのだよ。

この兄の件を却下させるために、司法上の理由に加え、さらに政治的な理由もある。

私がチェコスロバキア内でナチと協力しようと試みていたと、ライプチヒでは、そうしたニュースが報道された。

チェコスロバキアの報道局が数日後に正式に否定したが、ニュースはスイスまで広がっていて、僕のみに限らず、僕の名前が関係する運動にまでひどい被害が及んでいるんだ。

僕の兄の審判が似たような取り間違えと誤解に向かって行くことを防ぐことは出来ない。私は有名人で、兄は無名だからだ。

審判は、したがって必然的に、あなたの忘れがたい父の理念に大きく鼓舞され、チェコスロバキアの未来を救う使命を帯びている運動に甚大なる被害を及ぼすでしょう。

そしてチェコスロバキアは分断されたヨーロッパで、巨大なふたつの世界の戦場となる地なのです。

これによってもたらされる被害は、チャーチルのイニシアチブを通して新たな趨勢を受け取りました。そして、それは兄の審判の却下と彼を不快な外国人としてバイエルンに追放することを防げるでしょう。

あなたに主張します、旧友の名の下に、あなたの勇気でつないでください。法務大臣にこの審判を却下するように頼んでください。[130]

書簡に書かれているとおり、ハンスはユダヤ人の妻をもっていた。にもかかわらず戦時中、かれはナチスを擁護した。そのため終戦後、ナチスの支援者としてチェコスロバキア政府に拘束され、裁判にかけられているのだ。ハンスの境遇を察して、「法務大臣にこの審判を却下するように頼んでください」とマサリクに懇願している。

しかし、「唯一の遊び相手」ハンスへの愛情をこの書簡のなかに読み取ることはできない。

かわりに、クーデンホーフが気にかけているのは自らの「パン・ヨーロッパ運動」への影響であった。ハンスが有罪になり、自分までもナチスの支援者として誤解されることを恐れている。クーデンホーフのマサリクへの懇願は、決して兄への純粋な愛情からきているわけではない。

クーデンホーフにとって、かつての唯一の遊び相手であった兄ハンスはたんに煩わしい存在にすぎなかったということだろうか。

そんなことを考えながら、管理人に導かれて、今度は昇ってきたのとは反対側の階段を下りると、ハインリッヒの書斎があった。

「ここは書斎兼図書館でした。かつては何百冊もの本があったといいます」

今は本など一冊もなく、書斎としての形跡はまったく残っていないが、リヒャルトの回想録のなかのロンスンペルグの描写のなかでは、父親の書斎だけかなり詳しく書き込まれている。

この部屋は大きく、明るく、真ん中には紙や書類でおおわれた長い机があった。机の真ん中には、日本から持ってきた美しい、くすんだ金色の仏像がたててあった。周囲の壁は万巻の書籍で埋め尽くされていた。これらの書籍は父が自ら集めたものである。これらの書籍は美しい装幀ではなかった。なぜなら、父は書物道楽でなかったからである。どの書物も父の趣味にあう特殊のものとか、または父の仕事のどれかに関係を持ったものであった。この図書室の周囲の黒ずんだ木の柱には、ソクラテス、プラトン、マルクス・アウレリウス、アリストテレス、カント、ショーペンハウエルの如き偉大な哲学者の実物大の胸像が立ててあった。これらの哲学者の間に挟まって、キリストの胸像とミケランジェロのモーゼ像が立ててあった。さらにまた、ゲーテ、シーラー、ホーマー、アポロおよびナポレオンの小さな胸像が台の上に立ててあった。入口の扉の上方には着色した珍しいツァラトウストラの像が掛けてあり、壁の窪みには回教の教文コーランが書き込まれてあった。[131]

ハインリッヒの書斎に関しては、クーデンホーフの回想録を読んでいれば、わざわざここに来る必要はなかったかもしれない。

回想録からはほとんど伝わらない当時の城の様子の中で、ただひとつ、このハインリッヒの書斎だけは、鮮やかな色彩を放っている。現在の崩れかけた実物の部屋より、クーデンホーフの記述の方がより具体的に当時の状況を教えてくれる。

ではなぜ、それほどまでに父親に関する記述だけが突出するのだろうか。おそらく、それは父の死の時期に関係している。クーデンホーフにとって、父の死はあまりに早すぎた。かれが、わずか一一歳の時のことである。早すぎる父の死は幼い子供に完璧な父親の記憶だけを残した。

だからクーデンホーフは父親をほとんど神格化している。そのことにはクーデンホーフ自身も気づいていたようで、父親について次のように書いている。

父は私の記憶の中で、人間の理想として、換言すれば、賢明で、善意があり、勇敢で、推量があり、太っ腹で、公平な、真のジェントルマンとして残っているのである[132]

死んだ父親の神格化。それは決して非難されるべきことではない。生きていく上で、人が絶対的な精神的拠り所を獲得することはむしろ重要だとさえいえる。

クーデンホーフの甥のミヒャエル氏は、クーデンホーフの人柄を評するとき、次のように言った。

「叔父はジェントルマンでした。決して争いごとは起こさなかった。問題が起っても穏やかにすぐに解決してしまう。ときにはお金をポケットからさっと取り出して相手の怒りを鎮めることもありました。叔父が感情的になったり、怒ったりしているところを見たことはありません」[132]

それはクーデンホーフの描くかれの父親とそっくりであった。クーデンホーフは常に父親を意識し、その存在に近づこうとしていたのだ。

クーデンホーフにとって絶対的な存在であった父親は、日本人の女性と結婚し、子供たちを「コスモポリタン」として育てた。父親の教育方針についてクーデンホーフはこう書いている。

われわれの父はわれわれが二つの文化の間に挟まれて成長することを好まず、われわれの素性にもかかわらず、いっさいの国家的偏見にとらわれないで、真のヨーロッパ人として教育されることを欲していた[134]

「真のヨーロッパ人」としての教育をうけて育てられたクーデンホーフは、ロンスペルグ城を「コスモポリタンのオアシス[135]」と表現している。

クーデンホーフは、「真のヨーロッパ人」になることを望んでいた。「真のヨーロッパ人」になるために、クーデンホーフは「ヨーロッパ人」という新しい居場所をつくりださなくてはならなかった。

それが、「パン・ヨーロッパ」という、かれのヨーロッパ統合運動のはじまりだったのではないだろうか。

言い換えれば、コスモポリタンであり、どこの国民でもないという意識が、かれの人生の原動力となっていたということだ。

そう考えると、クーデンホーフが抱えた最大の強みはかれが国家を背負っていなかったということである。しかし、それは同時に最大の弱点でもあった。

「パン・ヨーロッパ運動」はヨーロッパ中に支部を設立し、あらゆる党派を越えた集団となった。しかし、その結束は必ずしも強いものではなく、第三章で見てきたように、チャーチルやサンディスらによって分裂され、弱体化していくこととなった。その結束の弱さの最大の要因は、国家的な基盤を持っていなかったという点にある。

クーデンホーフが構想していた超国家的な統合である「ヨーロッパ連邦」の創設のためには、ヨーロッパのそれぞれの国家がかれらの国家主権の一部を放棄することを決断をしなくてはならなかった。

国家の同意なくして国家の枠組みを超えることはできない。

老練した政治家であるアメリーはクーデンホーフにその重要性をさりげなく伝えている。

・・・君は、いままさに、統合を強引に進めようとする政府の背後に真の愛国心があることを確信しつつあるだろう。これらはそれぞれが相互作用するものだ。愛国心の幅広い基礎なくして、真の統合は達成できない。しかし、愛国心が転じて統合をプロモートしてくれる。だからこそ、より広範な世論に訴えるなかで、これまで政府やきみの背後にいる世論とではなく理念として戦ってきたときよりも一層の努力が必要となるのだ。[136]

ヨーロッパの国々を統合するということは、それらの国家を部分的に破壊することである。にもかかわらず、統合を進めるためには「愛国心の幅広い基礎」が必要だとアメリーは述べている。ヨーロッパを平和と繁栄に導くためのヨーロッパ諸国の統合は、同時にそれらの国家の平和と繁栄を意味している。だから、「愛国心」は統合にとって抵抗勢力であるが一転すれば、統合を促進させる役割を担うことになる。統合と愛国心は「相互作用」するのだ。

このアメリーの書簡にたいするクーデンホーフの返信は残念ながら、残っていない。クーデンホーフはいったい、なんと答えたのだろうか。

国家を破壊するためには国家・国民の同意が必要であるという逆説的な構造にクーデンホーフはすでに気づいていたのかもしれない。国家を破壊できるのは、熱烈な愛国心をもった国民だけであり、愛国心を鼓舞できるのは、クーデンホーフのようなコスモポリタンではなく、国家を背負ったものなのだ。

だからこそ、かれはチャーチルのような国家を背負った権力者に寄り添おうとしたのだろう。

しかし、チャーチルはヨーロッパを統合することを漠然と意識しながらも、国家主権の一部を放擲するようなかたちでの統合にはどうしても賛成できなかった。

チャーチルの抱えた最大の弱点はクーデンホーフとは逆に大英帝国を背負っていたということである。かれは最後まで大英帝国に固執しつづけた。

チャーチルは一九六三年にアメリカ上下両院からアメリカ名誉市民権を与えられた。ホワイトハウスで行なわれた授与式で息子のランドルフが代理で読み上げたスピーチでチャーチルは次のように記した。

私はイギリスと連邦が今や世界のおとなしい小さな役割に追放されたという見解を拒否する。[137]

かつての大英帝国の栄光に固執するチャーチルは、国家主権の一部をあきらめるなどということはできなかった。

クーデンホーフには、ヨーロッパという全く新しい「欧州国家」を創りあげるという理念があり、チャーチルには大英帝国の復活のためにヨーロッパを連合するという理念があった。両者はヨーロッパの統合を掲げつつも、その目的が究極において異なっていた。

これこそが、クーデンホーフとチャーチルの欧州統合理念の対立の構図であり、同時に地域統合の本質的な議論でもある。

欧州統合とは、つまるところ、国家の権限とヨーロッパ全体の利益との間にどのような関係を構築するのかということなのだ。

その点においてジャン・モネの構想した「シューマン・プラン」はこれまでクーデンホーフやチャーチルが議論を重ねてきた欧州統合理念とは決定的に異なるものであった。

シューマン・プランの理念は、シューマン外相が演説でのべたように「たとえ限られた分野であっても、国家主権に対して大胆な取り組み方をする[138]」というものであった。

クーデンホーフとチャーチルにとって、統合を経済分野のみに限定するということはおよそ考えられることはなかった。なぜなら、かれらは米ソの狭間に位置するヨーロッパの行方を考えていたからだ。

たいして、シューマン・プランは「ドイツ問題」の解決のためだけを考えたものであり、ヨーロッパの統合をヨーロッパ内部の問題に留めてしまった。

クーデンホーフやチャーチルが議論したような統合の本質にかかわる理念とは異質なものであった。

歴史は、クーデンホーフとチャーチルには味方しなかった。かれらの議論は決着を待たずして、消えていった。そして、シューマン・プランが欧州統合を牽引していくこととなった。

一九四二年一二月三日のクーデンホーフからチャーチルに宛てられた書簡からはじまったふたりの「欧州統合理念の模索」はこうして幕を閉じた。

私は、歴史の闇へと葬むられたクーデンホーフの故郷をあとにした…。

終章　拡大するヨーロッパ
―クーデンホーフとチャーチルの遺産―

チェコ共和国大統領の警告

二〇〇九年一一月三日、午後三時―。

憲法裁判所の判決には同意できない。・・・なによりもまず、その内容に同意できない。というのは、リスボン条約が発効し効力を持てば、憲法裁判所の政治判断に反してチェコ共和国は主権国家であることをやめなくてはならないからだ。

チェコ共和国大統領ヴァーツラフ・クラウスは、プラハ城内にある大統領執務室でリスボン条約の署名を終えたあと、記者会見の場で激しい口調でそう言い放った。

クラウス大統領はリスボン条約に署名をしたにもかかわらず、発効すれば「チェコ共和国は主権国家であることをやめなくてはならない」と厳しい口調で警告したのだ。

しかし、チェコの人びとの反応は意外なものだった。「主権国家ではなくなる」というクラウス大統領の警告に対して、特に驚かなかったのだ。

わたしのチェコの友人で一般企業に勤めるマルティン・ミレルはクラウス大統領の発言についてつぎのように述べた。

「クラウスは、チェコは主権国家ではなくなり、チェコがなくなるような表現をしました。ならば、大統領を辞めればいいのではないでしょうか」。

マルティンは、クラウス大統領が国家主権を侵すような条約に署名したのを批判しているのではない。かれにとって、国家主権が侵されることは、クラウス大統領が警告するほど重要な問題ではない。だから、リスボン条約の発効によってチェコの主権が侵される危機を声高に叫ぶクラウス大統領にたいして冷ややかな反応を示す。

このような反応を示したのは、なにもマルティンひとりに限ったものではない。

「チェコは主権国家であることをやめなくてはならない」と、クラウス大統領が断言したその日、チェコの新聞「ドネス（今日）」のインターネット版アンケートが行なわれている。[139]

「クラウス大統領の主張どおり、リスボン条約によってチェコ共和国は主権国家でなくなると考えるか」という質問に対して、二万七七九人が主権国家ではなくなると答えた。主権国家であり続けると答えたのはわずか一万三千一〇〇人に過ぎなかった。

アンケートに答えた六〇パーセント以上のチェコの国民がチェコは主権国家ではないと判断しているのだ。

チェコは大国ドイツやポーランドに囲まれた小さな国だ。二〇〇八年三月には、EU市民の域内移動の自由を保証するシェンゲン協定が発効され、空路・陸路を問わずパス・ポートなしで国境を行き来できるようになった。こうした変化は、市民にとって国境が消滅したように感じられるのだろう。

おおきな衝撃となったのは移動の自由だけはない。二〇〇九年初旬ロシアからヨーロッパ向けの天然ガスの供給がストップし、ヨーロッパ経済が危機に陥ったことはチェコの人びとの記憶に新しい。かれらは、国内経済がEUの向こうにあるロシアに左右されているという実態をあらためて思い知らされた。

政治的にも経済的にも完全には自律的な政治決定が行なえない。もはや純粋な意味での主権国家ではないという意識が具体的な体験をとおしてチェコの人びとの間に広がっているだろう。

クラウス大統領はそうした現実に対して憤っているが、チェコの人びとは冷静に受け入れている。

自律的な政策が行なえないという実態に対して好意的であるか否定的であるかの判断は別にして、EUが加盟国の国家主権にまさる権力を持つと考えるクラウス大統領やチェコの人びとがいだくEU像は、クーデンホーフの描いていた「パン・ヨーロッパ」に通じる。

クーデンホーフは、加盟国の国家主権に優越する連邦政府を創りあげることを構想していたからだ。

加盟国が主権の一部を連邦政府に委譲することで、強いヨーロッパが誕生することをクーデンホーフは目指した。強い連邦政府によって統合されれば、クラウス大統領のいうとおり加盟国は「主権国家であることをやめなければならない」。そのかわりに、EUとしての結束力は強まり、アメリカやロシアに匹敵する勢力となれるのだ。

クラウス大統領の解釈が正しいければ、リスボン条約の発効によって、半世紀以上昔にクーデンホーフのまいた種が半ば花開いたということになる。

チャーチルの統一ヨーロッパ

クラウス大統領が「主権国家であることをやめなくてはならない」と考えている一方で、主権国家であることを当然の前提としてEUに加盟している対照的な国家もある。

一時期、EU大統領の最有力候補として名前が挙がっていたトニー・ブレアが首相を務めた英国もそのうちのひとつだ。

二〇〇六年五月二六日、当時首相だったトニー・ブレアは、アメリカのジョー

ジタウン大学でおこなった演説[140]のなかで相互依存と外交の重要性について触れている。

この演説は、ブレアのEU観、国際政治にたいする姿勢をよく表している。ブレアは演説の冒頭でアジアの通貨危機とコソボ紛争がヨーロッパの経済、政治にきわめて大きな影響を与えたことを語り、つぎのように続けた。

この二つの出来事がわたしに教えてくれたのは、国際政治のルール・ブックはもはや切り裂かれてしまったということです。

どこかの地域の危機はすべての地域の危機という意味での相互依存は、これまでの伝統的な国益という観点をあざけ笑っているのです。首尾一貫した国際社会という視点なくして、国益については考えられないのです。・・・国際社会は協調して効果的に問題に取り組まなくてはなりません。それもたんに状況への反応というわけではなく、事前に行動を起こさなくてはなりません。ここに、大きな困難が待ち受けています。・・・つまり、いいたいことは、そのような行動は共通の信念や価値観が公正に共有されていなければ難しいということです。協調行動は、共通の価値観が築かれてはじめて行なえるのです。だから、われわれが直面している挑戦を効果的にするためには、組織化され、世界価値を追求する国際社会を築かねばならないのです。それは自由、民主主義、寛容さと正義です。それはわれわれが信じる価値であり、すべての国家、宗教、人種を越えた普遍的価値です。

ブレアは、グローバル化し、相互依存が深まった現代の国際社会の構造を極めて明解に論じている。国家と国家の境界線がぼやけてきた現代の国際社会では、もはや自国の国益のみを追求するという「国際政治のルール・ブック」は通用しない。国益を論じようとすれば、必然的に国際社会全体の問題を考慮しなくてはならなくなってくる。だから、一見自国に関係のないと思われるような問題にたいしても、国際社会が協力して効果的に取り組む必要があることを解いている。

しかし、重要なのは、つながった世界だからこそ「協調行動」が必要というブレアは、むしろ国家主権を大前提のものとして考えている点だ。

各国が主権をもって外交を行なうという前提に立っているからこそ「共通の信念や価値観」を築く必要があると主張することとなる。

EUは「多様性の中の統一」を旗印に掲げ、「多様性」を維持しつつ「共通の信念」をもって、統一しようとしている。

この維持される「多様性」とは、ブレアにとっては、国家主権は温存されるということなのだろう。

イギリスはいまだ共通通貨ユーロにも、移動の自由を保証するシェンゲン協定にも参加していない。しかし、ブレア首相時代には、EUへの拠出金の額はイギリスが第二位となっている。主権は維持しながらも、経済的な協力関係を深めていこうとする考えは、ウィンストン・チャーチルの統合論に通じる。英連邦のような緩やかな協力関係を想定していたチャーチルは、国家主権は完全に温存されるべきであると考えていたのだ。

ブレアはEU大統領に選ばれなかった。しかし、ユーロにもシェンゲン協定にも参加していないイギリスのブレアが最有力候補として名前が挙げられたという事実は重要だ。EUが主権を維持することを前提と考える国家を許容できる体質だということを如実にあらわしている。

これは、チャーチルの構想したEU像にきわめて近いものである。

クーデンホーフとチャーチルの遺産

これまでにのべてきたように、EUはふたつの顔をもっている。

国家主権を制限する顔と、制限しない顔だ。

チェコ共和国のクラウス大統領とブレア前英国首相がいだくEU像の相違は六〇年前のクーデンホーフとチャーチルの対立を想起させるものである。

本稿を通して考察してきたとおり、クーデンホーフとチャーチルの往復書簡には欧州統合の「ありかた」が議論されていた。

クーデンホーフとチャーチルの議論の根底には、アメリカとソ連に対してヨーロッパはどのようにして振る舞うべきなのかという国際政治にたいする現実的な視野があった。

現実的な視野を基礎として繰り広げられた欧州統合の「ありよう」をめぐる議論は、ヨーロッパという地域と国家の関係をどうするのかというものだった。

より結束した「パン・ヨーロッパ」を創りあげるべきだと考えたクーデンホーフは連邦制による統一を主張した。加盟国の国家主権を制限し、ヨーロッパ全体として共通の利益を掲げることで、アメリカとソ連に対抗する勢力を築き上げようとした。

対照的にチャーチルは各国の主権をみとめ、連合制による統一を構想していた。国家主権を制限せずに統合すれば、加盟国同士の国益の調整が必要となってくる。さらに、ヨーロッパとアメリカとソ連の間の国益の調整も必要だ。チャーチルは、その調整をイギリスがアメリカとソ連とヨーロッパの間に立って行なうことで、国際社会の均衡を築き、さらにイギリスの復権にもつながると考えた。チャーチルは、国家主権を前提とした「外交」を重視したのだ。

しかし、こうしたふたりの本質的な議論の対立は、閉塞的な事態を生み出してしまった。

なぜなら、理念と理念の対立は決して議論によって決着がつくものではないからだ。クーデンホーフが連邦制による統一がヨーロッパに平和をもたらすと考えるのと同様に、チャーチルは連合制による統一がヨーロッパに安定と繁栄をもたらすと考えていた。このふたつの構想はどちらも理にかなっている。だから決して論争が終わることはなかった。

本来ならば、統合プロセスを開始するにあたって、ヨーロッパはどちらかの統合理念を選択するべきだったのかもしれない。選択し、決断することが政治の唯一の役割だからだ。しかし、ヨーロッパは決断を行なわないという決断をおこなった。

第三の道を選択したのである。

シューマン・プランである。

統合に関する理念の闘争を停止させ、石炭と鉄鋼のみの統合からスタートさせるというシューマン・プランは硬直した状況を打開する突破口となった。

シューマン・プランは、地域と国家との関係にかんする議論を封印した。そうすることで、国家主権に関する議論はあいまいなままにされながら統合を開始したのだ。

では、国家と欧州全体の関係をあいまいなままにして統合を推進していった現在のEUの特徴とはなんなのだろうか。

それは、拡大政策である。

拡大政策は、国家と欧州全体との関係を明確にせずに、政治的分野の統合

を可能にしたのだ。

国家主権を制限しようとする勢力にとって、拡大は国家主権の相対的な低下を意味した。なぜならば、多くの国家が加盟することで国家の相対的な価値が低くなるからだ。多くの国家によって構成されることで、むしろそれぞれの国家主権の存在意義・価値が薄まることになる。

対照的に、国家主権を守ろうとする勢力にとって、拡大は国家主権の相対的な向上を意味した。なぜならば、拡大によって加盟国をふやすという作業は、国家の存在を強く意識させるからだ。拡大によって新たな「国家」が加盟したと捉えることにより、EUが国家の集合体であるという認識は、より強まる。

国家主権を制限しようとする勢力と国家主権を維持しようとする勢力が拡大を支持する意図は完全に対照的だ。

しかしだからこそ「拡大」は両者が望む政策となったのだ。国家主権を制限しようとするものと、守ろうとするものが、たがいに自分たちの主張を正当化するために拡大政策が行なわれている。

いいかえれば、国家主権のありかたにかんする議論が続くかぎり、EUは拡大し続けるのだ。

よみがえるクーデンホーフとチャーチルの往復書簡

本稿ではEUの原点ともいえるクーデンホーフとチャーチルの往復書簡を丹念に検証した。ふたりの議論のなかでもっとも激しく対立したのは、国家主権のゆくえであった。

しかし、クーデンホーフとチャーチルの双方が欧州統合の表舞台からいなくなってしまったことで、国家主権を制限する連邦制か制限しない連合制かの選択は行なわれなかった。

国家主権のゆくえをあいまいなままにして統合プロセスが開始されてしまったことが、拡大し続けるEUの原点であったことは本章で議論してきたとおりである。

EUはシューマン・プランによって欧州石炭鉄鋼共同体として、その統合プロセスを開始したときから「拡大」という宿命を背負い続けてきたのである。そして拡大することこそがEUをEUたらしめていたのだ。

蛇足かもしれないが、拡大を続けるEUが抱える不安要素にも触れておきたい。

わたしのチェコの友人のマルティンは、リスボン条約の発効とEU大統領の誕生についてつぎのように述べた。

「EU大統領が誕生したことは、嬉しいことだとおもいます。チェコは独立していればロシアの影響がそれだけ強くなると思うからです。EUが全体として強くなれば嬉しいです」。

ベルリンの壁が崩壊して二〇年を経た現在、ファン・ロンパウEU大統領の誕生によってロシアに対して新たな壁が築かれることを願っているのだ。

マルティンのような壁を求める人びとが増えてきていることはまぎれまもない事実だ。過去最低の投票率を記録した二〇〇九年六月の欧州議会議員選挙では、EUの拡大に疑問を抱くEU懐疑派や極右政党出身者一二〇名の新人が当選している。[141]

ブレアが述べるように、グローバル化し、世界は繋がり、国益を基準とした「国際政治のルール・ブックはもはや切り裂かれてしまった」ときに、皮

肉にも人びとは壁を求めだした。

しかし、これまでにも述べてきたようにEUは拡大をやめて「壁」を築くことはできない。

現在、EUにはクロアチアが二〇一二年加盟を目指している。さらに、モンテネグロ、マケドニア、アルバニアも加盟申請をしている。

EUはリスボン条約の発効により、深化をとげ、さらに拡大しつづけている。これはEUの勢いを象徴するものである一方で、内部の市民の不信感が増すことにも繋がる。

壁を求める人びとの希望が失望に変わったとき、EUはどう対応するのだろうか。

EUは拡大することで求心力を保っているが、その拡大こそがEUを分裂に導くきっかけとなりかねない。

EU拡大のダイナミズムがその崩壊の要因を孕んでいるのである。

研究を終えて

本論文を執筆中、あらためて松本清張氏の多くの作品に触れ、深く感銘を受けました。

清張氏の描く歴史は人間に焦点を当てているように思えます。

人間は、学問的な枠組みで捉えられるように合理的に行動するものではありません。感情や感覚に基づいて、一見不合理とも思える行動をとるものです。そうした不合理な行動をする人間によって歴史が築かれているという当たり前の事実を清張氏は描き出したように思えます。

そうした、歴史観に影響を受けながら執筆したのが本論文です。

注

1 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四八年三月二五日。

2 コペーの古文書館には、往復書簡にかぎらず、クーデンホーフの多くの私文書が遺されている。

クーデンホーフの死後、かれの個人秘書であるポンス氏が保管していたが、一九九五年のポンス氏の死にともなって、ジュネーブ大学に寄贈されたからだ。これらの史料は、故人のプライベートに関わるため一般に出版されることはなく、史料館でしか閲覧は許されていない。

正確には、クーデンホーフが出版した雑誌、新聞記事、メモランダム、パン・ヨーロッパ運動に関係する政治運動や会議の議事録および資料など膨大な量の史料が保管されている。しかし、それらはかつて公開されたものばかりだ。古文書館に遺されている私文書のなかで、これまで一度も公にさらされたことのないものはやはり往復書簡ということになる。

往復書簡から歴史を紡ぎだすという作業は、公表されることのない事実を後世のひとが知ることのできる唯一の手段なのかもしれない。

もちろん、「個人的な体験」が綴られた往復書簡には、客観的な歴史的事実と相違する事実が書かれていることもある。しかしそれは決して「嘘」や「間違い」ということとは同義ではない。書簡の書き手の認識によって現実が判断され、そのプリズムを通して語られたのだ。それは別のかたちをとった、ひとつの紛れもない「真実」なのである。書き手の認識と史実との相違は、書き手の意図を浮かび上がらせる重要な手掛かりとなるのである。

これらの往復書簡をつかって歴史を記述することで、かれらの「個人的な体験」を歴史の文脈のなかに位置づけることが可能になるのではないだろうか。これまでの欧州統合史研究は個人がつむぐ歴史的事実をできるだけ排除して理路整然と語ることに力を注がれてきたように私には思われる。苦悩をかかえた、不合理な行動をする人間の営為の積み重ねが歴史を作っているという当たり前の事実が忘れられているのだ。そうしたなかで、歴史の事象の影に隠れた個人的な営みを浮き彫りにすることができれば、これまで歴史のなかに埋もれた秘話を描き出すことができるかもしれない。

もちろん、書簡の内容と史実をすりあわせる作業は不可欠である。そのために、書簡を引用するさいに、その書簡がかかれた歴史的背景をできるかぎり詳しく記述した。

しかし、往復書簡を安易に引用することは危険を伴っている。

往復書簡をあつかうさいに最も注意しなければならないことは、クーデンホーフ自身が、書簡やメモランダムが後世に遺されることを期待していたかもしれないという点である。いいかえれば、クーデンホーフは、自己の政治活動を正当化するために史料を遺したかもしれないのである。そうだとすれば、それは純粋な「個人的な体験」とはいいがたし、もし仮に安易に引用をしてしまえば、私はかれらのプロパガンダを行っているということになってしまう。

資料館に保管されている往復書簡は一九三八年以降のものだけで下書きを含めて数千通におよんでいる。これほど大量の書簡を几帳面に保管し続けていたのは、クーデンホーフが後世に史料として遺すことを意識していたとも考えられる。

クーデンホーフは、一九四〇年と一九五〇年に二度、ノーベル賞に推薦されており、自己の評価を強く気にするようになっていた。

一九四〇年にクーデンホーフをノーベル賞委員会に推薦したのは、イギリスの外交官ハロルド・ニコルソンたちだった。一九五〇年には、ニューヨー

ク大学のアーノルド・ザーヒャー教授からノーベル賞委員会に推薦されているが、二度とも落選している。

二度の落選を経験したクーデンホーフが、生前から自己の政治活動の有効性を積極的にアピールする必要性を強く認識していたとしても不思議ではない。こうした経緯を踏まえれば、クーデンホーフが自己の政治運動の正当化のために史料を意識的に遺そうとした可能性は高い。

そうだとすれば、クーデンホーフの遺した史料を扱うさいに、次の二点を慎重に考慮する必要が出てくる。

第一に、書簡の保存自体が意識的に取捨選択されていた可能性である。自分にとって好ましくないもの、第三者の目に触れられては困るものは、あらかじめ捨てられるか、もしくは別の場所に保管されているのかもしれない。

第二に、書簡そのものが、のちに第三者によって読まれることを意識して書かれた可能性である。書簡そのものは個人的なものであるが、史料として遺されることを考え、第三者の目を意識して執筆されていたとすれば、自らの都合のいいように事物を解釈し、自らの政治活動の正当化の手段として利用しているかもしれない。

第一の問題にかんしては、意図的かそうでないかの判断はできないが、紛失した書簡の存在を確かめる方法はある。

クーデンホーフらの往復書簡の書き出しはほとんどの場合「何月何日の手紙をありがとう」という文面から始まっている。この部分に注意をむけることで、紛失している書簡がわかる。本稿では、実在するべき書簡にもかかわらず、史料館に保管されていないと思われるものについては、適宜指摘した。もちろん、紛失した書簡の内容を把握することはできないが、紛失しているという事実を記すことは重要である。

第二の問題にかんしては、前述したように史実と照らし合わせるという作業を行なうことで、意図的に史実を歪曲し、自己の政治活動の正当化を行ってはいないことがわかった。

以上の二点を十分考慮して、書簡の引用にさいしては、できるだけ長く引用することを心掛けた。

そうすることで書簡の全体的な流れが把握でき、自己の政治活動の正当化につながるような歪曲した記述になっていないかどうかの判断がしやすくなるからだ。

また、書簡の全体的な流れが把握されていないと、書簡でのべられていることの核のようなものを逆に見失ってしまうこともあり、そうなると書簡のもつ意義そのものが力を失ってしまう。同時に、部分的な引用はその引用の仕方次第で書簡の執筆者の本来の意図を歪曲してしまうこともある。そうした危険を極力回避し、説得力を持たせるために流れのなかで、内容として余計だと思われる部分も含め、できるだけ書簡を長く引用することとした。

3 ウィンストン・チャーチル『第二次世界大戦（上）』河出書房新社、一九七二年、一三頁。

4 『クーデンホーフ・カレルギー全集七』鹿島研究所出版会、一九七〇年、八六頁。

5 『クーデンホーフ・カレルギー全集七』鹿島研究所出版会、一九七〇年、八九頁。

6 『クーデンホーフ・カレルギー全集一』鹿島研究所出版会、一九七〇年、五二頁。

7 『クーデンホーフ・カレルギー全集七』鹿島研究所出版会、一九七〇年、二六頁。

8 クーデンホーフが世界的な広い視野で国際情勢を俯瞰できたのは、パン・ヨーロッパ構想に限らない。たとえば、一九四一年に執筆した「アメリカ合衆国からイギリスへの貿易促進のための提案」では、イギリスのアイスランド統治を巡って、アイスランドからアメリカの介入を促し、アイスランドを仲介点としてイギリスとアメリカの貿易促進をはかるという方法を提案している。

9 クーデンホーフ、メモランダム「アメリカ合衆国からイギリスへの貿易促進のための提案」一九四一年。

10 A・J・メイア『ウィルソン対レーニンⅡ』岩波現代選書、一九八三年、一九六頁。

11 カリフォルニア大学・・・・

12 Franck Thery, Construire l'Europe dans les annees vingt, Institut europeen de l'Universite de Geneve 一九九八、一六〇―一七七頁。

13 『クーデンホーフ・カレルギー全集二』鹿島研究所出版会、一九七〇年、一二頁。

14 一九二四年、パン・ヨーロッパ同盟オーストリア支部の最初の議長はイグナーツ・ザイペル首相であった。社会民主党のカールレンナーが副会長に就任した。本部はウィーン王宮に構えた。月刊誌「パン・ヨーロッパ」の定期購読料を主な資金源としていた。

15 ハロルド・ニコルソン

16 ウィンストン・チャーチル『第二次世界大戦（下）』河出書房新社、一九七二年、六六頁。

17 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四二年一二月三日。チャーチルとの往復書簡は一九四一年九月一日にクーデンホーフが送ったのが最初であるが、「ヨーロッパの統合」について言及したのは、この手紙がはじめてのものである。

18 チャーチルはイギリス人で唯一「ブリアン構想」に賛成している。「ブリアン構想」とは、一九二九年に国際連盟総会の場で当時のフランスの首相でパン・ヨーロッパ同盟の名誉総裁でもあったアリスティード・ブリアンが提唱したヨーロッパ統合構想である。また、戦後すぐに、イギリス政府は第三勢力構想を打ち出し、ヨーロッパがアメリカ、ソ連につぐ第三の勢力を築くべく、統合を視野に入れた話し合いがされている点も重要だ。

19 Churchill Speech 1943 Post - War Reconstruction、『クーデンホーフ・カレルギー全集七』、鹿島研究所出版会、一九七〇年、二八三頁にて引用。

20 一九四〇年七月一四日に六四％の聴取率を記録した。河合秀和『チャーチル』中公新書、一九七九年、二七一頁を参照。

21 河合秀和『チャーチル』中公新書、一九七九年、二五〇頁。

22 ダフ・クーパーからクーデンホーフへの手紙。一九三九年一二月二九日。

23 ハロルド・ニコルソンからクーデンホーフへの手紙。一九四〇年一月一六日。

24 細谷雄一「イギリス外交と戦後ヨーロッパ秩序の模索、一九四七―四八」、『法学政治学論究』第三三号、四一五頁。

25 細谷雄一「チャーチルのヨーロッパ合衆国論」『北大法学論集』五二号で、細谷はこの時期のチャーチルの演説などを参照し、どれも具体的な政策内容を欠き、文明論の域を出ていないことを指摘している。

26 Website of "Council of Europe" 演説原稿 http://www.coe.int/T/E/Com/About_Coe/DiscoursChurchill.asp 演説の肉声。チャーチルのチューリッヒ大学での「ヨーロッパ合衆国演説」

は、録音が残され、今でも聞くことができる。
http://www.coe.int/t/dgal/dit/ilcd/Fonds/Churchill/Default_en.asp

27 クーデンホーフからチャーチルへの電報。一九四六年八月二三日。

28 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四六年九月二三日。

29 『クーデンホーフ・カレルギー全集七』鹿島研究所出版会、一九七〇年、三一二頁。

30 チャーチルからクーデンホーフへの電報。一九四六年九月二七日。

31 『クーデンホーフ・カレルギー全集七』鹿島研究所出版会、一九七〇年、三一四頁。

32 サンディスからクーデンホーフへの手紙。一九四六年九月二七日。

33 サンディスからクーデンホーフへの手紙。一九四六年一二月四日。

34 クーデンホーフからサンディスへ。一九四六年一二月四日。

35 「統一か分裂か?発送名簿(Einheit oder Freiheit? Versand)」と題されたクーデンホーフの手帳には、ドイツ、フランス、イギリスをはじめとするヨーロッパ各国とアメリカなどの主要国の数百名におよぶ人物の名前と住所が記されている。これは著書「ヨーロッパ―統一か分裂か?」の送り先を記したものと思われるが、同時に、当時のかれの人脈の広さをうかがわせる貴重な史料である。

36 イギリスの外交官ハロルド・ニコルソン(一八八六―一九六八)は著書『外交(Diplomacy)』のなかで、君主主権が確立していた第一次世界大戦前までは、「大使が被派遣国君主の信頼、およびもし可能とあらば、その寵愛を確保することは非常に重要であった」(五四頁)と述べている。また、外交にとって最も重要なのは「外交官職がつくり出すお互いの連帯感である」(七二頁)と述べ諸国の外交官同士の人間関係構築の重要性について指摘している。

37 サンディスからクーデンホーフへの手紙。日付は不明。

38 クーデンホーフからサンディスへの手紙。一九四七年一月二〇日。

39 保守党から六名、労働党から六名、自由党から三名と四名の学者と三名の教会関係者が参加していたが、労働党参加者のうち三名は国会議員ではなかった。Documents on the History of European Integration Volume 3, Walter de Gruyter・Berlin・New York, 1998,pp.668-669.

40 Winston S. Churchill: speech at the Royal Albert Hall on the creation of a united Europe 14 May 1947, Documents on the History of European Integration Volume 3, Walter de Gruyter・Berlin・New York, 一九九八、六七六頁。

41 サンディスからクーデンホーフへの手紙。一九四七年六月五日。

42 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四七年一月二八日。

43 パン・ヨーロッパ運動のシンボルである黄金の太陽と赤十字は一九四七年一二月に行なわれた欧州議員連盟(European Parliamentary Union)で正式に採用される。このシンボルの意味について、クーデンホーフは一九四七年一二月一九日にウィンストン・チャーチルへ送った手紙の中で解説している。(クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四七年一二月一九日。)
また、クーデンホーフがこのバッジを終始身につけていたことは、彼の甥であるミヒャエル・クーデンホーフ氏が証言している。(二〇〇九年六月一六日のインタビュー)。

44 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四七年四月一四日。

45 クーデンホーフからサンディスへの手紙。一九四七年三月二四日。

46 永田実『マーシャル・プラン』中公新書、一九九〇年、三〇頁にて引用。

47 一九四七年一月二八日のクーデンホーフからサンディスに送られた書簡には、「アメリカではダレスに触発されて共和党がわれわれのパン・ヨーロッパ理念に賛同してくれたため、とてもうまく事が運んでいます」と書かれており、ダレス国務長官がヨーロッパ統合を支持し、共和党もそれに触発されて統合支持にまわったという報告がなされている。この書簡には、さらに社会党系政党もクーデンホーフのよびかけによって、ヨーロッパ統合を支持にまわったと報告されている。

48 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四七年三月二七日。

49 フルブライトからクーデンホーフへ。一九四七年一月六日。

50 ヘンリー・モーゲンソーからクーデンホーフへの手紙。一九四一年三月八日。

51 クーデンホーフからフルブライトへの手紙。一九四七年一月一一日。

52 『クーデンホーフ・カレルギー全集七』鹿島研究所出版会、一九七〇年、三一九頁。

53 ジョージ・ケナン『ジョージ・F・ケナン回顧録（上）』読売新聞社、一九七三年、三〇七頁。

54 ジョージ・ケナン『ジョージ・F・ケナン回顧録（上）』読売新聞社、一九七三年、三〇七頁。

55 永田実『マーシャル・プラン』中公新書、一九九〇年、五二―五五頁を参照。

56 ジョージ・ケナン『ジョージ・F・ケナン回顧録（上）』読売新聞社、一九七三年、三〇八頁。

57 ジョージ・ケナン『ジョージ・F・ケナン回顧録（上）』読売新聞社、一九七三年、三一三頁。

58 クーデンホーフ「ドイツとの平和に関する覚え書き」一九四七年一一月二五日。

59 分割の詳細としては、バイエルン、シュヴァーベン、ラインランド、ハノーファー、ザクセン、ブランデンブルグとなっている。

60 マーシャルからクーデンホーフへの手紙。一九四八年三月二二日。

61 ジョージ・ケナン『ジョージ・F・ケナン回顧録（上）』読売新聞社、一九七三年、三一八頁。

62 ジョージ・ケナン『ジョージ・F・ケナン回顧録（上）』読売新聞社、一九七三年、三一八頁。

63 詳しくは、永田実『マーシャル・プラン』中公新書、一九九〇年、一六一―一六三頁を参照。

64 ジョージ・ケナン『ジョージ・F・ケナン回顧録（上）』読売新聞社、一九七三年、三一八頁。

65 マーシャルからクーデンホーフへの手紙。一九四八年三月二二日。

66 ケナンからクーデンホーフへの手紙。一九四八年一〇月一九日。

67 ジョージ・ケナン『ジョージ・F・ケナン回顧録（上）』読売新聞社、一九七三年、三一五―三一六頁。

68 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四九年四月二二日。

69 サンディスからクーデンホーフへの手紙。一九四七年六月二四日。

70 クーデンホーフからサンディスへの手紙（下書き）。一九四七年七月一九日。

71 サンディスからクーデンホーフへの手紙。一九四七年七月二二日。

72 クーデンホーフからG・スミス・ノルウェー下院議長への手紙。一九四七年八月八日。

73 フランスのレオン・ブルムは、この手紙の数ヶ月前の一九四七年一月二二日までフランス第四共和制において首相を務めていた。
74 チャーチルからクーデンホーフへの手紙。一九四七年八月五日。
75 チャーチルからクーデンホーフへの手紙。一九四七年九月一日。
76 チャーチルからクーデンホーフへの電報。一九四七年九月一日。
77 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四八年二月一六日。
78 クーデンホーフからサンディスへの手紙。一九四八年三月一八日。
79 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四八年六月二四日。
80 アメリーからクーデンホーフへの手紙。一九四八年二月二一日。
81 イギリス国会議員アメリー家については、David Faber"The Tragedy of a Political Family"で戯曲にもされている。
82 細谷雄一「統一ヨーロッパをめぐる西欧諸国の協調と対立、一九四八—四九」、『法学政治学論究』三四号、二一六頁。
83 細谷雄一「ウィンストン・チャーチルにおける欧州統合の理念」、『北大法学論集』五二号にて引用。
84 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四七年一二月一九日。
85 『クーデンホーフ・カレルギー全集七』鹿島研究所出版会、一九七〇年、三二八頁。
86 サンディスからクーデンホーフへの手紙。一九四八年三月九日。
87 Political Resolution of the Hague Congress(7-10 May 1948), http://www.ena.lu/political-resolution-hague-congress-710-1948-020000062.html
88 チャーチルからクーデンホーフへの手紙。一九四七年八月五日。
89 細谷雄一「統一ヨーロッパをめぐる西欧諸国の協調と対立、一九四八—四九」、『法学政治学論究』三四号。
90 細谷雄一「統一ヨーロッパをめぐる西欧諸国の協調と対立、一九四八—四九」、『法学政治学論究』三四号。
91 クーデンホーフからデニス・ヘアリーへの手紙。一九四七年八月一五日。
92 クーデンホーフからレイトン卿への手紙。一九四九年三月二九日。
93 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四七年一月二八日。
94 ヘアリーからクーデンホーフへの手紙。一九四九年四月一日。
95 クーデンホーフからヘアリーへの手紙。一九四九年二月二二日。
96 サンディスからクーデンホーフへの手紙。一九四八年三月九日。
97 クーデンホーフからヘアリーへの手紙。一九四九年四月五日。
98 細谷雄一「統一ヨーロッパをめぐる西欧諸国の協調と対立、一九四八—四九」、『法学政治学論究』三四号、二一七頁。
99 アメリーからクーデンホーフへの手紙。一九四八年一〇月一二日。
100 アメリーからクーデンホーフへの手紙。一九四八年一〇月一八日。
101 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四九年一月二七日。
102 Political Resolution of the Hague Congress(7-10 May 1948) http://www.ena.lu/political-resolution-hague-congress-710-1948-020000062.html
103 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四九年四月二二日。
104 チャーチルからクーデンホーフへの手紙。一九四九年五月八日。
105 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四九年五月一七日。
106 細谷雄一「イギリス外交と戦後ヨーロッパ秩序の模索」、『法学政治学論究』三三号を参照。
107 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四九年一一月二日。
108 チャーチルからクーデンホーフへの手紙。一九四九年一二月二二日。
109 アメリーからクーデンホーフへの手紙。一九四九年二月一七日。

110 クーデンホーフからアメリーへの手紙。一九四九年二月二一日。括弧内筆者。

111 クーデンホーフからアメリーへの手紙。一九四九年三月二八日。

112 アメリーからクーデンホーフへの手紙。一九四九年三月三〇日。

113 クーデンホーフからチャーチルへの手紙。一九四九年一二月二六日。

114 アメリーからクーデンホーフへの手紙。一九四九年一一月四日。

115 サンディスからクーデンホーフへの手紙。一九四七年六月二四日。

116 Mr.Bevin to Sir O.Harvery(Paris), Confidential French Proposals for the Intergration of the Western European Coal and Steel Industries, Documents on the British Policy Ocerseas, Series II, Volume I

117 アメリーからクーデンホーフへの手紙。一九五〇年六月一九日。

118 アメリーからクーデンホーフへの手紙。一九五〇年六月三〇日。

119 Address given by Winston Churchill to the Council of Europe (Strasbourg, 11 August 1950)

120 細谷雄一は、「ウィンストン・チャーチルにおける欧州統合の理念」、『北大法学論集』において、チャーチル・ペーパーを用いて「欧州軍」について詳細な検討がなされている。細谷はこれまでの研究でチャーチルの「欧州軍」構想がチャーチル・ペーパーを用いて研究されたことがなかった点を指摘している。そこで細谷はチャーチル・ペーパーを用い、チャーチルの「欧州軍」構想を分析し、それが一九五〇年一二月以降軍事機構化が進む北大西洋条約機構とほぼ等しい内容であり、極めて現実的であったとしている。

121 Sir O. Harvey(Paris)to Foreign Office, Documents on British Policy Overseas, Series II, Volume I (London:HMSO,1986) No.三九一、七四一頁。

122 Documents on British Policy Overseas, Series II, Volume I (London:HMSO,1986) 七四三頁。翻訳は、細谷雄一「シューマン・プランの起源」『法学政治学論究』三五号における引用を参考とした。

123 連名者は、ジュリアン・アメリー、トフトン・ビーミッシュ?、ロバート・ブースビー、ディック・ハーデン、クリストファー・ホリー、チャールズ・ラドクリフ、プリスジラ・トェードスマー?

124 Documents on British Policy Overseas, Series II, Volume I (London:HMSO,1986)、七七一頁。

125 宮島喬『ヨーロッパ市民の誕生』岩波新書、二〇〇四年、一一九頁。

126 Jean Monnet *Memoirs* COLLINS St James's Place, London, 1978, pp.307-308

127 Extract from a record of a meeting held in the Hotel Matignon, Paris on 17 December 1951 at 5.30 p.m., Documents on British Policy Overseas, Series II, Volume I (London:HMSO,1986) No.四一八、七六九頁。

128 『クーデンホーフ・カレルギー全集七』鹿島研究所出版会、一九七〇年、二四頁。

129 アメリーからクーデンホーフへの手紙。一九四九年一一月四日。

130 クーデンホーフからヤン・マサリクへの手紙。一九四六年一二月二日。

131 『クーデンホーフ・カレルギー全集七』鹿島研究所出版会、一九七〇年、二五頁。

132 『クーデンホーフ・カレルギー全集七』鹿島研究所出版会、一九七〇年、三六頁。

133 ミヒャエル・クーデンホーフ＝カレルギー氏へのインタビュー。二〇〇九年六月一六日、茅ヶ崎にあるミヒャエル氏の自宅にて。

134 『クーデンホーフ・カレルギー全集七』鹿島研究所出版会、一九七〇年、

三三頁。

135 同右。

136 アメリーからクーデンホーフへの手紙。一九五三年一月一日。

137 河合秀和『チャーチル』中公新書、一九七九年、三一二頁。

138 細谷千博・南義清『欧州共同体（EC）の研究』新有堂、一九八〇年、八頁。

139 iDNES.cz:http://zpravy.idnes.cz/klaus-podepsal-lisabon-cesko-tak-ztraci-suverenitu-prohlasil-p63-/domaci.asp?c=A091103_145225_domaci_adb（二〇〇九年二月一二日閲覧）

140 Transcript of Tony Blair's Speech at Georgetown University on 26 May, 2006. http://www.reformtheun.org/index.php?module=uploads&func=download&fileId=1510（二〇〇九年六月一二日閲覧）

141 NEWSWEEK, 二〇〇九年九月二三日号、三三頁。なお、欧州議会の議席総数は七三六議席である。

平成二十三年一月三十一日発行

第十一回松本清張研究奨励事業研究報告書

編集・発行　北九州市立松本清張記念館
北九州市小倉北区城内二番三号
電話　〇九三―五八二―二七六一

印刷・製本　㈲プラネット印刷

松本清張研究奨励事業

第14回

募　集　要　項

一、趣　旨　時代を見つめ続けた松本清張の文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見出すことにもつながります。このような視点から、清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を追求する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意により創設しました。

二、対　象　ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）で、これから行おうとするもの。年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

三、内　容　入選者（団体）に二〇〇万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

四、応募規定　今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料など（様式は自由、ただし日本語）を、平成二十四年三月三十一日までに応募してください。

五、選　考　松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

六、発　表　審査終了後、審査結果を直接通知します（六月末頃）。なお、入選者には開館記念日（八月四日）に、北九州市で贈呈式を行います。

七、その他　採用された企画は翌年の六月末日までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館が刊行予定の研究誌に掲載することがあります。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。

八、応募先　〒八〇三―〇八一三　北九州市小倉北区城内二番三号
ＴＥＬ〇九三（五八二）二七六一　ＦＡＸ〇九三（五六二）二三〇三

北九州市立　松本清張記念館